赤ちゃんからおとなまで

聖書教育

2021年 7 8 9 月号

総主題 時代を生きる教会

テーマ みことばに生きる

ヤコブ・エゼキエル

なまえ：

目次

聖書教育 2021 年 7・8・9 月号

テーマ みことばに生きる

教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の全領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。
日本バプテスト連盟 1971 年制定、1999 年改訂
聖書教育ホームページ　https://www.bapren.com/

1　目次

2　プログラム表

3　準備のための聖書日課　川上敏夫

特集・連載

4～　特集　平和メッセージ　杉山 望

6～　特集　コロナ・パンデミック下の難民申請者の子どもたち　佐藤信行

8～　連載　教会学校月間によせて　矢野由美

10～　連載　ともに分かち、ともに生きる　森 淳一

12　執筆者紹介

13　概論　この時代に「エゼキエル書」を読む　鮫島泰子

今号の展開例　第14課～第26課

14～　聖書の学び・成人科　鮫島泰子

16～　みんなで聴く聖書のおはなし　鮫島泰子

17～　青少年科　小川紋子

18～　幼小科　川内活也

92～　暗唱聖句手話　塩山幸子

94～　暗唱聖句カード　新共同訳・口語訳

99　「聖書教育」読者アンケート

100　次号予告

2021 2022

聖書教育 2020～2022年度プログラム

総主題 時代を生きる教会

課	月　日			週題	聖書箇所
14	7月4日	神学校週間	ヤコブ・エゼキエル	聞くだけでは終わらない	ヤコブ1:19～27
15	7月11日			人を分け隔てせず	ヤコブ2:1～13
16	7月18日			上から出た知恵	ヤコブ3:13～18
17	7月25日			主が来られるときまで	ヤコブ5:7～20
18	8月1日			エゼキエルの召命	エゼキエル2:1～10(参照1:1～3)
19	8月8日			主の聖所を背にし	エゼキエル8:1～18
20	8月15日	平和		もはやむなしい幻を見ることもなく	エゼキエル13:8～16(参照13:1～7、17～23)
21	8月22日			主に立ち帰って、生きよ	エゼキエル18:21～32
22	8月29日			立ち帰れ、立ち帰れ	エゼキエル33:10～20
23	9月5日	教会学校月間		主こそ真(まこと)の牧者	エゼキエル34:1～16
24	9月12日			主が建て直す日	エゼキエル36:25～38
25	9月19日			枯れた骨よ、主の言葉を聞け	エゼキエル37:1～14
26	9月26日			真(まこと)の神殿の幻	エゼキエル43:1～12
27	10月3日		詩編・イザヤ・ミカ・ヨハネ	わたしの贖い主よ	詩編19:1～15
28	10月10日			いつもわたしを	詩編23:1～6
29	10月17日			すべては主のもの	詩編24:1～10
30	10月24日			豊かな平和に	詩編72:1～14
31	10月31日			希望に生きる	詩編92:1～16
32	11月7日			光が射すと	詩編119:129～136
33	11月14日			都もうでの歌	詩編131:1～3
34	11月21日			主が望まれるのは	詩編147:1～20
35	11月28日	世界祈祷週間		平和の主よ来てください、この世界に	イザヤ11:1～10
36	12月5日			もはや戦うことを学ばない	ミカ4:1～4
37	12月12日			彼こそ、まさしく平和	ミカ5:1～5
38	12月19日	クリスマス		すべての人を照らすいのちの光	ヨハネ1:1～18
39	12月26日			この方こそ神の子	ヨハネ1:29～34
40	1月2日		マルコ	福音のスタート	マルコ1:14～20
41	1月9日			罪人を招くために	マルコ2:13～17
42	1月16日			ここにわたしの家族がいる	マルコ3:31～35
43	1月23日			五つのパンと二匹の魚	マルコ6:30～44
44	1月30日	協力伝道週間		シリア・フェニキアで	マルコ7:24～30
45	2月6日	信教の自由		目を覚ましていなさい	マルコ13:32～37
46	2月13日			メシアと告白しつつも	マルコ8:27～38
47	2月20日			信仰のない時代に	マルコ9:14～29
48	2月27日			神殿といちじくの木	マルコ11:12～26
49	3月6日			生きている者と共に	マルコ12:18～27
50	3月13日			裏切る者と共に	マルコ14：10～26
51	3月20日			心は燃えていても	マルコ14：27～42
52	3月27日			ペトロの離反	マルコ14：66～72
1	4月3日		マルコ・使徒・コロサイ	ユダヤ人の王	マルコ15:6～32
2	4月10日	受難週		イエスの死	マルコ15:21～47
3	4月17日	イースター		そこでお目にかかれる	マルコ16:1～8
4	4月24日			アテネでのパウロ	使徒17:16～34
5	5月1日			恐れるな、語り続けよ	使徒18:1～11
6	5月8日			それでもエルサレムへ	使徒20:17～38　参照21:1～16
7	5月15日			証しをしなければならない	使徒22:30～23:11
8	5月22日			神の言葉はつながれはしない	使徒26:19～32
9	5月29日			元気を出しなさい	使徒27:13～38
10	6月5日	ペンテコステ		聖霊は語り続ける	使徒28:17～31
11	6月12日			知恵と知識の宝は	コロサイ2:1～5
12	6月19日	沖縄命どぅ宝の日		祈りの輪の中で	コロサイ4:2～6
13	6月26日	神学校週間		主イエスの名によって	コロサイ3:12～17

2021年4月現在

川上敏夫　松山バプテスト教会 牧師

2021年7月

準備のための聖書日課

1 日㊍ ローマ4:1〜8　信仰義認
2 日㊎ サムエル記上3:1〜14　僕(しもべ)は聞いております
3 日㊏ ヤコブ1:1〜8　信仰をもって願う
4 日㊐ ヤコブ1:19〜27　聞くだけでは終わらない
5 日㊊ 申命記7:6〜8　主の聖なる民とされて
6 日㊋ マタイ5:17〜20　廃止ではなく、完成するために
7 日㊌ マタイ22:34〜40　第一の掟と第二の掟
8 日㊍ マタイ23:25〜28　白く塗った墓のような人たち
9 日㊎ 詩編107:17〜22　御言葉によるいやし
10日㊏ エレミヤ17:14　主のいやしと救いを求めて
11日㊐ ヤコブ2:1〜13　人を分け隔てせず
12日㊊ ヤコブ2:14〜26　良いわざをともなう信仰
13日㊋ ヨハネ13:31〜35　互に愛し合いなさい
14日㊌ 箴言9:7〜12　主を畏れることは知恵の初め
15日㊍ ヨハネ一2:1〜6　主が歩まれたように生きる
16日㊎ マタイ5:5〜9　まことに幸いな人たち
17日㊏ ヤコブ3:1〜12　言葉の過ちを犯さないために
18日㊐ ヤコブ3:13〜18　上から出た知恵
19日㊊ ヤコブ4:1〜12　主が高めてくださる
20日㊋ エレミヤ20:7〜9　わたしの負けです
21日㊌ ヨブ記7:9〜16　放っておいてください
22日㊍ ローマ5:1〜5　希望に生きるために
23日㊎ マタイ5:33〜37　然り、然り、否、否
24日㊏ ヤコブ4:13〜5:6　主の御心を求めて
25日㊐ ヤコブ5:7〜20　主が来られるときまで
26日㊊ 列王記下24:8〜17　捕囚として連れ去られた人々
27日㊋ 詩編79:8〜13　捕われ人の嘆き
28日㊌ 詩編137:1〜9　バビロンの流れのほとりに
29日㊍ ヨハネ黙示録10:1〜11　開かれた小さな巻物
30日㊎ エゼキエル1:1〜21　主の言葉が臨む
31日㊏ エゼキエル1:22〜28　主の栄光を拝して

2021年8月

準備のための聖書日課

1 日㊐ エゼキエル2:1〜10　エゼキエルの召命
2 日㊊ エゼキエル3:1〜15　額も硬く心も硬い人々
3 日㊋ エゼキエル5:5〜13　主に逆らう人々の末路
4 日㊌ コロサイ3:1〜11　貪欲は偶像礼拝
5 日㊍ エレミヤ17:1〜4　激怒を引き起こすアシェラ像
6 日㊎ 出エジプト記34:10〜16　激情の神
7 日㊏ エゼキエル7:1〜9　災いに続く災い
8 日㊐ エゼキエル8:1〜18　主の聖所を背にし
9 日㊊ エゼキエル7:25〜27　平和はどこにもない
10日㊋ エレミヤ6:13〜15　平和がないのに、平和、平和
11日㊌ ミカ3:5〜8　ひとかけらのパンのゆえに
12日㊍ エフェソ2:14〜22　キリストはわたしたちの平和
13日㊎ エゼキエル13:1〜7　主の言葉を聞け
14日㊏ エゼキエル13:17〜23　魂を解き放つ神
15日㊐ エゼキエル13:8〜16　もはやむなしい幻を見ることもなく
16日㊊ エレミヤ31:27〜34　人の悪を赦される神
17日㊋ 哀歌5:6〜22　主よ、わたしたちは立ち帰ります
18日㊌ 申命記30:1〜14　主のもとに立ち帰れ
19日㊍ イザヤ55:6〜7　主を尋ね求めよ
20日㊎ エゼキエル18:1〜9　すべての命は主のもの
21日㊏ エゼキエル18:10〜20　正しい人は必ず生きる
22日㊐ エゼキエル18:21〜32　主に立ち帰って、生きよ
23日㊊ エゼキエル16:1〜8　生きよ、生きよ
24日㊋ 哀歌3:22〜33　尽きることのない主の憐れみ
25日㊌ イザヤ53:1〜5　わたしたちの背きのために
26日㊍ エゼキエル24:15〜27　声をあげずに悲しめ
27日㊎ エゼキエル33:1〜9　イスラエルの見張りとして
28日㊏ エゼキエル33:21〜22　エルサレムの陥落
29日㊐ エゼキエル33:10〜20　立ち帰れ、立ち帰れ
30日㊊ 詩編23:1〜6　主はわたしの羊飼い
31日㊋ マタイ9:35〜38　飼い主のいない羊のように

2021年9月

準備のための聖書日課

1 日㊌ ヨハネ10:11〜16　良い羊飼いに導かれて
2 日㊍ コリント二12:1〜10　自分の弱さを誇る
3 日㊎ ルカ1:46〜55　主の公平さを見よ
4 日㊏ 詩編98:4〜9　公平に裁かれる主
5 日㊐ エゼキエル34:1〜16　主こそ真(まこと)の牧者
6 日㊊ エゼキエル34:23〜31　共におられる主なる神
7 日㊋ エレミヤ24:1〜7　主を知る心を与えられて
8 日㊌ 詩編51:15〜19　打ち砕かれた霊と心
9 日㊍ ヨハネ黙示録21:1〜4　新しい天と地の顕現
10日㊎ コヘレト3:10〜11　永遠を思う心を与えられて
11日㊏ エゼキエル36:1〜12　主なる神の言葉を聞け
12日㊐ エゼキエル36:25〜38　主が建て直す日
13日㊊ 創世記2:4後半〜9　命の息を吹き入れられて
14日㊋ 詩編104:24〜35　神の息吹による創造
15日㊌ イザヤ26:16〜19　死者が命を得る
16日㊍ イザヤ45:11〜13　造り主なる神を賛美せよ
17日㊎ ヨハネ1:1〜5　万物は言によって成った
18日㊏ 創世記1:1〜5　光あれ
19日㊐ エゼキエル37:1〜14　枯れた骨よ、主の言葉を聞け
20日㊊ エゼキエル37:15〜28　永遠の契約を結ぶ
21日㊋ エゼキエル39:22〜29　主なる神を知るために
22日㊌ エゼキエル40:1〜5　新しい神殿の幻
23日㊍ エゼキエル44:23〜27　汚れたものと清いものの区別
24日㊎ コリント二2:14〜17　神に献げられた良い香りとして
25日㊏ ヨハネ黙示録21:22〜22:5　神の栄光のなかで
26日㊐ エゼキエル43:1〜12　真(まこと)の神殿の幻
27日㊊ エゼキエル47:1〜12　すべてのものが生き返る命の水
28日㊋ エゼキエル47:21〜23　外国人のための嗣業
29日㊌ ローマ1:18〜23　神の永遠の力と神性
30日㊍ ローマ10:14〜21　信仰とは聞くことによる

（聖書は、日本聖書協会新共同訳を使用）

平和メッセージ

隣人になってください

金沢キリスト教会
牧師　杉山 望

私は北海道で行われた「隣人に出会う旅」にスタッフとして参加しました。その時、私は札幌教会の副牧師でしたが、その旅で初めて“アイヌ民族”の歴史を知りました。1869年、明治政府はアイヌシモリと呼ばれていた土地を「北海道」と命名し、自国の領土として併合しました。合わせて“アイヌ民族”を「皇国の臣民」とする一方で、日本人（和人）よりも劣ることを示す「旧土人」という身分を使用しました。人名も地名も日本風に変えられ、学校では日本語と日本文化だけが教えられ、アイヌの習慣や風俗は禁止されました。土地は奪われ、開拓使が割り当てを決めましたが、アイヌの人々に配分された土地は日本人のものよりも圧倒的に少なく、かつ農地に不適切な土地が多く含まれていました。強制的に移住させられた人もいました。そのような生活の変化や病気の流行のために、命を奪われた人も少なくありませんでした。

この差別の歴史を知り、それが今日までも深い傷跡を残していることを知った時、私は自分が語ってきたことが、アイヌの人々と共に聞くことができる「福音」ではなかったと気付かされました。差別の現実に触れることなく語られる説教は、意図しているわけではなくても現状を容認するものとなるからです。長年、アイヌの人々と深く関わってこられ、旅の講師をしてくださった牧師の言葉がずっと心に残っています。「隣人に出会うことと、隣人になることは違います。隣人になってください」。その言葉に私自身が問われ続けています。

イエスが共に生きたガリラヤの人々の多くは重税を課され、経済的搾取に苦しんでいました。

貧しさのゆえに栄養不良と飢えが蔓延(まんえん)しており、奴隷や日雇い労働者、物乞い、娼婦にならざるを得なくなることも珍しくありませんでした。律法を守ることができない状況に置かれた人々は、宗教的差別の対象とされましたが、その差別は搾取と抑圧を含んだ社会体制を正当化し、保持する役割を果たしていました。このようなガリラヤでは、権力者に立ち向かう抵抗運動がいくつも生じ、その担い手は「強盗」とも呼ばれ、貴族や大商人を襲う「追いはぎ」となることもありました。

このたとえでイエスが問われたのは、このような追いはぎではなく、祭司やレビ人の振舞いの方でした。当時の神殿は神殿税や「十分の一」税によって巨大な経済利潤を生み出していました。しかしその利潤は貧しい農民たちをより一層追い詰めることにもなりました。祭司やレビ人の中にも貧しい人たちはいましたが、それらの人々もこのような神殿体制を担っていました。たとえでは、祭司とレビ人が追いはぎに襲われて半殺しにされた人を見ても、道の向こう側を通っていきます。社会のひずみが現れた出来事に出会いながら、そこから目を逸(そ)らすのは、自分の立場を揺るがすリスクを避けるためです。このようすは、社会の現実から目を逸らしたり、黙認したりしてしまう私たちの姿を映す鏡です。

半殺しにされた人を助けたのはサマリア人でした。イエスはあえてサマリア人を登場させ、彼に注目するように導きます。イエスは、「わたしの隣人とはだれですか」と問うことを求めてはおられません。その問いには、ある人は「わたしの隣人ではない」、ということも含んでいます。イエスは差別され、搾取と抑圧に苦しめられている人と出会ったときに、それがどのような人であっても、私たちがその人の隣人になり、共生の道を探し求めることを望んでおられます。

私たちもイエスから、「襲われた人の隣人になりなさい」と呼びかけられています。それは強い者が弱い者に「憐れみの業」を行うことだけを意味しているのではないでしょう。なぜなら強い者が憐みの業を行いながらも、社会の体制を根本的に問うことはせず、差別を黙認し、温存させることで、そこからの利益を得ることさえありうるからです。

イエスの呼びかけに応えるとき、私たちはこれまで通り過ぎてきたところで立ち止まり、目を背けてきたことに目を向けざるを得なくなります。この世の差別、搾取と抑圧の現実は、私たちを揺るがします。しかしその只中にこそイエスはおられ、そこに神の国を現し、強い者と弱い者との隔ての壁を打ち壊し、差別的な社会の体制も新しく作り変えようとしておられます。そのような共生へと向かう道を共に歩む中でこそ、私たちは隣人になっていくのでしょう。

日本にも世界にも差別は根強く残っていますし、新たに生み出されてもいます。差別からの解放は、差別されている人にとっての解放であるだけではなく、それを含んだ社会に生きるすべての人の解放でもあります。この道は十字架に向かう道ですが、どれほどの困難があろうとも、そこにはイエスが共におられ、復活の希望があります。この道を歩む中で、私たちはイエスの福音を新たに聞き直し、神の国の豊かさを見出し、真の自由と平和を与えられ、神の祝福を豊かに分かち合うのです。

コロナ・パンデミック下の難民申請者の子どもたち

「神は貧しい人をその貧苦を通して救い出し、苦悩の中で耳を開いてくださる。神はあなたにも苦難の中から出ようとする気持ちを与えてくださる」（ヨブ記 36：15 ～ 16）

特別給付金 10 万円

2020 年、新型コロナウイルス感染拡大は、これまで社会的に周縁化され、経済的にも医療アクセスにおいても脆弱（ぜいじゃく）な位置に置かれていたマイノリティを直撃。パンデミック、大量失業、人種差別、三つの危機が根深く結びついている事態が、米国だけではなく日本でも現出しました。

「家族全員が難民申請中で在留資格なしの仮放免。高校へ行きたかったが、お金がなく難しい。母はヘルニアのためひどい腰痛だが、健康保険がなくお金がないため治療ができない。姉妹で家事をして助けているが、母の辛そうな様子を見て、自分も辛い気持ちになり、悲しい」（中学生と小学生の姉妹）

コロナ感染拡大第一波が日本列島を覆うなか、政府は 2020 年 4 月 20 日、「全国すべての人びと」に一人あたり 10 万円の特別定額給付金を支給することを閣議決定。留学生や技能実習生など、3 カ月を超える在留期間と在留資格をもち、「基準日：4 月 27 日現在」市区町村に住民登録がされている外国人（約 288 万人）にも、給付金が支給されることになりましたが、次の人びとは除外されました。

①在留資格がなく住民登録ができない「超過滞在者」約 8 万人（2020 年 7 月 1 日現在）
②在留期間が 90 日以内のため住民登録ができない「短期滞在者」約 3.5 万人（2020 年 6 月末現在）
③同じく在留期間が短い「特定活動」資格のある人たち（約 1.5 万人）。

上記①の多くは、本国で迫害を受けて来日し難民申請をしたものの、それが認められず在留資格を失った人びとや、本国で準備金・仲介料・渡航費で莫大な借金をして日本で働き始めたものの、あまりにも過酷な労働と低賃金に耐えかねて失踪した元・技能実習生たちです。また②と③の中には、3 月に大学や日本語学校を卒業したものの空港閉鎖で帰国困難となった元・留学生や、難民申請をしたものの「特定活動」2 カ月しか認められなかった難民申請中の者が多く含まれています。

移民・難民緊急支援基金

全国各地の教会・市民団体・労組や、弁護士・研究者・市民の取り組みをつなぐ「移住者と連帯する全国ネットワーク（移住連）」は 2020 年 5 月 8 日、「移民・難民緊急支援基金」を立ち上げました。会員のネットワークを通じて、特別給付金の対象外とされた難民申請者や超過滞在者、帰国できない元・留学生や元・技能実習生、DV 被害者などで特

佐藤信行

在日大韓基督教会
在日韓国人問題研究所『RAIK通信』編集長
外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会（外キ協）事務局次長
移住者と連帯する全国ネットワーク（移住連）理事

別給付金の対象ではあるが容易に受給できず、生活に困窮している外国人住民に対して、「一人3万円」による経済支援をおこないました。

◆母は仕事と在留資格を失い、子どもを出産したばかり。空港封鎖が解かれるまで民間のシェルターに身を寄せている（20代母と乳児）。
◆家族全員が仮放免で、難民申請中。数年前に父が自殺。そのトラウマがあり、小学校で友人ともうまくいかず、いじめられることもある。母が病気や兄たちの仕事がないことで泣いているのを見ると、不安になる（40代母と子ども4人）。
◆2010年に来日し難民申請。父は入管に収容された後、2018年に母国へ帰国し、母と子ども二人が日本に残る。父は母国へ帰国後逮捕されたが、金を積んで保釈され、偽名で働きながら日本へ仕送り。しかし、仕送りもここ5カ月滞っているため、姉は大学進学を、弟も高校進学をあきらめざるを得ない（50代母と中学生・高校生）。

子どもたちの夢を打ち砕く「難民鎖国：日本」

このように、難民申請者や超過滞在者の子どもたちの窮状（きゅうじょう）は、惨憺（さんたん）たるものです。G7（主要先進国）各国別の2018年の認定率を見ていくと、ドイツ：23.8％、アメリカ：35.4％、フランス：19.2％、カナダ：56.4％、イギリス：32.5％、イタリア：6.8％となります。しかし日本は、わずか0.25％。

この数値は、日本で難民認定制度が始まってから39年間も改善されていません。また日本は、少子高齢化と地域社会の過疎化が進むなかで、低賃金労働力として移住労働者を導入する一方、移民政策（社会統合政策・人権政策）をいっさい採用していません。その不条理が、コロナ感染拡大のなかで、難民申請者らの子どもたちをさらに窮地に追い込んでいるのです。

このような現実こそが、日本社会にとっての「コロナ危機」なのではないでしょうか。

この「緊急支援基金」への募金・助成金の総額が、49,794,564円となり、計1,645人の人びとを支援しました。本来なら国がやるべきことを、実に多くの教会と市民が参加し、難民・移民一人一人に、コロナ危機を「共に生きよう」と呼びかけることができたのです。

＊移民・難民緊急支援基金の詳細な報告は
移住連ホームページ
https://migrants.jp/ を参照してください。
＊本稿は、聖公会名古屋学生青年センター
『こえ』第80号掲載された原稿に加筆したものです。

連載

教会学校月間によせて

コロナ下での教会活動

コロナ危機に直面し緊急事態宣言を受けて、「教会はどうする」と問われたのは昨年４月のことでした。とにかく礼拝だけは何とかして継続していこうと、感染防止対策に務めながら様々な形での礼拝が守られてきました。失敗しながらも学びつつ工夫を重ね教会活動に取り組んできました。

１度目の緊急事態宣言を受けて、教会は２月末から始めていたオンライン礼拝をメインとすることを決断しました。会堂には司会者、宣教者、奏楽者の３名と他数名が集い、感染対策を備えつつ会堂から配信する礼拝が続きました。発信ツールにはSNSを用いることにしました。身近な携帯電話は、多くの人が比較的簡単に使用できる利点もあったからです。SNSのCBC（千葉バプテストチャーチ）グループを作り教会の連絡ツールとしました。これを機にSNSを始めた方や、ご家族の端末で一緒に分かち合う場面も広がりました。9月の召天者記念礼拝には遠距離の為オンラインでの参加を予定していた召天者の家族がいましたが、その日に限ってSNSが上手く繋がらず残念な思いをしました。このような苦い経験からWeb環境の見直しがなされ、徐々に整えられていきました。

オンライン礼拝をする中で反省の声が上がりました。それは、これまで礼拝参加を願いながらも困難な方々がおられたのに、その方々と礼拝を共有する工夫をしてきただろうかということです。体調を崩した為、また仕事の為教会へ来られない方とオンライン礼拝を通してでは繋がることができるようになったのです。コロナ危機と向き合う時代の流れの中で、このことに気付かされ、礼拝の多様なあり方を見出しています。これまでの形式に留まり固定概念に陥っていた視点から、礼拝をより広い角度から考え直すきっかけをいただき、教会活動が広がる新たな扉を開いた思いです。

教会学校の中止と再開

2020年３月から一時的に休止していた教会学校の再開へ向けて話し合い、一カ月後の４月にはオンラインで教会学校を再開しました。５つのクラスのSNSグループを作り、時間帯を決めてクラス毎に開催することにしました。青年科は遠距離に住むメンバーと繋がることができ、互いの顔を見て励まし合う場も生まれました。しかし、クラスに参加できない方々のことは、常に私たちの祈りです。Web環境が整っていない方々を置き去りにしていいはずがありません。個人的な関わりの中でお一人お一人に良い環境が整うようにと願い取り組んでいるところです。

千葉バプテスト教会 協力牧師　**矢野由美**

CBC SNS グループは様々な役割を担っています。その中に礼拝ノートを作り、リーダーがオンライン礼拝、教会学校の出席を記録します。週報、礼拝動画配信、その他様々な教会の資料は、紙ベース、メールに合わせて CBC SNS でも分かち合われます。これは活字離れの青少年層にも活用される良い方法です。

教会学校月間を迎えて

毎年教会学校（CS）月間を迎える 9 月には、礼拝の中で各クラス紹介をします。2020 年 9 月は「CS 月間って?」「教会の働きは」「CS は何を学ぶの?」「CS を盛り上げるために 1.2」「クラスについて」「これからの CS について」、手話賛美、証しの分かち合いをしました。教会学校月間は、教会学校を広く紹介し、知っていただき参加を促す良い機会です。

これからの教会学校について

コロナ危機を経験する中で「礼拝や共同学習を集まって行うことが困難になっても、インターネットを用いて隣人と繋がる方法がある。祈り合うことで、いつでも、どこでも、聖書を読み合い、分かち合いの絆を深める方法がある」ことを確認しました。困難な時も聖霊なる神さまが私たちを繋げてくださるのです。

この先、通常のクラスに戻る時も来るでしょう。しかし現在オンライン CS の恵みもいただいています。オンライン礼拝だけの繋がりに寂しさを覚えておられた Y さんの証しです。「1 人自宅で参加するリモート礼拝に孤独を感じる時、画面で顔を合わせ直接対話ができるクラスはうれしいです」と、勤務を終え間に合えば参加し、共に聖書を読み祈り合う時を分かち合います。感染者受け入れ病院勤務の Y さんの厳しい勤務状況を知らされたメンバーも、Y さんと患者さんや共に働く仲間のことを身近に感じる事ができました。画面から表情が語ります。それぞれの現状を確認し合い、体験を語り聴き、祈り合う場へ導かれる CS は、慰めと同時に繋がることのできる豊かな時です。個々の様々な祈りは共通の祈りとなって深まります。心を開いて語り、相手の話に集中して聴く対話を作り出すクラスへと、コロナ危機という未曾有の出来事から教会も個々人も変化させられ養われるのです。

「教会学校は小さな教会」と言われたりもしますが、そこでは相互牧会が行われ、祈りの絆が生まれ、キリストを中心とした共同学習の分かち合いがなされていきます。そして、その場にいない人々のことに心を向けて共に祈り広がっていく絆を深めながら、キリストの体を共に築いていく群れとさせていただきたいと切に願います。

「ともに分かち、ともに生きる」青少年科における「共同学習」

この時代に、教会の学校に期待して

私が『聖書教育』編集委員になったのは、今から約14年前の2007年4月のことでした。ちょうどその頃（正確には2006年12月15日）、「教育の憲法」とも呼ばれ、戦後教育の土台であった教育基本法が第一次安倍政権の下で「改正」されました。私は教育基本法が変えられることの意味を、『聖書教育』誌に関わる中で学んだと言っても過言ではないと思っています。当時、『聖書教育』では教育基本法「改正」を進める政府の動きを注視しており、『聖書教育』2004年1・2・3月号から「今、教育を考える」というテーマで17回に亘り連載記事を組み、この国の学校教育を覆おうとしている問題を様々な視点を通して論じていました。教育基本法「改正」の目的は、この国が世界の中心で輝くことを求めて国際競争を勝ち抜くための一握りのエリートをつくること。そして平時には従順な労働者、有事には自己犠牲を厭（いと）わない兵士のような人材を大量につくることです。そのために教育という世界に相容れない競争主義や効率主義などの経済活動上の物の考え方や、国家に都合のよい人間をつくるための国家主義的な物の考え方に基づく教育が、現教育基本法のもとに推し進められていると思います。

そうした考え方に基づく教育では、結果として命の選別も起こるでしょう。国家が求める基準に基づいて、不要や不適とされる命さえつくられていくかもしれません。また効率の追求は成果主義にも繋がり、とにかく「よい結果」を早く出すことだけが求められ、教育の営みに大切な「過程（プロセス）」というものは、ほとんど顧みられなくなっていくのではないでしょうか。そのような学校教育を巡る厳しい状況にあって、そうした教育を受けている（きた）「青少年期」を生きる人たちと共に、誰かの都合のよい人材づくりなどではなく、教会の学校こそが一人ひとりという「個」を大切にし、みんなが共に学ぶ者となってそれぞれが新しく自分自身をつくっていく。そのような学びの場である教会の学校を共につくり、その働きに期待していきたいと願っています。

共同学習から生まれるもの

教会学校が大切にする学びのスタイルは「共同学習（対話する学び）」です。その学びのスタイルが学びに参加する一人ひとりという「個」を大切にし、「教える側」と「学ぶ側」といった固定化された関係ではなく、みんなが共に学ぶ者となってそれぞれが新しく自分をつくっていくことができると思うから

『聖書教育』編集委員
森 淳一
（高崎キリスト教会 牧師）

です。「共同学習」から生まれる大切なものの１つに、「個」を重んじるということがあると思います。私たちが生きるこの時代、たとえばそこには自分で考えることをやめて大きな流れに身を任せたほうが楽（得）というような風潮があるでしょう。また、他者の言葉に一切耳を傾けず異なる意見を排除しようとする世界も広がっているのではないでしょうか。そうした時代の中で、特に「青少年期」を生きる人たちにとっては、「自分（わたし）を生きる」ということの難しさがあるように思うのです。私が私であろうとしたら、この世の中では生きづらい。しかし聖書は人が一人で生きることを基本とし、一人（わたし）の重さをいつも大切なこととして語っているでしょう。「共同学習」の学びの場は「個」を重んじることの大切さを、改めて私たちに教えてくれていると感じます。

さらに「共同学習」から生まれるものの１つに、自分にとっての大切な他者への気づきということもあるでしょう。先ほどの「自分を生きる」ということは、「自力で生きる」こととは違います。聖書は各人が一人で生きることを基本としながらも、それを基いとして共に生きる人の生き方を示します。私にとっての他者は、いつも私自身の鏡のような存在でもあり、自分の「外」なる存在が、いつも新しく自分をつくってくれるのではないでしょうか。私たちにとって教会学校で共に学ぶ仲間は、知識を競い合う相手でも、自分に同化させる相手でもありません。「共同学習」の学びの場は、みんなが共に学ぶ者です。その学びの場が、私にとっての大切な他者の存在を気づかせてくれるのではないでしょうか。

新しく自分をつくる

私は『聖書教育』に関わる以前、対話とは、対話相手を自分に同化させることや、対話相手との知識の競い合いのように考えていたところもありました。しかし『聖書教育』誌に関わり、教会学校での学びを続けていく中で、まさに私の「外」なる存在との出会いと対話が、私自身を新しくつくり続けていることを感じてきました。それでも勿論、自分を新しくつくり続けることは簡単ではありません。自分の「外」なる言葉に真摯に向き合うことは何と難しいことでしょうか。しかし、そうであるからこそ、私は礼拝者として歩みたいと願っています。礼拝という、神さまとの対話のときを、そして隣人との対話のときを、また私自身との対話のときを大切に、新しく自分をつくり、お互いが「個」でありつつ、共に在ることを喜ぶ者とされたいと思います。

執筆者紹介

概論・聖書の学び・成人科・みんなで聴く聖書のおはなし

鮫島（さめじま） 泰子（やすこ）
神戸伊川キリスト教会　牧師

ヤコブ書もエゼキエル書も私には荷が重すぎて、この頭の中には水しか詰まっていないのかもと本気で疑いながらの夏秋冬…。私なりにコロナ危機と闘いながら、気がつけば早や春がそこまで来ています。執筆者会、校閲者会の皆さま方にはたくさん助けていただきました。感謝です。エゼキエル書には希望が詰まっていました。偏愛とも言えそうな神さまのイスラエルへの情熱も。今はそんな尊い賜物がこの心に詰まっている気がしています。

青少年科

小川（おがわ） 紋子（あやこ）
盛岡バプテスト教会　牧師

初めて執筆させていただきました。リモート会議では、関わっておられる皆さんの深い考察が刺激になりました。しかしながらいざ自分一人で聖書に向き合ってみると難しくて、「この聖書は何を言いたいのだろう？」の連続でした。私にとって荷の重い苦しい作業でしたが、ヤコブ書・エゼキエル書と未熟ながら対話をしました。さらにみなさんでより深く掘り下げていっていただければ幸いです。

幼小科

川内（かわち） 活也（かつなり）
帯広バプテスト・キリスト教会　牧師

九州生まれの九州育ちが、本州飛び越え北海道へと赴き早５年。色んな事が有りましたが、我が家の子ども達もすくすく成長し、末子も小学５年生になりました。『聖書教育』幼小科の執筆は、毎回、そんな我が子らへの信仰継承の思いを込めて取り組ませていただいています。今回執筆しました「おはなし・活動・ワーク」が、それぞれの教会学校での「み言葉の学びと交わり」の一助とされ、子ども達の成長に用いられますことを願っています。

表紙

三浦（みうら） あや
藤沢バプテスト教会　教会員

表紙タイトル
「ささやかな聖所～つながり合う礼拝へ～」

エゼキエル書はイスラエル王国の滅亡、バビロン捕囚の時代に書かれました。
神殿は破壊され異国の地で礼拝に集うことができない人々の姿は現代の私たちと重なります。教会堂ではなくそれぞれの場で礼拝や祈りを捧げている人たちを描きました。場所は離れていても分断されているのではなく、十字架の主によってつながっている、というメッセージを込めて描きました。

編集後記：お詫び

発行人　中田義直（日本バプテスト連盟 常務理事・所沢キリスト教会 協力牧師）

『聖書教育』は、今号より一人の編集人を立てず協働体制で編集にあたって参ります。編集の作業は、読者の皆さまによりよく用いていただくために、執筆者と協議を重ね「言葉」を整えていくことです。また、不適切な言葉や内容がないかチェックすることも重要な働きです。
この重要な働きについて、2021 年１・２・３月号ついて読者の方々からご指摘をいただきました。それは「聖書の学び」の中で参考図書とした書物についてです。執筆者がその書物を参考に執筆した文章について問題はありませんでしたが、その書物の出版社が私たちの宣教理解や課題意識と相容れない背景を持つことが判明しました。この出版社の書物を参考図書として掲載することは、その背景にある主張を容認することになるのではないかとのご指摘でした。
このことに思い至らなかったことをお詫びいたします。今後編集にあたっては、より多角的な視点から注意をして参ります。
また、2021 年 4･5･6 月号 P95「暗唱聖句カード口語訳」では、新改訳聖書の聖句になっておりました。ご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。訂正版はホームページに掲載しております。

この時代に「エゼキエル書」を読む

神戸伊川キリスト教会
牧師　鮫島泰子

預言者エゼキエル

ユダ王国ヨヤキン王の時代にバビロン軍がエルサレムを侵略。王と家族、高官、勇士、職人、有力者など、多くの人々をバビロンへと連行しました。これが第一次バビロン捕囚です。祭司として神殿に仕えていたエゼキエルも捕囚民の一人としてバビロンへと連れて行かれました。捕囚地にて５年目のある日、彼は幻のうちに主の姿にまみえます。そして神さまから直々（じきじき）に捕囚民のための預言者としての召しを受けたのでした。

一度聞けば心に貼り付いて剥（は）がれないほどに強い印象を与える言葉の数々から、エゼキエルがかなり個性的な人なのだろうと想像します。その豊かな個性を折って、「主なる神がこう言われる」そのままを取り次ぐ「器官」に、彼は徹（てつ）しました。絶望の底に蹲（うずくま）る捕囚民たちをさらに打つ神さまの怒りと裁きの言葉を告げなければならない器官としての辛（つら）さ、悲しさ、厳しさは想像に余りあります。神さまはイスラエルの民を決して諦（あきら）めない。この確信の故にエゼキエルはその預言者人生を貫き通すことができたと思うのです。

イスラエルの人々

「彼らは反逆の家である」。しかし神の民であることに慢心し神殿神話の上に胡座（あぐら）をかいていた人々にその自覚はありませんでした。エルサレム陥落はそんな神の民の内的崩壊を象徴する出来事でした。自分こそが「枯れた骨」。そう気づくところから、神の民の悔い改めは始まりました。「神さまは枯れた骨のような自分が悔い改めて生き直すことを望んでおられる…」。神の民の心に今までとは違う希望と命が見え始めたのでした。

コロナ危機の中で

コロナウイルスは人と人とを引き離し、様々に絡み合った世界を切り刻みました。痛み、疲れ、狼狽（うろた）える中で誰もが自分自身と向き合い直すことを求められている気がします。

創造のみ業の最後に創られた「人」には、神さまの恵みの善い管理者となることが期待されています。でも「人」はそのように努めて来たでしょうか。「わたしが主であることを知れ」。エゼキエルの時代、神さまが預言者を通してくどいほどに語られた言葉です。さらに神さまは語られました。神の民、異邦人を問わず、すべての「人」に向かって「主に立ち帰って生きよ」と。今こそひとりでも多くの人に届けられるべき言葉ではないでしょうか。神さまはすべての人に、創造主と出会いそのみ心を知って新しく生き始めることを求めておられます。イエスさまの足跡を辿（たど）る私たちが為すべきことも示されているように思うのです。

聖書の学び

聞くだけでは終わらない

聖書 ヤコブの手紙1章19〜27節

暗唱聖句 この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。
御言葉を行う人になりなさい。ヤコブ 1：21 〜 22

14課

7月4日

イエス・キリストを見つめて

ヤコブの手紙は紀元 49 年ごろ、主の兄弟ヤコブによって書かれたと言われます。迫害のために地中海沿岸地域に散り散りになっていたユダヤ人キリスト者たち（1：1）が主な読者であったと考えられます。試練に耐えつつみ言葉を聞いて立ち上がり、愛ある行動を起こすようにとの、力強い勧めがなされていきます。

この手紙は「人は行いによって義とされる」ことを主張する書物だと言われてきました。パウロの「人は信仰によって義とされる（信仰義認）」という主張の対角にあるものとされ、マルチン・ルターによって「藁（わら）の書」（値打ちのない書物）と酷評（こくひょう）されました。しかしじっくり向き合ってみると、ヤコブがむやみに行うことに固執しているのでも、義をいただく条件として行いを勧めているのでもないことが見えてきます。ヤコブ自身が、「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ守ろう」（1：25）とした結果、み言葉こそが人を突き動かし立ち上がらせ、神さまに喜ばれるよい行いへと向かわせるのだということに気づいたのではなかったかと思います。黙想の中で心を空（むな）しくしてみ言葉に聞き入る、受け入れる、その時に与えられる思いを神さまの導きだと信じる。そうすればきっとよい行いへと導かれていく。信仰者がこのように持ち運ばれていくことに気づき、ヤコブ自身が驚き感動したのだろうと想像するのです。

み言葉を行う

「聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いように」（1：19）。人に対する時にもこのように心がけることはよいことですが、ヤコブは、み言葉を聞く時に、このことを「よくわきまえていなさい」（1：19）と勧めています。努めて心を無にしてみ言葉に向かい、「私に何が語られるだろうか、主よお語りください、聞きます」との期待と願いを持ちつつ静まるということでしょう。分けても「怒り」「悪」に代表される人の否定的な感情や罪がみ言葉の働きを妨げている、という指摘には心を留めておくべきだと思います。

「み言葉は、あなたがたの魂を救うことができます」（1：21）。だから「み言葉を行う人になりなさい」（1：22）。ここにヤコブ書のメインテーマが示されています。十分にみ言葉を聞いた人が次に向かっていくところは、聞いたことを実践に移していく、ということでしょう。続けて聞くだけで終わる者についての記述があるので、聞くことと行うことが簡単にはつながっていかないという「わたし」の課題が、実は多くの信仰者の現実であり悩みでもあるのだということが分かります。

み言葉を行う人がどのような人であるかを語るために、ヤコブは二つの人のあり様（よう）を示します。一つは「生まれつきの顔を鏡に映して眺める人」（1：23）です。昔の鏡は金属の表面を磨いて作られたものだったので対象をはっきり映し出すことができませんでした。不鮮明な自分の外見を眺めていても何も起こらないし、鏡の前を立ち去れば何も残らな

い。鏡に映っているのは虚像でしかありません。これに対するもう一つのあり様は「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人」(1:25)です。口語訳聖書には「一心に見つめてたゆまない人」とあります。ヤコブは「完全な律法」という言葉を、イエス・キリストの意味で用いていると考えます。彼はイエス・キリストに、真の自由と、聞くこと語ること行うことにおいて一致する完全な人の姿を、律法を完成された人の姿を見たのでしょう。この方を見つめる時心の中に、その姿に倣いたいとの逸るような思いが起こされて、人をよい行いへと駆り立てていくのではないか、そうヤコブは言いたいのではないでしょうか。行為へと向かう「動き」が伴う信仰を、ヤコブは「信心」と呼んでいます。

準備のための聖書日課			
28日	㊊	マタイ13:53〜58	主イエスの兄弟 ヤコブ
29日	㊋	ガラテヤ1:18〜24	主の兄弟 ヤコブとの出会い
30日	㊌	ローマ3:21〜31	信仰による神の義
1日	㊍	ローマ4:1〜8	信仰義認
2日	㊎	サムエル記上 3:1〜14	僕 は聞いております
3日	㊏	ヤコブ1:1〜8	信仰をもって願う

成人科

●「聖書の学び」ではヤコブ書の筆者を「主の兄弟ヤコブ」と想定しています。彼はエルサレムの使徒会議の議長として、議場を異邦人キリスト者の痛みに寄り添う議決へと導きました。英断でした。常に弱い側にある人、痛む人に寄り添われたイエスさまが、ヤコブの言動の規範であったと思われます。初代教会において「義人ヤコブ」とも呼ばれていたほどに、彼は律法、すなわちイエスさまのみ言葉に対して忠実であろうとしたのだと思います。そんなヤコブはしかし生前のイエスさまに対しては、尊敬どころか疎んじ嫌っていたとさえ思われる節があります。その彼が復活のイエスさまに出会い、兄の本当の姿を知った時、自分が砕け散るような痛恨を覚えたのではなかったでしょうか。そして躓きのその痛みが彼を揺るがない信仰者へと成長させたのでは、と想像するのです。私たちもイエスさまに躓きます。躓きの後悔と痛みが一層真剣に、熱心にイエスさまへと向かわせるのではないでしょうか。躓きや揺らぎ、不信の経験とその後を分かち合ってみましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

14課

7月4日

聞くだけでは終わらない

聖書　ヤコブの手紙1章19〜27節

暗唱聖句　この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。御言葉を行う人になりなさい。ヤコブ 1：21 〜 22

教会にお手紙が届きました。差出人はヤコブです。

教会の皆さま。お変わりありませんか。小さい皆さんたちは元気ですか。私は皆さんに大切なことをお知らせしたくてこの手紙を書いています。どうぞ皆さんでこれを読んでください。

皆さんはイエスさまのお言葉を聞いてどう感じますか？ 分からなくなることはありませんか？ 私は、イエスさまのお言葉の中で、行って学びなさい、行って祈っていなさい、行ってのべ伝えなさい…、「行って〇〇しなさい」と言われていたことがとても気になった時がありました。イエスさまは、弟子たちや町の人たちを集めては天の国のお話をなさり、それに続けて「だから、あなたも行って行いなさい」と言われたのです。イエスさまの天の国のお話は興味深く、私たちがこの地上で生きていく上でとても大切なことを学ぶことができますが、「あなたも行って行いなさい」というお言葉を聞くと気持ちがしぼんでしまう時がありました。何故だろう…。

そこで私はますます一生懸命になって聖書を読むようになり、祈るようになりました。そしてある時復活のイエスさまの言葉を思い出したのです。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28：19 〜 20）。そうか！ 復活のイエスさまが今、この私に「あなたも行って行いなさい」と言っておられるのだ、そう分かったのです。

気持ちがしぼむのは、イエスさまのご命令が私にとってとてもむずかしかったり、自分がしたいことと違っていたりする時、不安になるためだったことにも気づきました。でもイエスさまは「いつもあなたと一緒にいるよ」と言ってくださっているのです。困った時には助けてくださるに違いないのです。

それ以来、この言葉を聞くたびにうれしくなります。イエスさまのお働きに加わることができるからです。イエスさまのお役にたてるからです。「行って」とは、どこかへ出かけて、という意味のほかに今の自分の気持ちから立ち上がって、自分の願いや不安や疑問から離れて、ということだろうと私は思います。よいお話を聞いて感心しても、そこで満足していたらイエスさまのお働きを助けることにはなりません。イエスさまが望まれることを私たちが行う時に、多くの人たちが真（まこと）の神さまを見上げ、イエスさまを信じるようになるのです。天の国が地上に広がっていくのです。

聞くだけでは終わらない

聖書 ヤコブの手紙1章19〜27節

暗唱聖句 この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。
御言葉を行う人になりなさい。ヤコブ 1：21 〜 22

聖書から…

私は聖書の色んなところを読んでいると、胸にグサッと何かが刺さるのを感じたことがあります。それは自分だけではないようです。なぜグサッと刺さるのかといえば、おそらく、意識して、また無意識のうちにも、「私にはとてもできない言葉だから聞きたくない」と思っているからなのかもしれません。皆さんは、そういうことがあるでしょうか？（聖書のおはなしより）

ヤコブ書の著者ヤコブは、そのようなできない自分の姿を眺めるのではなく、み言葉へと顔を向けるように勧めます。自分のなかにあるものに顔を向けるのは、鏡に映った自分の姿を見ても立ち去るとすぐに忘れてしまうようなものです。そのような変わったりすぐに忘れたりする自分ではなく、み言葉を一心に見つめ、行うようにヤコブは勧めます。でも、み言葉へと顔を向けるとか、み言葉を一心に見つめるとは、具体的にはどのようなことなのでしょうか？

このような「行い」ばかりを言うヤコブは、一見すると「行え」「行え」と口酸っぱく言っている人のように感じます。しかし聖書をよく読むと、行いを見ていると言うよりも、イエス・キリストを一心に見ているのだと気付かされます。イエスという人との出会いや交わりを通して、いつも一緒にいてくださり、助けてくださることを知ったのだろうと思います。み言葉を聞いてしまったからには立ち上がらざるを得ないような駆り立てられるものがあって、だからこそ「聞くだけで終わる者になってはいけません」と勧めているのです。

分かち合おう

- 「聞いて忘れてしまう」（1：22 〜 24 参照）ということはよくあります。しかし、イエスさまとの関わりにおいて、この聖書の言葉こそが自分を励ましてくれたり、慰（なぐさ）めや悔い改め、勇気を与えて一歩踏み出させてくれる、忘れることができない聖書の言葉もあるのではないでしょうか。それぞれの経験などを分かち合ってみましょう。

- 魅力的なものがこの世にはたくさん溢（あふ）れています。私たちはみ言葉を聞こうにも、聞けない状況や、行なおうにも行えない状況があるのではないでしょうか。林竹二という人が、「学ぶということは、何かが変わることだ」と言いました。聖書を読んで聞くだけで終わらずに、動かざるを得ないという経験があったら分かち合ってみましょう。

幼小科

聞くだけでは終わらない

聖書 ヤコブの手紙1章19〜27節

暗唱聖句 この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。
御言葉を行う人になりなさい。ヤコブ 1：21 〜 22

14課

7月4日

聖書から…

私たちは「赤信号の時には止まりましょう！」と教えてもらっていますね。教えてもらったルールを守らないと交通事故が起こります。「聞き･知る」だけでなく「守り･行う」ことが、命を守るための交通ルールです。

ヤコブは教会の皆さんに手紙を書き送りました。イエスさまから教えていただいたみ言葉を「聞き・知る」だけでなく「守り・行う」ことが、私たちの魂を救うのだと知らせるためです。イエスさまは私たちに、安心して生きていく道を教えてくださいました。み言葉を「聞き・知る」だけでなく、そのみ言葉を「守り・行う」ことで、イエスさまと一緒に安心して生きていくことができるなら、うれしいですね、これが信仰の歩みなのです。

活動①

「聞いて・行う」

●**準備**●人数分の赤旗と白旗（割り箸に色紙やリボンを付けたものでも可取扱い注意）

①指示に従って旗を上げ下げする「旗揚げゲーム」です。全員、右手に赤旗、左手に白旗を持ち、気をつけの姿勢（旗を下げた状態）でスタンバイします。

②隣の人との間隔を空けて立ちます。メンバーの年齢層が低い場合、リーダーは左右逆に旗を持つと良いでしょう。

③「リーダーの言う通りに真似をして、言われた色の旗を上げたり、下げたりしてください」とルール説明をします。

④動作指示例：「赤上げて、白上げて、赤下げて、白下げない」（白だけ上）。「はい、では両方下げて下さい」（ゲームの度にリセット）。「赤上げて、白上げない。白上げないで､赤下げる」（両方下）。「赤上げない。白上げる。赤白上げて、白下げない」（両方上）。

＊初めはゆっくりと指示を出し、段々スピードを上げると難易度を調整できます。慣れて来たら、メンバーから指示係を選んでもいいですね。さらに難易度を上げる場合、指示出しのリーダーはメンバーから見えない位置に移動し、答え合わせで姿を見せると良いです。

活動②　ワークシート

「聞いて、行う」

聖書を通して、神さまは私たちに色々な「教え」を与えてくださいます。

①ワークシートの左表マスに、聖書に書かれている「〜しなさい」「〜してはいけません」という教えを思いつく限り書き出します。

＊今日の聖書の箇所を開いて見つけても良いですね。

②それぞれの教えに対応する右表マスに、自分は具体的に「守り・行う」ことができたらと思うことや、努力していることを書き出します。暗唱聖句で、それが私たちの安心して生きていく道となることを確認します。

ワークシート

聞いて、行う

「 聞き・知る 」	「 守り・行う 」
(例) 絶えず祈りなさい	お食事の前と、朝と夜にお祈りをしている
(例) 隣人を自分のように愛しなさい	自分の気持ちだけではなく、他の人の気持ちも考える

聖書の学び

人を分け隔てせず

聖書　ヤコブの手紙2章1〜13節

暗唱聖句　憐みは裁きに打ち勝つのです。
ヤコブ 2：13

15課

7月11日

教会での「分け隔て」の現実

み言葉に突き動かされて行いへと導かれていく。この順番が大切であること、分けては考えられないことを語ったヤコブは、今度は教会の中で見られた、あってはならない分け隔て、差別について語り始めます。とにかく行いさえすればいいというのでは決してない、行いをみ言葉に照らして十分に吟味しないと罪を犯すことになる、と言います。8節以降では律法、すなわちイエス・キリストのみ言葉を自己吟味の基準とするようにとの勧めがなされます。そしてこの方への信仰を持っているというのなら、来会者に対するあなたがたのその差別的なふるまいは一体どういう訳か、と問うのです。おそらくこの手紙が読まれるべき教会にはひどい差別や信じがたい分け隔てがあり、しかもそのことに信徒が全く無頓着、無神経だったのでしょう。「最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なこと」（2：8）とは強い皮肉です。1節の「栄光に満ちた」という形容句はしばしば再臨の主、裁き主キリストに対して用いられます。あなたがたのその行いは到底正しい信仰とは言い難く、終末の審判とも決して無関係ではないのだとヤコブは警告します。その行いとは例えば「身なり」によって来会者を分け隔てすること。立派な身なりの人には媚びへつらい、みすぼらしい身なりの人には侮蔑的、威圧的な態度で応対する、といったようなことであったとあります。ヤコブは教会の中で公然と行われていたそのようなことが誤った考えに基づいて下した判断であることに気づかせるために、その昔イスラエルが神の民として選ばれた原点、「主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも…貧弱であった」（申命記 7:6）に彼らを立ち返らせようとしています。自分たちこそが貧しい者、弱い者、寄る辺なき者であるとの気づきが、信仰共同体を本来のあり方へと導き返します。私たち現代の信仰者にとってもこの想起と立ち返りは不可欠ではないでしょうか。

自由をもたらす律法

ヤコブは教会の分け隔て、差別の現実を今度は律法違反の側面から批判します。「律法全体を守ったとしても、一つの点で落ち度があるなら、すべての点について有罪となる」（2：10）。「たとえ姦淫はしなくても、人殺しをすれば、あなたは律法の違犯者になる」（2：11）。十戒の中の第6戒を取り上げているのが印象的です。大抵の人はこの戒めは自分には関係がないと思うでしょう。しかし貧しさの中にある人たちを辱めることはその人の命を奪うことになりはしないか。人を分け隔てしているあなたがたは第6戒に違反する者ではないか。ヤコブのこの厳しい指摘の前に一体誰が立ち得るでしょうか。

イエス・キリストは、「わたしが来たのは律法や預言者を…完成するためである」（マタイ 5：17）と言われました。人には決して成し得ない律法の完成。これを主が成してくださいました。それゆえに私たちは、律法遵守によってではなく神さまの憐れみによ

って生きる者となったのです。そして日々、最も尊い律法「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22：39）を、日々生きるものになるようにと招かれているのです。ヤコブが、人を分け隔てしながら何の責めも感じない教会とその人々をこれほどまでに叱責するのは、彼らに終末の裁きを意識させ（2：12）、悪い行いを糺さなければとの思いを起こさせるためであったと思われます。きっと、自由をもたらす律法（隣人愛）が彼自身を動かしたのでしょう。最も重要な第二の律法に従い得るヤコブは当然ながら最も重要な第一の掟（神を愛する）をその信仰の礎としていたことでしょう。だからこそ、厳しい内容の手紙を書くことも躊躇しなかったと思うのです。

準備のための聖書日課			
5日	㊊	申命記7:6〜8	主の聖なる民とされて
6日	㊋	マタイ5:17〜20	廃止ではなく、完成するために
7日	㊌	マタイ22:34〜40	第一の掟と第二の掟
8日	㊍	マタイ23:25〜28	白く塗った墓のような人たち
9日	㊎	詩編107:17〜22	御言葉によるいやし
10日	㊏	エレミヤ17:14	主のいやしと救いを求めて

成人科

● ヤコブが指摘した教会での「見かけ」による極端な分け隔てを、「昔の教会ときたら…」と、果たして私たちは嗤えるでしょうか。教会にも自分自身にも、「見かけ」による分け隔ては依然として現存していると言わざるを得ません。イエスさまは、「白く塗った墓のようなあなたたち偽善者は不幸だ」と、宗教家や宗教指導者たちに言われました。今の時代にキリスト教会が、キリスト者が、自分自身が問われていることは何か、具体的に考えてみましょう。

● コロナ危機の中での医療従事者や感染者への心ない誹謗中傷や偏見の被害は、家族にまで及んでおり事態は深刻です。ウイルスに対する恐怖や罹患の不安のはけ口なのか、ここまで善悪の感覚が麻痺してしまっているのは異常としか思えません。分けても SNS による拡散は人の命を奪うまでになってしまいました。自己中心、他者の痛みを想像する感性の欠如、依存体質、関係性の欠如など、たくさんの魂が病み呻いています。そんな現実のただ中に、真の癒やし主を知る私たちが置かれています。私たちはどうするべきでしょうか。

人を分け隔てせず

聖書 ヤコブの手紙2章1～13節

暗唱聖句 憐みは裁きに打ち勝つのです。
ヤコブ２：13

15課

7月11日

ヤコブの手紙は続きます。

ある日皆さんの教会に、キリスト教会の会堂に入るのは初めて、という人が来たとします。皆さんはこの人をどう迎えますか。その人が高齢なら牧師のお話がよく聞こえる席に案内するでしょう。緊張を解きほぐすような接し方をみんなで心がけるでしょう。そのような配慮ができるのがキリスト教会だと私は思うのです。ところがある教会では、初めて来た人の身なりや持ち物を見て立派であれば特別扱いし、反対に貧しそうな人には「そこに立っていなさい」とか「私の足もとに座っていなさい」と命じるだけなのです。この教会の人たちは、誤った考え方をもとにして教会に初めて来た人を見かけだけで判断し、それによって対応を変えているのです。

皆さんはこのことをどう思いますか。「何てひどい教会だ。キリスト教会とはいえない。キリスト者だなどと名乗らないでほしい」。そう思うのではないでしょうか。この教会の人たちはこの世の価値観を基準にして、見た目で人を判断し分け隔てしているのです。でも私たちの判断基準は神さまのみ言葉です。聖書に「主が、あなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも、貧弱だったから」とあるからです。

もしこの世で富み、しかもその富を不正に用いる人たちや彼らに媚(こ)びる人たちが、神さまが選ばれた貧しい人たちをいっそう

酷(ひど)い目に遭わせ、惨(みじ)めな思いにさせたとしたら、彼らは律法の違反者と断定されます。「私は聖書に従って隣り人を自分のように愛している」と口ではいいながら、実際には人を分け隔てしているとしたら、それは罪を犯しているのであり、神さまの裁きから逃れることができません。

この裁きは、私たち一人ひとりと無関係ではありません。私たちはただ神さまの憐(あわ)れみによって、イエスさまと生きることを許された者です。神さまのみ言葉という確かな物差しにいつもいつも自分を合わせていないと、ついこの世の基準に流されてしまう弱い者なのです。「この世の富の誘惑に負けない」とは言い切れない、頼りない者なのです。私は、人を分け隔てする人たちが最後の裁きの日に有罪判決を受けることを、決して望んではいません。ましてや皆さんについてはなおさらです。どうかイエスさまを信じる者にふさわしく語り、決して人を分け隔てしないでほしい。心からそう願っています。

人を分け隔てせず

聖書 ヤコブの手紙2章1〜13節

暗唱聖句 憐みは裁きに打ち勝つのです。
ヤコブ 2：13

聖書から…

「人を分け隔てしてはいけません」（2：1）。当たり前のことを言っているように思いますが、人を身なりで判断して、差別してしまっている現実が教会の中であったようです。新約聖書の別のところでも、パウロが「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」（ガラテヤ 3：28）と手紙を書いていますが、手紙に書いているという事は、やはりそういう問題が教会の内部にあったのだろうと思います。ヤコブもパウロも同じような根深い「分け隔ての問題」と闘っていたのでしょう。初代の教会では、身分によって分け隔てが生じていた限界があったようです。現代でも、年齢や性別等々によって分け隔てが生まれ、扱いが違うということで隠れたところで悩んでおられる人がいるかもしれません。

ヤコブは、分け隔てしてしまっている問題を、十戒の中の「殺すな」という戒めに繋がっていくものとして扱っています。

「イエス・キリストを信じながら、人を別け隔てしてはなりません」。イエス・キリストを信じるという事は、分け隔てしないイエスさまの価値観を自分も生きようとする事だとヤコブは考えているのです。教会に集められる資格も条件もない者が、すべてイエスさまにあってかけがえのない存在とされていることを繰り返し心に留めたいと思います。

分かち合おう

- 教会に初めて行った時、「若い人が来てくれてうれしい」と言われて、自分に何か価値があるような気がして少々うれしい気持ちになりました。しかし裏を返せば、「自分がもし若くなかったらうれしくはないのだろうか？」とも思ってしまいます。皆さんは教会でどんな風に扱ってもらいたいと思いますか。互いの意見に耳を傾けてみませんか。

- 教会には様々なバックボーンを持った人がいます。多様な人たちが同じ共同体にいるのは、その共同体が豊かなことの表れでもあります。人それぞれ価値観は違うのですが、違っていながらもなお共同体として歩むにはどんなことが必要となるでしょうか。また、もし今教会に居場所がないと感じておられる方（それは自分自身のことかもしれませんし、だれかかもしれません）がおられたら、どんなことが必要なのか、分かち合ってみましょう。

幼小科

人を分け隔てせず

聖書 ヤコブの手紙2章1〜13節

暗唱聖句 憐みは裁きに打ち勝つのです。
ヤコブ２：13

15課

7月11日

聖書から…

ヤコブは「人を分け隔ててはいけません」と伝えます。立派な服を着た人のことは特別扱いしてもてなし、汚い服を着た人には声もかけず適当に扱う…そんなことをしていないでしょうか？ 神さまはそのような差別する心を喜ばれません。神さまは、私たちを分け隔てなく愛して、どんな時にも見捨てることなく助けてくださるからです。神さまに愛されて安心をいただいているのに、自分は隣人を愛さず自分の好みで人を差別したり裁いたりすれば、神さまはどのように思うでしょう。神さまから受けた愛と憐(あわ)れみをいつも思い出し、その愛と憐れみを基準に隣人と接するなら、人を分け隔てることも差別することも無くなるでしょう。憐れみは裁きに打ち勝つのです。

活動①

「みんなの顔をみたいから」

みんなに共通するお題を考えましょう。

●例●「今日、教会に来ている人」「泣いたことがある人」など。「聖書を読んだことがある人」や「神さまに愛されている人」などのお題も挙がると良いですね。

①例を挙げ「全員が『はい！』と答えられるようなお題を考えてください」とルール説明をします。

②みんなで背中向かいに輪を作ります。

③「お題」を発表する順番を決めます。

④「みんなの顔をみたいから…」と声を合わせた後、発表者は「お題」を宣言します。

⑤「お題」発表の後、全員で「せーの」と声を合わせ「お題の該当者」はピョン！と跳んで反転します。

⑥全員が「顔合わせ」になれたら拍手をしましょう。

＊「みんなに分け隔てなく共通するお題」がいくつ挙がったでしょうか？

活動②　ワークシート

「喜ばれる交わりへ」

●準備●ハサミ、両面テープ（のり）

①ワークシートからパーツ１とパーツ２を切り取ります。

②パーツ１の「のり①」に両面テープを貼り、パーツ２の「のり①」部分の型に合わせて貼り合わせましょう。

③すべての折り目をつけます。

④「もちて」部分の裏を両面テープで貼り合わせます。

⑤「のり②」に両面テープを貼り、聖句裏に貼り付けます。

⑥「ひきて」を「さしこみ」から通し入れ、聖句の右側に「ひきて」部分の線まで引き出します。※「のり」を使う場合は完全に接着乾燥してから動作確認を。

〈遊び方〉

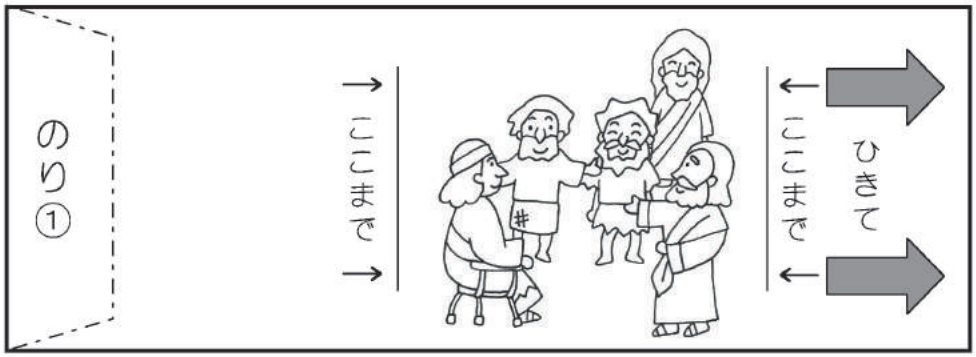
・「もちて」を左手でつまみ持ち「ひきて」を右手で矢印方向にゆっくり引き出すと「暗唱聖句」の下から「主が喜ばれる交わりの姿」のイラストが現れます。

・他人に向けて話す場合は左右の持ち手を変えます。

・「ひきて」部分を押し戻して初めの状態に戻します。

ワークシート

喜ばれる交わりへ

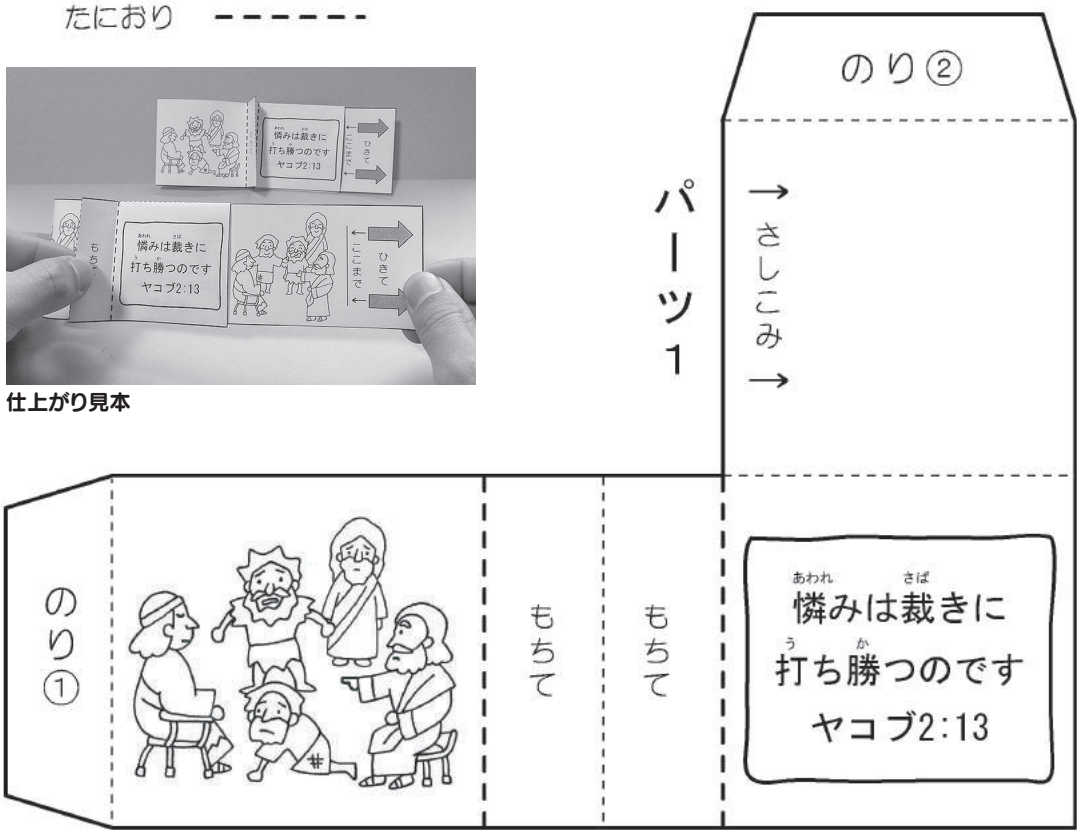


きりとり ————

やまおり - - - - - - - - - -

たにおり — — — — — —

仕上がり見本



聖書の学び

上から出た知恵

聖書　ヤコブの手紙3章13〜18節

暗唱聖句　上から出た知恵は…憐みと良い実に満ちています。
ヤコブ 3：17

16課

7月18日

上から出た知恵、悪魔から出た知恵

「知恵があり分別があるのはだれか」（3：13）。ヤコブは、誰か知恵や分別のある人はいませんかと問うているのではありません。自分はキリスト者だ、神さまからいただいた知恵や分別を持っている、というなら言動や生き様でそのことを示すべきではないかと意見しているのです。ヤコブの知る手紙の受け取り手の教会には、ねたみや利己的な考えがあり、そのために自慢やうそが蔓延していたと思われます。イエスさまから、互いに愛し合うことを教えられている教会といえど、そのようなものと決して無縁ではないのだと気づかされます。この箇所では「知恵」という言葉が、2つの正反対の意味に使い分けられています。ひとつは13節の「知恵」です。神さまが賜物としてキリスト者に与えてくださる知恵、「主を畏れること」（箴言1：7）に始まる上からいただく知恵です。もうひとつはこれに対する「そのような知恵」（3：15）、これをヤコブは「地上のもの、この世のもの、悪魔から出たもの」（3：15）と言っています。3章9節に「わたしたちは舌で、父である主を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います」とあります。天を仰いで神さまを賛美した心が、振り向いた瞬間には誰かへの怒り憎しみを滾らせる。自分の狡さ、汚さの現実に私たちはがっかりし情けなくなるのです。そんな私たちにヤコブは、それでもあなたがたは「柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい」（3：13）と言います。あなたがたは上からの知恵をいただいているのだから、と。

イエスに倣う

ヤコブはさらに、上から出た知恵は、「純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています」（3：17）と言います。彼はおそらくイエスさまの姿や有り様を思い起こしては、一つひとつ言葉にしていったのでしょう。そしてこの方（律法）を見つめることで、この世に生きてあまたの誘惑に晒されながらも、悪魔から出た知恵を見分け自分を制御して、立派な生き方を周囲の人々に示しなさい、と言うのでしょう。この世の知恵から生じたものは多分に魅力的で、この世的な欲望を満足させるに足りると思われます。しかしそれは同時に人を駆り立てて、混乱やあらゆる悪い行いへと人を向かわせるものでもあります。悪魔から出たそのようなこの世の知恵を捨てて、自分の考えや力に、またこの世の知識や常識に頼ることをやめて、柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい、と言います。聖書が言う「柔和」は、性格や態度が優しく穏やかであることを表すばかりではありません。自我を折って大いなる方の前に謙遜に跪く、誰かのために痛み傷つくことを厭わない、隣人と共に生きて平和な関係を築こうとする、そんな内側に情熱を秘めつつ軽やかに行動を起こす強さをも表します。そしてキリスト者はこの言葉を聞くとイエスさまを思い浮かべるのです。ヤコブが勧める上からの知恵によって

生きる生き方とは、イエスさまが歩まれた道を思いつつみ足の跡を踏んで生きること、イエスさまの柔和に倣って歩むこと、そんな人生の歩き方のことではないでしょうか。

義の実を結ぶ

18 節。口語訳聖書には、「義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和の内にまかれるものである」とあります。ヤコブが 17 節で挙げている「よい実」の種を、神さまが人々の心の中に手ずから蒔かれる様子を想像します。イエスさまは「柔和な人は地を受け継ぐ」と言われました。「平和を実現する人は神の子と呼ばれる」とも言われました。柔和で平和を愛する人の心（器）の中で、蒔かれた種は丈夫に育ち、いつか豊かな実を結ぶでしょう。そして器（平和を実現する教会）を通してイエスさまの芳（かんば）しい香りを周囲に放（はな）っていくのです。

準備のための聖書日課			
12日	㊊	ヤコブ2:14～26	良いわざをともなう信仰
13日	㊋	ヨハネ13:31～35	互に愛し合いなさい
14日	㊌	箴言9:7～12	主を畏れることは知恵の初め
15日	㊍	ヨハネ2:1～6	主が歩まれたように生きる
16日	㊎	マタイ5:5～9	まことに幸いな人たち
17日	㊏	ヤコブ3:1～12	言葉の過ちを犯さないために

成人科

● 教会は聖域。キリスト者はよごれた体と傷ついた心を引きずって教会に駆け込み、そこで清められて再び主の証し人としてこの世へと出かけて行く。そう思い込んでいませんか。実際は教会こそこの世の縮図でありキリスト者は罪人のサンプルなのです。ヤコブは神の言葉を聞いて行う人になるようにと勧めます。ところが、み言葉に促されても動かず、柔和な行いも立派な生き方もできていないのが私たち。でもそんな自分を駄目とも嫌いとも思いません。イエスさまがそんな私のそのままを「よい作品」と言ってくださるからです。神さまのよい作品であることを喜んでいますか。

● 純真で温和、優しくて従順な性質は、自分の中には無く神さまからの賜物であり、義の実もまた神さまが人の心に蒔いてくだる、とあります。私たちに良いものが何もなくても、人生を良く歩かせていただける。これが、主の十字架の贖（あがな）いの恵みです。コロナ危機の中でこそ、この恵み喜びそして十字架を語りたい。主日、感染防止のために人の来ない会堂でひとり、上からの知恵を待っています。離れた場所で祈っていてくれるメンバーに支えられながら。

上から出た知恵

聖書 ヤコブの手紙3章13〜18節

暗唱聖句 上から出た知恵は…憐みと良い実に満ちています。
ヤコブ３：17

ヤコブの手紙はまだまだ続きます。

皆さんは、周囲のさまざまな人たちといつも仲良くできていますか。楽しく過ごせていますか。時々、無理って感じたり嫌いになったりしませんか。悪口をいったり自分の気持ちを押し通したり、ちょっとうそをついてしまったり。そして後で悲しくなったり泣きたくなったりしませんか。イエスさまを信じ、イエスさまのお言葉に従って毎日を生きたいと思っていても、時にいやな気持ちになったり悪い行いに走ってしまったりします。どうしてでしょう。

人を動かすものは知恵、人が生きていく上で必要な賢さだと私は考えます。その知恵には二種類あると考えています。ひとつは、神さまからいただく賢さ。聖書のみ言葉によってその人の中にでき上がっていく正しい賢さです。もうひとつは、自分の心の中にあるずる賢さ。聖書はこの賢さは悪魔から来ると教えていますが、自分だけに良いようにと願い、他の人のことを考えない悪い賢さです。人は生まれた時からこのふたつの賢さを持っていて、その人の中で正しい賢さとずる賢さがいつも闘っているのだと、私は考えます。

もし、ずる賢さがより強い場合には、その人は自分中心に行動し、周りの人と自分を見比べて、ねたんだり誇ったりするでしょう。そんな人たちが増えたら世界は暗くなり、争いが絶えなくなるに違いありません。

でももし、神さまからいただいた正しい賢さが心の中で大きくなれば、その人はますます優しく穏やかになり、誰にでも親切で、うそをついたり人をだましたりしないでしょう。そんな人たちが増えたら世界は明るくなり、楽しくなるに違いありません。みんなが自分を好きになり、イエスさまを好きになり、どんな人をも大切に思うことができるようになると思います。

私は、そのような状態の世界こそが、本当の平和な世界だと思っているのです。今はまだそんな平和な世界は遠いなと感じます。でも私は決してあきらめません。何故なら笑顔よりも涙の方が多い今の世界の中にも、イエスさまの平和が必ず来ると信じている人たちがいるからです。聖書の言葉を守り、誰かのお役にたちたくて、よい行いを続けている人たちがいる。イエスさまに信頼して平和を祈り続けている人たちがいる。神さまの賢さの種、正しさの種を蒔き続けている人たちがいる。その種は、今は小さくても神さまがそれを大きな木に成長させてくださる。私にはそう信じることができるからです。

上から出た知恵

聖書 ヤコブの手紙3章13〜18節

暗唱聖句 上から出た知恵は…憐みと良い実に満ちています。
ヤコブ 3：17

聖書から…

ねたみ、利己心、自慢、嘘…ヤコブはこれらを「地上のもの、この世のもの、悪魔から出たもの」だと言いますが、自分の内心を見透かされているようで、ぎくっとしてしまいました。「神を信じ、神中心に生きる教会では、自分の思いを脇において、神さまを第一に生きるのではないか」と思いたい自分がいます。けれども、たとえ神の愛と恵みを知らされて、教会に集められている私たちであっても、そのこと自体は、教会に集められている私たち自身が特別な存在になったとか、そうでない人たちよりも優れているとか、そういうことでありません。ねたみや利己心、自慢、嘘は、教会には関係ないものではないのです。教会内にも、隠されていたとしても存在するものなのです。イエスさまなしに自分中心でない人はおそらくいません。

ではどのようにして、この世の「知恵」ではなく、神の賜物としての「知恵」に生きることができるのでしょうか。ヤコブは、上から出た知恵は、「純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐(あわ)れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません」（3：17）と言います。これらの言葉を読むと、イエスさまの姿や生き様が目に浮かんできます（「**聖書の学び**」より）。

私たちが上からの知恵に生きることができるのは、イエスさまとの人格的な関わりを通してなのだと思います。イエスさまが私たちと共におられ、この私のうちにさえ生きてくださるときに、この世の「知恵」ではなく、神の賜物としての「知恵」に生かされていくのです。

分かち合おう

- 自分中心、序列、自慢や嘘がある〝この世〟に、イエスさまの生き方は大きなインパクトを与えました。私たちは自分の力ではこの世の知恵に対してなんの力も持たないものでありますが、純真、温和で優しく、従順な、偏見はなく、偽善的でもないイエスさまの生き方をヒントにした時に何かが変わった経験があったら分かち合ってみましょう。

- ヤコブの時代、残念ながら教会内部にも争いがあったようです。しかし、内輪で争っていれば潰れたであろう教会が二千年間も続いたのは、赦(ゆる)された罪人たちのコツコツした歩みがあったからだと思います。上から出た知恵に突き動かされて、純真、温和、優しく、従順、憐れみ、良い実の賜物が、今も私たちに与えられ、またお互いの中にも与えられています。互いに賜物を思い起こしてみましょう。

幼小科

上から出た知恵

聖書 ヤコブの手紙3章13〜18節

暗唱聖句 上から出た知恵は…憐みと良い実に満ちています。
ヤコブ 3：17

16課

7月18日

聖書から…

手紙の中でヤコブは「知恵」には２つの種類があると言います。１つは「何が神さまに喜ばれるだろうか？」と考えるための知恵です。これは神さまからいただく知恵で「上から出た知恵」です。それは優しく穏やかで、誰にでも親切で、うそをついたり人をだましたりしない知恵です（おはなしより）。もう１つは「地上の知恵」です。他の人のことを考えず、自分だけに良いようにと願うための知恵です。神さまではなく自分を中心に考える知恵は、自慢や嘘や混乱やあらゆる悪い行いの実を結びます。「上からの知恵」を用いて歩む時に、争いではなく平和を結ぶ者とされるのです。

活動①

「隣人のために知恵を使って」

●準備●トランプなどのカード 30 枚ほど、新聞紙、ガムテープ、ストップウォッチ（スマホ等）

①新聞紙全面２枚を重ねて斜めに硬く丸めて巻き、ガムテープで巻きを留めて長さ 1m 位の新聞棒を人数分作ります。

②新聞棒の先端にガムテープを仮止めで「逆巻き」に貼り「トリモチ状」の棒にします。逆端には普通にガムテープを２段巻いて持ち手部分とします。

③２人１組のチームに分かれます。

④１辺 1m 位のスペースを定めます（床に線を引いたり、座布団を４枚合わせたり）。

⑤スペースの中にカードを適当に散らして置きます。

⑥新聞棒をトリモチのように使い、何秒ですべてのカードを取れるか計ります。

●ルール●

・ゲーム中は新聞棒の持ち手部から手を離してはいけません（重要）。

・先端に着けて良いカードは１回に１枚だけです。何枚も続けて着けずに、１枚ずつ取ってください。

・競争ではなく「どうやれば２人１組で、早くカードをすべて取れるか」を考えましょう。

●ヒント●

・「自分がたくさん取ろう！」と欲張るよりも、仲間と協力して「渡し合う」ほうが早くクリアできます。メンバーが自分たちでヒントに気付けない場合にはリーダーが実演してみせると良いですが、最初からはヒントを教えないようにします。

活動②　ワークシート

「上からの知恵は…」

①「上からの知恵」とはどういうものでしょう？今日の聖書箇所を読んで書き出してみましょう。3：17 にある「純真って？」「温和って？」私たちの言葉にしてみましょう。

②書き出した「上からの知恵」って、例えばどういうことでしょうね？今まで自分が受けたことやおこなったことを思い出して書き出してみましょう。自分が受けた時、どんな気持ちだったでしょうか。

上からの知恵は…

上からの知恵は…

何よりもまず、＿＿＿＿＿で、
さらに、＿＿＿＿＿で、＿＿＿＿＿く、
＿＿＿＿＿なものです。
＿＿＿＿＿と＿＿＿＿＿に
満ちています。

☆「上からの知恵」をもちいて、自分が誰かからしてもらったことや、自分が誰かにしてあげたことはありますか？
よく思い出して、下に書き出してみましょう！

聖書の学び

主が来られるときまで

聖書　ヤコブの手紙5章7〜20節

暗唱聖句　農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。ヤコブ 5：7

17課

7月25日

裁く方が戸口に立っておられるから

いつの時代の教会にも通底するような諸問題について濃(こま)やかな助言を語ってきたヤコブは、手紙の終わりに「主が来られる時が迫っているからです」（5：8）と、この手紙を送る大きな理由を語ります。そして終末を意識して生きる生き方を、愛する同胞たちに具体的に示そうとします。彼はまず「忍耐しなさい」（5：7）といいます。「忍耐した人たちは幸せだ」（5:11）とも言い、農夫、預言者、ヨブを引き合いに出してなぜ忍耐が必要なのか、忍耐した人たちを幸せと思うのか、を語ります。農夫は種を蒔いたらあとはただ「地の尊い実りを待つ」（5：7）。これが農夫の忍耐です。エレミヤは、主の言葉を「押さえつけておこうとしてわたしは疲れ果てた。…わたしの負け」（エレミヤ 20：9）と言いました。主の力に圧倒されて彼は主のみ心の成就を信じ得た。だからこそ艱難(かんなん)と悲しみに忍耐できたのだと思います。「もうたくさんだ。いつまでも生きていたくない」（ヨブ 7：16）。どんなに否定的な言葉を吐いても毒づいても、ヨブは決して神さまから目を離しませんでした。これがヨブの忍耐でした。忍耐とは、痛み苦しみをただ我慢することを言うのではありません。我慢の先に希望を見い出すがゆえに厳しい現実を耐え抜く、これが忍耐です。農夫、預言者、ヨブ、それぞれが忍耐することで得た幸せが何だったのか、私たちにははっきりとは分かりません。しかし彼らは、「主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方」（5：11）だと心から告白できただろうと思うのです。終末に至る「教会の時」を生きたヤコブとその教会も、その途上にある現代の教会も共に、その道行きは厳しく理不尽に満ちています。しかし私たちは、忍耐した人たちは幸いだとのヤコブの言葉を信じることができます。主に信頼し、終末に希望をおくことができるのです。

然りは然り、否は否

イエスさまが山上での説教の中で語られた言葉を、ヤコブはここで繰り返しています。「誓いを立ててはなりません」（5：12）。誓うとは、将来を予測して確約することです。一瞬先のことも見えない人に、どうして確約などできるでしょうか。イエスさまは「髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである」（マタイ 5：36）とも言われました。知らず知らず思い上がり、高ぶっていた自分自身を見せつけられる思いがします。私たちは時を支配される方(かた)の前に謙(へりくだ)り、人としてのわきまえをもって、「『然り』は『然り』とし、『否』は『否』としなさい」とのヤコブの言葉を聞かなければなりません。そのように謙遜に生きてこそ、喜んで終末を迎えることができるのでしょう。

祈りと賛美

「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい」（5：13）。ヤコブは手紙の最後に、

誰もが生涯のうちに経験する苦しみのひとつ、病気を取り上げています。そして病気を（人生の悩み苦しみを）運命や宿命のせいにせず、社会や人のせいにせず、「然り」を「然り」とし「否」は「否」として受け入れ、主が癒やしてくださることを信じて希望を失わず忍耐するようにと勧めるのです。ヤコブは「正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします」（5：16）と言います。信仰の友のとりなしの祈り、共同体の祈りは、大きな力なのだと言っているのです。一人で神さまに向き合うことは祈りの基本です。しかし同時に、私たちには信仰共同体である教会に祈りを託すことが許されているのです。友の祈りに期待し、祈りが聞かれることを信じて、時が満ちるのを忍耐して待つことができるのです。このように祈り祈られ、支え支えられながら、教会は終末を目指して進み続けていくのでしょう。

準備のための聖書日課			
19日	㊊	ヤコブ4:1～12	主が高めてくださる
20日	㊋	エレミヤ20:7～9	わたしの負けです
21日	㊌	ヨブ記7:9～16	放っておいてください
22日	㊍	ローマ5:1～5	希望に生きるために
23日	㊎	マタイ5:33～37	然り、然り、否、否
24日	㊏	ヤコブ4:13～5:6	主の御心を求めて

成人科

● 終章では、忍耐すること、祈ることが勧められます。忍耐するとは、嫌なことが過ぎ去るまで我慢（がまん）してただ待つことではありません。先にある希望を仰ぎ見ながら現在の痛み苦しみを耐え忍ぶこと、痛み苦しみの意味を思い巡らしながらその時を歩み続けることではないでしょうか。では、先にある仰ぎ見るべき希望とは何でしょうか。それは主が来られる時、終末です。神さまが人と共に永遠に居られ、地上で流した涙が無駄でなかったことが分かり、死も悲しみも嘆きも労苦もなくなる終末。「終末」のイメージを言葉にしてみましょう。

● み言葉に押し出されて行動することを勧めてきたヤコブ書の結びが「祈り」であることは喜びです。祈りは、万人に開かれている神の国への最初の行いであり、地上での最後の行いでもあるのでしょう。嘆き、願い、賛美、とりなし。すべて祈りであり祈ることに制約をかけ得るものは何もありません。ここでは共同体の祈りの祝福についても書かれています。時空を超えて祈り合えた、知らない者同士が祈りで一致できた、祈れない時祈りを託したなど複数での祈りにも感動が伴います。分かち合ってみましょう。

主が来られるときまで

聖書 ヤコブの手紙5章7〜20節

暗唱聖句 農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。ヤコブ５：７

ヤコブの手紙は終わりに近づきました。

皆さん、終末という言葉をご存じですか。十字架に架けられ死んでしまわれたイエスさまを神さまは甦(よみがえ)らせました。復活のイエスさまの姿は私たちの目には見えませんが、確かに私たちと共にいてくださいます。イエスさまが、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言ってくださったからです。「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携(たずさ)えて来て、それぞれの行いに応じて報いる」とも言われたからです。「わたし」とはイエスさまのことです。「終末」とは、共にいてくださるイエスさまが、大きなお働きのために改めて天から降って来られる、という約束です。その時には誰の目にも栄光に輝くイエスさまの姿が見えるのでしょうね。

さて、その大きなお働きとは「それぞれの行いに応じて報いる」ことです。地球上に生きた人は一人残らずイエスさまによる「評価」を受けなければなりません。その日のことを終末というのです。イエスさまのみ前に立った時、「忠実な良い僕(しもべ)だ。よくやった」とほめていただきたいですね。でも、どのような人がイエスさまのおほめにあずかるのかは誰にも分かりません。分かっているのは、終末を喜びの日として迎えるためには、この世での忍耐が必要だ、ということです。

忍耐するとは、希望を失わずに苦しみに

耐えることを言います。いやなことや悲しいことから逃げ出さないこと、あきらめたりやけになったりしないこと、今は病気やケガで苦しくて痛いけれど、きっとよくなると信じて待ち続けること。

そんな忍耐が私にできるかな、私はそんなに強くない、などと心配になる人もあるかもしれません。しかしイエスさまは、ひとりで頑張るようにとは言っておられません。私たちは心の中の悩みや悲しみをイエスさまに打ち明けていいのです。もちろん良いことやうれしい気持ちも。それが祈るということなのです。自分で祈れない時は、教会の人たちに「イエスさまに祈ってほしい」と頼むことができます。また、祈れないという人に代わって私たちが祈ることもできるのです。ひとりではないことが分かると、私たちは忍耐することができるようになります。困難や災難に負けずに忍耐している姿は、まわりで同じような思いをしている人たちを勇気づけ、励まします。どうか皆さん、このことを忘れないでいてください。

こう結んで、ヤコブは手紙を書き終えました。

主が来られるときまで

聖書 ヤコブの手紙5章7〜20節

暗唱聖句 農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、
大地の尊い実りを待つのです。ヤコブ５：７

聖書から…

「忍耐」という言葉からどんなものをイメージしますか。私は嫌なことをひたすら我慢することをヤコブは言っているのだと最初感じてしまいました。しかしよくよく聖書を読んでいると、そうではないことがわかりました。もし理由もわからずに一方的に我慢や忍耐を強いられたら、それは耐え難いものです。しかし、もし自分の将来の夢や希望のために今は忍耐の時なのだとしたら、その人は喜んで忍耐するのではないでしょうか。

ヤコブは手紙の最後に、「主が来られる」という将来の希望を記します。それは、農夫にとっての恵みの雨のような、喜びをもたらしてくれるような出来事です。主が来られる希望があるのだから、自暴自棄（じぼうじき）になったりせずに、今できることをしようではないか。苦しんでいるなら祈り、喜んでいるなら賛美し、病いの時には教会の人に祈ってもらう。そのような毎日の積み重ねがヤコブのいう「忍耐」なのでしょう。

信仰があっても試練はあります。祈りあえる仲間がいることは、試練の時に大きな力になります。ヤコブ書全体を通して見てみると、互いに妬（ねた）みあったりしている現実があるのだけれども、みんなで一緒に解決していきたいというヤコブの願いが最後に込められているのだと思います。

分かち合おう

- ヤコブは忍耐しなさいと言いますが、それはひとりぼっちで頑張れと言っているのではないようで、土台には共同体があります。忍耐とは決して孤独なたたかいではないことを覚えたいと思います。どんな祈りの課題がありますか？他者のため、世界のために現在どんな祈りの課題があるでしょうか。また、誰にも打ち明けることができないような祈りも、自分の奥底の思いをなんでも言うことができるイエスさまがおられることも覚えたいと思います。

- 青年の時には、将来の希望が叶う事もあるでしょうし、叶わない事もあります。私自身は叶わないことの連続でした。そういった時、ラインホルド・ニーバーの祈りが迫ってきました。「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を与えたまえ」（大木英夫訳）。

- ７節には、たとえとして農夫が出てきます。自然災害というどうにもならないことがあっても一からやり直す農夫には実りという希望があるように、私たちにも希望があることを覚えたいと思います。

幼小科

主が来られるときまで

聖書 ヤコブの手紙5章7〜20節

暗唱聖句 農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。ヤコブ５：７

17課

7月25日

聖書から…

ヤコブは手紙の最後に「忍耐しなさい」と語ります。耐え忍ぶという言葉と我慢するという言葉とは似ています。でもヤコブが伝えたいのは「何があっても我慢をしなさい」ということではありません。農夫が大地の尊い実りを楽しみに待ち望むように、み言葉を聞いて知っている私たちはイエスさまが再び来られるその日を楽しみに待ち望みながら、今、目の前にある色々なことに対しても「イエスさまを待ち望む希望を持って忍耐しましょう」と伝えているのです。辛いことや苦しいことをただ「我慢」するのではなく、イエスさまが与えてくださる約束の実りの日を期待して「楽しみに待ち望む」こと。それこそがヤコブが伝えたい「忍耐」の意味なのです。

活動①

①『讃美歌 21』575 番「球根の中には」（日本基督教団讃美歌委員会）を歌います。
②球根（種）から芽（命）が生まれ・成長し・実りを結ぶお話や、今日の「農夫の忍耐」のお話をします。
③小さくうずくまった姿勢で「球根（種）のポーズ」になります。
④そのポーズのまま、もう一度「球根の中には」を賛美し、最後まで歌い終わったらリーダーの合図で跳び上がりましょう。
※メンバーには「球根（種）ポーズ」の間は、ジッと動かないで歌うことと、最後の合図で跳び上がる事を事前に説明しておきましょう。

活動②　ワークシート

「希望への忍耐」

●準備●ワークシートをコピー・両面テープ（のり）・ハサミ

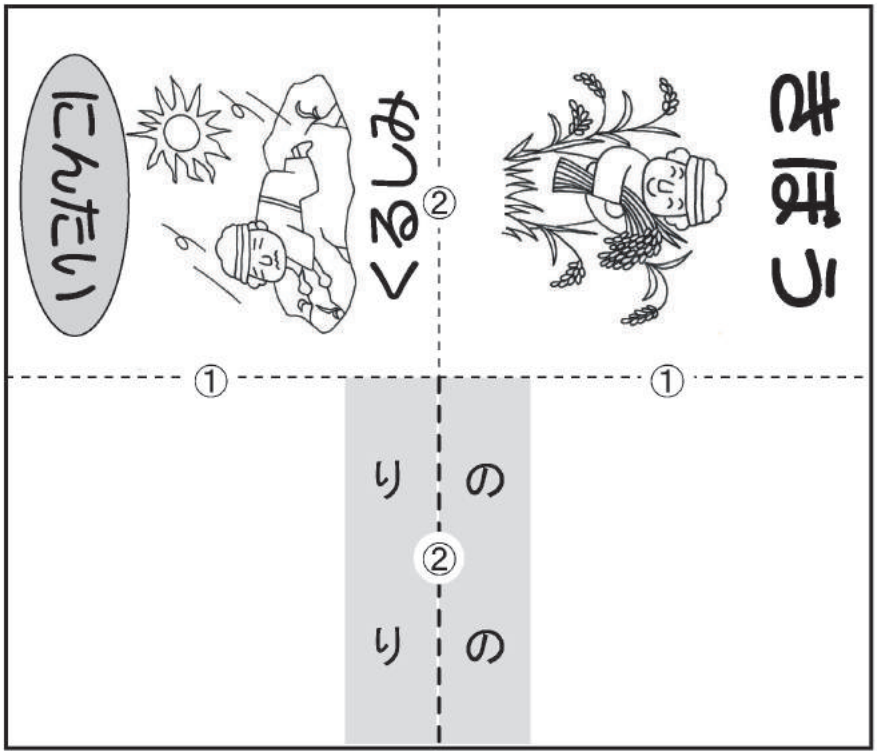
①ワークシートからパーツ１とパーツ２を切り取ります。
②パーツ１の①を山折りにし、内側を両面テープで貼り合わせ「1 枚のパーツ」状態にします。
③パーツ２も②と同様に「1 枚のパーツ」状態にします。
④パーツ１とパーツ２それぞれ、指示線に従い折り目をつけます。
⑤パーツ２の「のり」部分に両面テープを貼り、パーツ１の「の」「り」部分に合わせて貼り付け、最後に折り目を押さえ付けます。

●遊び方●

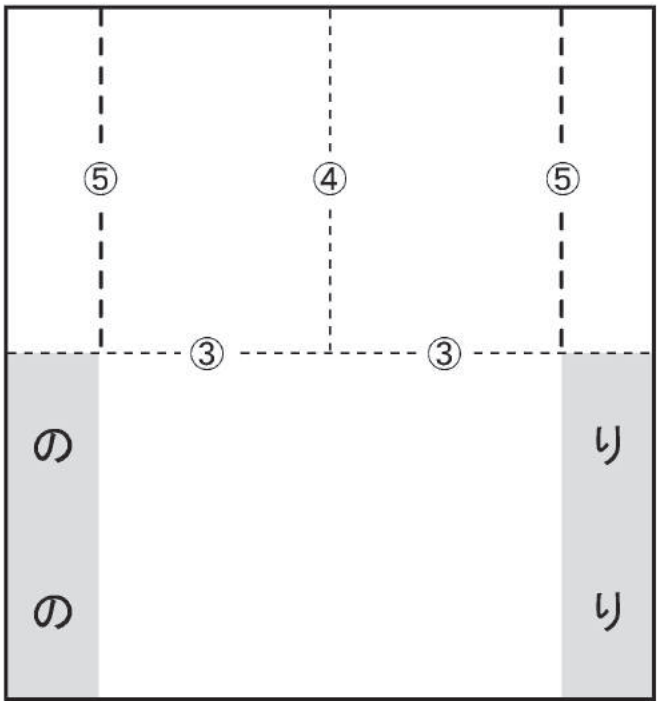
①「きぼう」面を底面にして、テーブルなどの上に置きます。
②「くるしみ」面の「にんたい」部分を指で押し、パッと離します。
③上手くタイミングが合うと「くるしみ」面が倒れて「きぼう」面に変わります。
④根気良く、何度もチャレンジしてみましょう。

・何回で「くるしみ」から「きぼう」に変わるかを数えてみましょう！
・どうしても上手く行かない時は、折り曲げ角度を少し広げると倒れやすくなります。

パーツ1



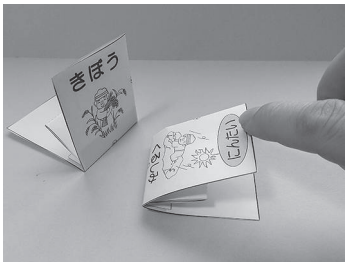
パーツ2



きりとり ————

やまおり - - - - - -

たにおり — — — — —



仕上がり見本

聖書の学び

エゼキエルの召命

聖書　エゼキエル書2章1～10節（参照1：1～3）

暗唱聖句　彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。エゼキエル２：７

18課

8月1日

ケバル川の河畔で

捕囚民のひとりとしてカルデアの地に移されて５年目、エゼキエルはケバル川のほとりでイスラエルの主の顕現を体験します。「これが主の栄光の姿の有様であった」（1：28b）。神を見てしまった彼は思わずひれ伏しました。この時代、神を見た者は死ぬと言われていたからです。「そのとき、語りかける者があって、わたしはその声を聞いた」（1：28c）、「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる」（2：1）。エゼキエル書において彼は一度たりとも主からその名前を呼ばれることはありません。主からの呼びかけは常に「人の子」。人の子とは、人間であること以上の特別な何をも持たない者、という意味です。この呼び名に、託された言葉を伝えることに忠実な預言者であれ、との主の期待を感じます。「自分の足で立て」。そう命じられても起き上がれなかった彼を立ち上がらせたのは、彼の内に入った主の霊でした。人を用いようとなさる時、主は万端を整えてくださるのです。エゼキエルは主の声に耳を傾ける力を与えられたのでした。

召しの言葉を聞く

「わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす」（2：3）。これがエゼキエルへの召命の言葉でした。5節から８節の中に「反逆の民（家）」という言葉が５回も使われています。主自らが選び、愛し、手を取るように守り導いたイスラエルはしかし、逆らう者、背く者となった。すでに先祖の時代から彼らはそうであった。この主の言葉には痛恨と、預言者を送ってでもイスラエルを立ち返らせたい情熱とが込められています。「人の子よ、彼らを恐れてはならない。その言葉を恐れてはならない。たじろいではならない」（2：6）。主は矢継ぎ早にエゼキエルに命じられます。躊躇う暇を与えないことで彼を恐れから遠ざけ、召命に前向きに立ち向かわせるためでしょう。「彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない」（2：7）。繰り返しにも聞こえる主の言葉の端々には、彼がその使命を遂行するための配慮がありました。反逆の民を前に語り始める時、まず「彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と」（2：4）。エゼキエルは自分で考え自分の言葉で語り宣べる必要はないのです。主の言葉をそのままっすぐに伝えることが彼の使命なのです。主はまた「彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう」（2：5）とも言われます。イスラエルが聞く、聞かざるにかかわらずエゼキエルの預言が必ず成就すること、反逆の民は彼を主の預言者として認めざるを得なくなることを予め告げてくださっているのです。

わたしが与えるもの

「わたしが与えるものを食べなさい」（2:8）。こう声があり、差し出された手には巻物がありました。その表にも裏にも、哀歌と呻きと嘆きの言葉が記されていました。それはエゼ

キエルが語るべき言葉でしょうか。それとも困難極まるイスラエルの運命の物語なのでしょうか。いずれにせよ、これをエゼキエルが食べる、ということは巻物の内容と彼が一体化することを意味します。「食べなさい」との指示に従うことは、一切を命じた方に委ねた証しとなります。「主の霊が内に入って私を立ち上がらせたように、私の中の巻物（主の霊）がみ心のままに私を動かし用いてくださるに違いない」。エゼキエルはこの象徴行為によってその確信を強くしたことでしょう。神の言葉を足しも引きもせずそのまま語る。この預言者の姿勢を彼は確認し、召しに与る決心を固めたのでした。預言者には、主からの召命と自らの応召を証しする「徴（しるし）」が求められます。主の姿を拝し、み声を聞き、その手から賜った巻物を食べた、という徴（経験）は預言者エゼキエルの厳しい生涯を支え続けたことでしょう。

準備のための聖書日課			
26日	㊊	列王記下24:8～17	捕囚として 連れ去られた人々
27日	㊋	詩編79:8～13	捕われ人の嘆き
28日	㊌	詩編137:1～9	バビロンの流れの ほとりに
29日	㊍	ヨハネ黙示録 10:1～11	開かれた小さな巻物
30日	㊎	エゼキエル1:1～21	主の言葉が臨む
31日	㊏	エゼキエル1:22～ 28	主の栄光を拝して

成人科

● 神さまはエゼキエルを「人の子」と呼ばれます。被造物としての人、神の民の一人、そんな意味でしょう。しかし「人」なら誰でもよいというのではありません。ご自身のみ業の遂行のために主は、み心に適う一人を選び抜かれるのです。主は捕囚民を導く器として、他でもないエゼキエルを選ばれたのです。あるいは、主の前に謙（へりくだ）る者としてエゼキエルが自らをそう称したのかもしれません。イエスさまもしばしばご自身を「人の子」と言われました。主がエゼキエルを呼ばれる際の「人の子」、イエスさまの自己認識の「人の子」、謙る者としての「人の子」。違いを考えてみましょう。

● 「自分の足で立て」と言われても伏したままだったエゼキエルを立ち上がらせたのは主の霊でした。神さまは手ずから巻物をエゼキエルに渡し、食べよと言われました。すべてはエゼキエルが使命を果たすための備えだったのです。神さまの召しを感じた時、私などには無理…と怖じ気づいたことはありませんか。神さまが私を召される理由は分かりませんが、使命を全うするための十全の備えをしてくださるのは確かです。一歩踏み出してみましょう。

エゼキエルの召命

聖書 エゼキエル書2章1～10節（参照1：1～3）

暗唱聖句 彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。エゼキエル２：７

バビロンの王によってエルサレムの町や神殿が破壊され、ユダの王や高官、町の有力者や腕のいい職人と一緒に、祭司の子エゼキエルはカルデアの地に連れて行かれました。ケバル川のほとりに捕囚民たちの住む場所が与えられ、そこでの暮らしが５年目に入ったある日、エゼキエルは神さまの幻を見、その声を聞いたのです。

イスラエルの神さまがこんな異邦人の国におられるはずはない。捕囚民の誰もがそう思って力を落としてしまっていました。だからエゼキエルは驚きと恐れのあまり、地面に倒れ伏してしまいます。その時声が聞こえました。「人の子よ、自分の足で立ちなさい。わたしの命令を聞きなさい」。神さまの声です。聖書には、「霊がわたしの中に入り」と書かれています。立ち上がろうとするけれども立てないでいたエゼキエルは、神さまの霊の力によって立ち上がることができたのでした。

このことは、やがて始まるエゼキエルの預言者としての働きが、すべて神さまによって支えられていくことを表しています。神さまはエゼキエルに「私に逆らったイスラエルの民に、あなたを預言者として遣わす。彼らにわたしが告げる言葉をすべて伝えなさい」と言われました。イスラエルは、元は神の民と呼ばれた民族、神さまから選ばれた人々でした。神さまに愛され育てられ支えられたのに、力をつけるに従ってその心は神さまから離れていき、やがて神さまに逆らうようになっていったのです。そのことを悲しまれた神さまはイスラエルを裁くために、さらに彼らが悔い改めて神さまのもとに帰って来るように、預言者を遣わそうとされました。そして選ばれたのがエゼキエルです。

預言者として立つ、ということは簡単なことではありません。「あざみといばらに押しつけられ、蠍（さそり）の上に座らされる」という言葉がその働きの凄（すさ）まじさ、困難さ、またいつも命がけであることを表しています。エゼキエルはそんな仕打ちに自分が耐えられるとは思えなかったでしょう。けれども神さまに従う決心をしました。神さまが「恐れることはない」と言われたからです。神さまが守ってくださると信じることができたからです。エゼキエルは神さまから「巻物を食べなさい」と命じられ、その通りにしました。それは、神さまの力を体の中に取り込むことであり、自分の考えを捨てて神さまの仕事に全力を傾ける決意のしるしであり、神さまにのみ信頼し期待することの表明でした。

エゼキエルの召命

聖書 エゼキエル書2章1〜10節（参照1：1〜3）

暗唱聖句 彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。エゼキエル２：７

聖書から…

エゼキエルという名前は「神が強くする」という意味です。父である祭司ブジが激動の時代に、神さまこそが強いのだとの信仰を告白するように名付けたのでしょう。そのエゼキエルに神さまは「人の子よ」と呼びかけられます。

「神が強くする」という名前ではなく、「人の子」。人の子と呼びかけるその心は、「人間であること以上の何をも持たない者」という意味があるようです（「**聖書の学び**」より）。

エゼキエルが、何か特別な人間であったから、選ばれたのではなかったのです。そうではなく、本当に、ただの人。私たちと同じように。ケバル川のほとりに捕囚のみんなと一緒に暮らしていた平凡な人に、神さまは語りかけ、「自分の足で立て」と言って霊を送って立たせ、神さまの言葉を語るように押し出していきます。

エゼキエルは特別な人間ではなく、私たちと同じただの人であっても、その人を招く神さまは、エゼキエルという人をユニークに、その人らしく用いようとしてくださいます。

分かち合おう

- 自分は他の人とは違うのだと肩肘はって生きていた時期がありました。しかし、仲間との出会いを通して自分もまた人並みな人間であることに気づくことができました。もしかしたらそれこそが、地に足ついた、あるいは自分の足で立った、ということなのかもしれません。しかし、人並みなただの人と気づいたと同時に、自分を含めたみんながとても個性的だとも思わされました。自分からあえて他の人との違いを際立たせなくても、神さまご自身が私たちそれぞれにその人らしい部分を与えてくださっているのではないでしょうか。ユニークでない人は誰もいないことを覚えたいと思います。

- 神さまは、どこか外側から人を引っ張ってくるのではなく、民の中で〝共に〟悩み苦しみながら生きる人並みなただの人を用いられました。共にいるからこそ、語ることの困難さがあったでしょう。聞き心地の良い言葉は語れても、そうでない言葉を語ることは難しいです。日常生活の中で、自分が言うべきと感じたことを臆（おく）せず言っていくというのは簡単なことではありません。諦（あきら）めてしまったり、計算したりして黙っていることはないでしょうか。改めて、私たちはどこに向かって生きるのかを考えさせられます。

幼小科

エゼキエルの召命

聖書　エゼキエル書2章1～10節（参照1：1～3）

暗唱聖句　彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。エゼキエル２：７

18課　8月1日

聖書から…

エルサレムから遠く離れたバビロンの地へ連れて行かれた人々の中にエゼキエルもいました。主なる神さまが、エルサレムの神殿に住んでおられると信じていたイスラエル人たちは「バビロンに主なる神さまはおられない」と悲しんでいました。神さまはそのバビロンの地で元気を失い、倒れていたエゼキエルに語りかけます。「自分の足で立ち上がりなさい」と。神さまは遠く離れてなどおられなかったのです。神さまから預言者としての働きを与えられたエゼキエルは立ち上がります。エゼキエルと共におられた主なる神さまから力をいただき助けを受けて、エゼキエルは人々に預言を伝え始めました。

活動①

「入ろうと入るまいと」

●準備●籠や箱などの入れ物、お手玉やピンポン玉、カラーボールなどを20個程度

神さまはエゼキエルに、みんなが聞いても聞かなくても、神さまの言葉を伝えるようにと言われました。今日は、この玉を神さまの言葉、箱をみんなの心に見立てて玉入れゲームをしましょう（それぞれの年齢層・活動場の広さなどを考慮してください）。

①箱を置く場所を決めます。
②箱を中心に円形の「立入禁止範囲」を決めます。
③立入禁止範囲の外に玉を置きます。
④「スタート」「ストップ」などの合図を決めます。
⑤定めた時間（たとえば10秒～30秒）は、立入禁止範囲の外から箱に向けて玉を投げ入れ続けます。こぼれ玉を拾うためなら、立入禁止範囲の中でも「膝から下の部分」が触れない限り進入可とします。
⑥終わりの合図後に入った玉はカウントしません。
※時が来るまで投げ入れ続ける「体現遊び」ですが、箱に入った玉の数をメンバーで競うゲームとして楽しむこともできます。

活動②　ワークシート

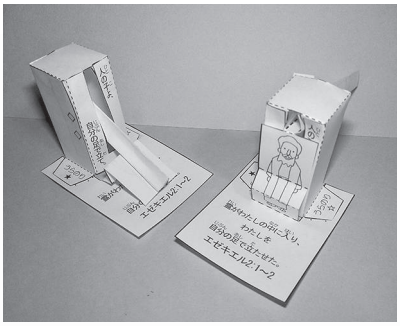
「立ち上がるエゼキエル」

●準備●ハサミ、のり（両面テープ）

①ワークシートからパーツを切り取ります。パーツ１には「きりこみ部分」もあるので特に注意します。
②それぞれのパーツに折り目をつけます。
③パーツ１「のり③」部を※の指示に従い貼り合わせ「立たせ棒」にします。
④パーツ２「のり①」部を「◇◇」部裏に貼り合わせます。
⑤パーツ２「のり②」部５カ所を四角柱内部に貼り合わせます。
⑥「立たせ棒」をパーツ２の穴に差し通し、パーツ２「うらのり☆」「うらのり★」部をパーツ１「罫線部分」の印に合わせてそれぞれ貼り合わせます。
⑦「立たせ棒」を動かし「打ちひしがれているエゼキエル」を立ち上がらせましょう。

ワークシート

立ち上がるエゼキエル



仕上がり見本

きりとり ————

やまおり - - - - - - - -

たにおり ― ― ― ― ―

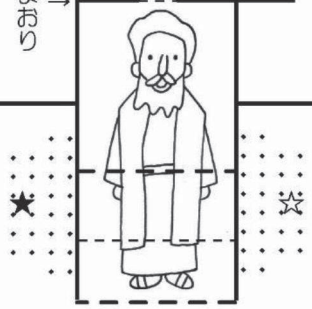
パーツ1

のり ③

※ここはぜんぶ「たにおり」

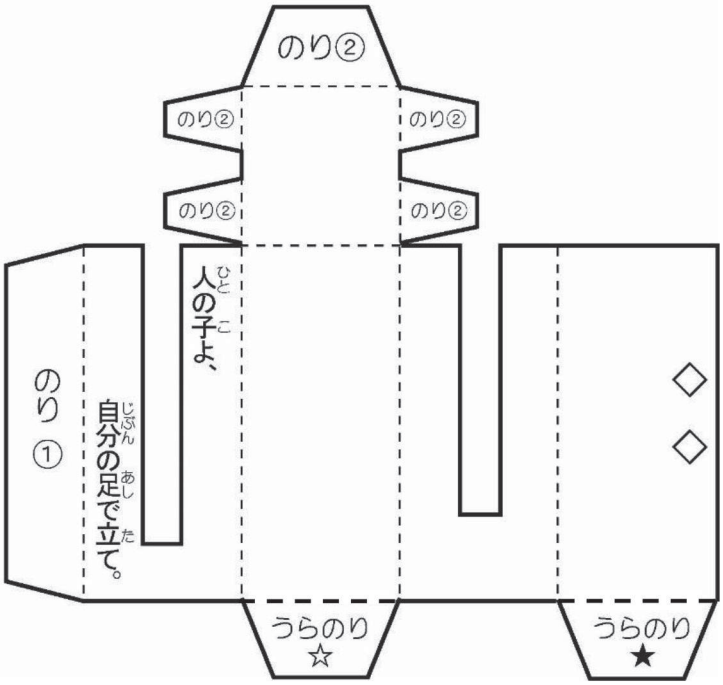
※このうしろを のり ③ とはりあわせる

やまおり →



霊がわたしの中に入り、
わたしを
自分の足で立たせた。
エゼキエル2:1〜2

パーツ2



聖書の学び

主の聖所を背にし

聖書 エゼキエル書8章1〜18節

暗唱聖句 そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。エゼキエル８：４

19課

8月8日

エゼキエル、エルサレムへ運ばれる

エゼキエルがケバル川の河畔で主の顕現に接し、神の民イスラエルへの預言者としての召しを受けてから１年と数カ月が経っていました。彼は、この頃には主の預言者として捕囚民たちに認知されていたと思われます。ユダの長老たちが彼の家に集まっていた時、エゼキエルは突然恍惚状態に陥ります。幻のうちに彼は主の姿を拝し、霊によって引き上げられエルサレムへと持ち運ばれ、降り立った所は神殿の「北に面する内側の門の入り口」（８：３）でした。４節に「そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった」とあります。エゼキエルはこれから筆舌尽くしがたい神殿の堕落をつぶさに目撃し、背信の民らに厳しい主の言葉を語っていかなければなりません。この困難な働きを前に「イスラエルの神の栄光」を混沌の中に見出せたことは、彼にとって大きな慰めであり何よりの力づけであったでしょう。

エルサレム神殿内での偶像礼拝

主の霊に持ち運ばれて、エゼキエルはあたかも報道番組のカメラが現場を走り回るように、神殿内部で行われている忌まわしい偶像礼拝を次々に目撃して回ります。神殿領域に入る門の北側には異教の祭壇が築かれており、主の激怒を招く像がありました。豊穣の女神アシェラ（エレミヤ17:2ほか）の像です。「あなたはほかの神を拝んではならない。主はその名を熱情といい、熱情の神である」（出エジプト34：14）。エルサレムの人々は、主がねたむほどの熱情を自分たちに傾けられる方であることを重々知りつつも、異教の像をも平然と拝んでいたのです。エゼキエルが次に連れて行かれたのは壁の向こうに作られた隠し部屋でした。ここではイスラエルの70人の長老たちが「獣礼拝」を行なっていました。壁一面に描かれた鰐、蛇、猫…。これらはエジプトの神々の姿を現していました。エゼキエルはその祭儀の中心にヤアザンヤの姿を見てしまいます。彼までも…。ヤアザンヤはヨシヤ王の宗教改革の折、指導的立場にあったシャファンの子でした。主の霊は、今度はエゼキエルをタンムズ礼拝の場へと導きます。タンムズとは草木のこと。芽吹いて成長しても季節が移れば枯れてしまう草木の命を嘆きつつ、その再生を期待する「自然崇拝」が女性たちによって行われていたのです。「あなたは、これより更に甚だしく忌まわしいことを見る」（８：15）。エゼキエルが最後に見たのは、中庭で行われていた25人ほどの人たちによる「太陽礼拝」でした。この庭に入ることのできる人は限られています。相応の宗教者たちがイスラエルの主に対する背信をあからさまに体現するように太陽を拝んでいました。彼らは主の栄光が満ちるべき聖所に対して、すなわち主に対して、背を向けていたのです。

偶像礼拝とは

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出エジ 20：4）。偶像礼拝とは「わたし」と言われる神以外のあらゆる人や物、事柄や概念などを神として信仰することをいいます。エゼキエルが神殿内の四か所で目撃した偶像礼拝はそれぞれ、豊かさへの執着、周辺強国の脅威とその力への媚びへつらい、宗教混交、背信を象徴しています。人々は、エルサレムから多くの同胞がバビロンに連れ去られ、敵のほしいままに町が略奪され破壊されても、自分たちや民族の罪を顧みることをせず、エルサレム不滅神話に固執し続け、次第に信仰の内実を失っていきました。「主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられた」（8：12）と勝手に捨て鉢になり、自分たちの目に叶うもの何にでも縋ろうとしたのです。背信の誘惑は霊的なやせ衰えや迷う心の隙間から知らぬ間に忍び込んで来るのです。

準備のための聖書日課			
2日	㊊	エゼキエル3:1～15	額も硬く心も硬い人々
3日	㊋	エゼキエル5:5～13	主に逆らう人々の末路
4日	㊌	コロサイ3:1～11	貪欲は偶像礼拝
5日	㊍	エレミヤ17:1～4	激怒を引き起こすアシェラ像
6日	㊎	出エジプト記34:10～16	激情の神
7日	㊏	エゼキエル7:1～9	災いに続く災い

成人科

● 信じ難い事態に陥った時、信じていたことが根底から覆されたと感じた時、私たちは誰に、何に、その戸惑いや悲しみや憤りを向けるでしょうか。イスラエルの人々はそれを神さまに向け、当てつけがましく偶像を拝んでいました。「主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられた」。これが彼らの言い分でした。被害者然として聖所に背を向け、神さまが忌み嫌われることを敢えて行っていたのです。加害者の立場に立つことは勇気の要ることです。でも視点を変えて見つめ直してみると、全く異なった状況や真実が見えることがあります。

● 異神を拝むだけが偶像礼拝ではありません。真の神以外の何かに心を奪われ、虜にされて、それを崇拝することをも意味します。その対象となるのは有形無形のあらゆる物も人も事柄もイメージも…。自分さえも崇拝の対象となり得るのです。私たちが生きている現代社会は、人を限りなく偶像礼拝へと誘っているように思えてなりません。自分を愛する、自分を信じる、自己を実現する…。どれも素晴らしく聞こえますが、他者との関係やつながりのないことでの自己追求は偶像礼拝と紙一重の危険をはらんでいます。改めて「十戒」を味わってみましょう。

主の聖所を背にし

聖書 エゼキエル書8章1〜18節

暗唱聖句 そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。エゼキエル８：４

神さまから預言者としての働きを命じられ、捕囚民たちからも尊敬されていたエゼキエルはある日、夢現（ゆめうつつ）の状態になってしまいます。自分の家で長老たちと話し合っていた時のことでした。幻の中で、彼は神さまから伸ばされた手の形をしたものにつかまれ、霊によってバビロンから数百㎞をひとっ飛び、生まれ故郷エルサレムへと移されたのでした。神さまはエゼキエルに荒廃した都と聖なる神殿の中で行われていた偶像礼拝の様子を見せたのです。

奴隷の地エジプトからご自分の民イスラエルを救い出された神さまはまず、「わたし以外のどんなものをも神として拝んではならない」と命じられました。しかし時とともに、イスラエルの人々は神さまへの感謝を忘れ、外国の神々に引きつけられていきました。信仰が揺らぐにつれて国の力は弱まり、まわりの国々からの侵略を防ぐことができなくなりました。また国の中でも争いが起こって大混乱におちいる中、たくさんの人々が捕囚として敵の国バビロンへと連れていかれたのでした。

破壊されたエルサレムに残された人々は、神さまは自分たちを守ってくださらなかったと、この国家の災難の原因を神さまのせいにし、代わりにいろいろなものを神に仕立てて拝むようになっていきました。農業の神といわれていた女性の像、エジプト人が神として崇めていた鰐（わに）や蛇（へび）や猫の壁画、また大自然の営みや太陽までも拝んだのです。聖なる神殿を汚（けが）し、イスラエルの信仰をすっかり腐らせてしまったのです。

神さまは何よりも偶像礼拝を嫌い憎む方、人々に対して激しい怒りを起こされました。「彼らに慈しみも憐（あわれ）みもかけない。彼らが叫んでもわたしは聞かない」と宣言されました。しかし神さまはそんな人々を見捨ててしまわれたのではありませんでした。そうではなく、神さまに背を向けて離れていった罪を赦し、もう一度ご自分のもとに立ち帰らせようと考えておられたのです。そのために立てられた預言者は、神さまの計画と自分の思いをひとつにしなければなりません。

自分の仲間たちがどれほどひどい偶像礼拝を行っているか、その信仰が荒れ果ててしまっているかをその目で確かめなければならないのはエゼキエルにとって、とてもつらいことだったでしょう。けれどもエゼキエルには小さな希望がありました。それは荒れ果てた神殿の北の門の入り口に、以前神さまが彼に見せてくださった「栄光」があったことでした。

主の聖所を背にし

聖書 エゼキエル書8章1〜18節

暗唱聖句 そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。エゼキエル８：４

聖書から…

エゼキエルは幻を通して、数々の偶像礼拝の有様をみさせられて愕然（がくぜん）としました。偶像礼拝とは、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出エジ 20：4）と語られた方以外のあらゆる人や物、事柄や概念などを神として信仰することを言います（「**聖書の学び**」より）。ここでは自然や動物、力や豊かさが崇（あが）められていました。長老ですら、「主はこの地を捨てられた」（8：12）と言いながら偶像を礼拝していましたし、女性たちは自然崇拝を行なっていました。偶像礼拝には、いろいろな形があり、年齢や経験、性別も関係なく、誰しもが陥（おちい）ってしまいがちなもので、自分は大丈夫とは誰も言えないように思います。

私たちも、偶像礼拝はいけないものということは知っていますが、ではなぜいけないのでしょうか。神さまがダメと言ったから？ 罰せられるから？ わたしは、自然や動物、力や豊かさは神さまの恵みであって、感謝すべき万物であると思います。けれども自分の物としようとする時、「自分中心」になり、「自分さえよければ良し」の世界を作り上げてしまうからだと思っています。神さまは、そのような世界を願っておられません。

エゼキエルは偶像礼拝にあふれた有様を見て、自分が立っている土台が揺れたのではないかと思います。しかし、エゼキエルは主の栄光を見ます。主の栄光によって、主が共におられることを確信させられました。主の栄光をみたエゼキエルは、主は決して見捨てられたのではないことを一人確信します。

分かち合おう

- 偶像礼拝がテーマになっています。身近にどんなものが考えられるでしょうか。「聖書から」にいくつかあげましたが、今日の聖書には他にどんなことがあるでしょうか。また神さまはなぜ偶像礼拝を戒められるのでしょうか。それぞれの言葉で分かち合って見ましょう。

- 「主の栄光とは何？」という質問をよく耳にします。「栄光」はヘブライ語で「カーボード」、「重い」という意味です。つまり、「神の重み」、「神がおられることを思い起こさせてくれるような何か」だと言えます。「主はこの地を捨てられた」と嘆（なげ）く長老たちとは対照的に、エゼキエルは「いや主は共におられる。決して私たちは捨てられていない」と奮い立たせられました。聖書を通して、私たちの思い通りや願い通りを越えて、「共にいる（インマヌエル）」の約束が語られていることを覚えたいと思います。

幼小科

主の聖所を背にし

聖書　エゼキエル書8章1〜18節

暗唱聖句　そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。エゼキエル８：４

19課

8月8日

聖書から…

「なぜ私たちはこんな苦しい目に遭っているのだろうか？」バビロンに連れて行かれたイスラエルの人たちはエゼキエルに尋ねます。神さまはなぜイスラエルを助けてくださらないのか？ 多くの人々がそんな疑問を感じていました。その時、神さまは不思議な方法でエゼキエルにエルサレム神殿の姿を見せます。それは酷（ひど）い有様でした。主なる神さまを捨てて自分たちが集めて来た偶像を『神さま』として礼拝していたのです。人を創られた神さまではなく人が作ったモノを神さまとして頼りにしている偶像礼拝の姿。神さまが民を見捨てられたのではなく民が神さまを裏切っている姿でした。でもそんな絶望的な罪の姿の中にも、エゼキエルは主の栄光という希望の光を見たのです。

活動①

「不安定な土台と安定した土台」

●準備●フカフカのクッション、ジェンガなどの積み木

①床やテーブルなどの安定した土台にジェンガや積木を積上げます。

※誰が一番高く積めたかなどを競っても良いと思います。

②次にフカフカのクッションを床やテーブルに置き、その上にジェンガや積木を積上げてみます（どう頑張っても積上げられないくらい不安定なクッションを利用してください）。

＊神さまは、確かな土台となってイスラエルを守られていたのに、人々は神さまでは無く偶像を土台にしてしまいました。その結果、せっかくの神さまの祝福が崩れ去ってしまいました。

活動②　ワークシート

「偶像ってなんだろう？」

偶像とは、人が作った「作りモノの神さま」の事だけではありません。主なる神さまを忘れ、神さま以上に大切にしてしまっているものはすべて、イスラエルの人々が拝んでいた偶像と同じで、神さまに悲しまれるものとなってしまいます。

自分の身の回りや、世界の中にどんな「偶像」があるかを考えて書き出してみましょう！ 神さま以上に大切にしているものは、モノだけではないかもしれません。

たとえば、お金、ゲーム、わたし…。

ワークシート

偶像ってなんだろう?

神さまよりも
大切にしているものが
あるかなぁ…

思いつくだけを書き出してみましょう！

聖書の学び

もはやむなしい幻を見ることもなく

聖書 エゼキエル書13章8〜16節（参照13:1〜7、17〜23）

暗唱聖句 そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。
エゼキエル 13：9

20課

8月15日

偽預言者たちの悪

エゼキエルに再び主の言葉が臨みました。「イスラエルの預言者たちに向かって預言しなさい」（13：1）。主が怒りを向けられたのは「自分の霊の赴くままに歩む愚かな預言者たち」（13：3）、「むなしい幻を見、欺きの占いを行い、主から遣わされてもいないのに、『主は言われる』と言って、その言葉が成就するのを待っている」（13:6）偽預言者たち、また「平和がないのに…『平和だ』と言って民を惑わす」（13：10）者たちに対してでした。主は彼らを山犬のようだ（口語訳聖書ではキツネ）と言われます。荒廃の時代の中を狡猾に立ち回り、欺きの言葉を語って人々を惑わす様子が、垣の破れから畑に入り込み農作物を食い荒らす山犬に似ているというのでしょう。主からの召命を受けた預言者は、主の霊が内にあるために無私無欲です。「主の言葉は、わたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました」（エレミヤ 20：9）とエレミヤがいうように、預言は人が創り出すものではありません。ところが偽預言者たちは、「自分の心のままに預言」（13：2）し、「わたしが語ってもいないのに、『主は言われる』と言って」（13：7）むなしい言葉や欺きの預言を語っていたのです。痛み、悲しみ、屈辱、そして挫折と絶望の中で弱り切っていた人々にとって、偽預言者たちの語る心地よい言葉は魅力的であったでしょう。「平和だ」といわれればその言葉を信じたいと願ったでしょう。しかし捕囚民たちは偽りの希望を抱いてしまって一層疲れ果ててしまうのです。そのような偽預言者たちに向かって主は、「わたしはお前たちに立ち向かう」（13：8）と言われます。彼らへの裁きの宣言は、共同体からの排斥、家系図からの名前の抹消、二度とイスラエルの地に戻ることができない、といった厳しいものでした。13 節以降にも、主が激しい怒りを発し彼らの欺瞞を徹底的に暴かれるとの予告の数々が記されています。

女呪術師の悪

主はさらにエゼキエルに語られます。「自分の心のままに預言するあなたの民の娘たち」（13：17）に預言せよと。聖書には数人の女預言者が登場しますが、ここでの娘たちは呪術師、魔女の類であったようです。ひもは結んだり縛ったりするもの、頭巾は頭や顔を覆うもの。彼女たちはそれらの小道具を使って人々の魂を捕らえて思うままに操ろうとしたのです。大仰な所作や禍々しい宣告は人を不安に陥れます。藁にもすがりたい気持ちにつけ入って貧しい捕囚民から金品を搾取していたのかも知れません。魂を支配しようとする企みに対しては、霊的な力の助けなしには対抗することができません。ここでは「わたしの民」（13：18）、「わが民（13:19,21）」、「死ぬべきではない者」（13:19）、「神に従う者」（13：22）と呼ばれる明らかに主の側に立つ人々が呪術師に苦しめられる様子と、手づから彼らを救い出そうとされる主の言葉とが語られ、霊の戦いの凄ま

じさを伺わせます。

もはやむなしい幻を見ない

捕囚民たちは元はひとつのイスラエルでありエルサレムの住民でした。敗戦によって捕虜となり異国に移され支配される身となるに至って心が荒み、いつしかその中から主への背信者が出てくるようになったと思われます。一方で、頽れてしまいそうな霊肉をどうにか保ちながら主に望みをつなぎ続けた人々も確かにいたのでした。主はそのような人々を「わたしは…わが民を救い出す」（13：23）と、宣言されます。偽預言者や呪術師の蠱惑的な幻も占いも、むなしいものとなる時が必ず来る。「その時お前たちは、わたしが主なる神であることを知るようになる」（13：23）。救いも裁きもすべて、人が主なる神を知るための主のみわざなのです。

準備のための聖書日課			
9日	㊊	エゼキエル 7:25〜27	平和はどこにもない
10日	㊋	エレミヤ6:13〜15	平和がないのに、平和、平和
11日	㊌	ミカ3:5〜8	ひとかけらのパンのゆえに
12日	㊍	エフェソ2:14〜22	キリストはわたしたちの平和
13日	㊎	エゼキエル13:1〜7	主の言葉を聞け
14日	㊏	エゼキエル 13:17〜23	魂を解き放つ神

成人科

● 想像だにしなかった事態に陥り、状況は改善どころか悪化の一途を辿るばかり。人々の気力も忍耐も限界に近づきつつある中で、それでもエゼキエルは主の厳しい裁き、耳に痛い言葉を告げ続けました。これを書いている今、世界は1年に及ぶコロナ危機の中に依然としてあります。皆が疲れ切っている。今こそキリスト者として主の慰めと希望を語りたいと心が逸る。しかし「私（主）が語ってもいない」ことを決して語らないために言葉の吟味と祈りが必要です。

● 「平和がないのに、彼らが『平和だ』と言ってわたしの民を惑わす」。この言葉は現代をも言い当てている気がします。偽物の平和は漆喰の上塗りのようなもの、雨風だけでもはがれ落ちると主は言われます。私たちは、平和とは何か、どのような状態が平和なのか、自分の中に具体的な聖書の言葉や私なりの言葉を持っていることが大事です。それに照らして欺瞞を否と言うことができ、また積極的に平和に向けての行動を起こすことができます。今日は76回目の「敗戦記念日」。「私にとって平和とは」。概念でなく具体的な言葉にしてみましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

もはやむなしい幻を見ることもなく

聖書 エゼキエル書13章8〜16節（参照13：1〜7、17〜23）

暗唱聖句 そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。
エゼキエル 13：9

20課

8月15日

エゼキエルと共にバビロンに連れて行かれたイスラエルの人々は、捕囚民としての生活が長くなるにつれて心も体も疲れ果て、徐々に信仰が弱っていきました。最初のころはそれでもみんなで心をひとつにして神さまに祈り、預言者エゼキエルの言葉に導かれながら励まし合い、支え合って生きていけたでしょう。でも年月がこんなに流れても少しも状況が良くならないことに人々は焦りを覚え、心はだんだんと荒（すさ）み希望や平和への夢がしぼんでいったのでした。

そしてついに、悪いことを考えそれを実行する人々がみんなの中から出て来るようになったのです。それは偽預言者と呼ばれる人たち、また占いや呪（まじな）いを行う娘たちでした。偽預言者たちは自分の考えや願望を、あたかも神さまが語られたことのように人々に語りました。平和などないのに「平和だ」とむなしい作りごとを語りました。人々の注目を集めようとしたのです。人々を思いのままに支配するために。また呪術（じゅじゅつ）をあやつる娘たちは、怪しげな動きで人々の心をざわざわさせて不安をあおったのです。そして自分たちの思うままに人々の心を操って貧しい人々からお金や物を奪い取ろうとしたのです。

「わたしが語ってもいないのに、『主は言われる』と言っている」。主を騙（かた）って悪事を働くことは大きな罪です。神の預言者を装って疲れて抵抗する力もない人々から搾（さく）取（しゅ）することを神さまは決してお赦しになりません。「もはやお前たちがむなしい幻を見ることも占いをすることもなくなる」と、彼らに厳しい裁きが下ってその悪い企（たくら）みがことごとく失敗に終わることを宣告されるのです。

その一方で神さまは、「わたしは、お前たちの手からわが民を救い出す」と力強い救いの宣言をされます。捕囚の民の中にも困難な中、必死に信仰を守り抜こうとする人々がたくさんいることを神さまは知っておられたのです。そんな人たちのことを神さまは「わが民」と呼んでおられます。人々は、そんな神さまの思いに気づくでしょうか。むなしい作り話や幻に期待することをやめるでしょうか。弱い自分をさえ「わが民」と呼んでくださる神さまに信頼をおいて従うことを決心するでしょうか。いつまでも、何も変らないように見える捕囚の生活。でも神さまのみわざは着々と進められていくのです。悪は必ず裁かれ、滅びていくのです。

もはやむなしい幻を見ることもなく

青少年科

聖書 エゼキエル書13章8～16節（参照13：1～7、17～23）

暗唱聖句 そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。
エゼキエル 13：9

聖書から…

「主なる神さまはこう言われる！ 平和だ、だから大丈夫。私たちはこのままでいいのだ。私たちは強い」。いい気分にさせてくれる耳心地のいい言葉の数々が偽預言者たちによって語られていました。かたやエゼキエルは、「主に立ち帰りなさい。生き方を変えなさい」と厳しい言葉ばかりを語ります。心も体も疲れ果てた人々は、聞きたい言葉の方を聞くようなりました。私たちも、自分が聞きたい言葉は喜んで聴きますが、そうではない言葉には心を閉ざしていることがよくあるかもしれません。

偽預言者たちは、主が何も語られてないのに、「主は言われる」と人々を惑わします。しかしそのメッキは剥（は）がされていくことになり、次第にその空（むな）しさは暴かれていくことになります。たとえ人の共感を呼び、人気をとったとしても、偽りの平和や占いは必ずや本物を前にしたときに暴かれていきます。

私たちも、人に気に入られる言葉、「いいね」がいっぱいもらえるような言葉をどこかで求めてしまうことがあると気づかされます。しかし、いくら人から評価されても真実の言葉でなければ、空しさが残ります。言葉の空しさを知っているからこそ、真実の言葉を求め、少しでも真実の言葉を分かち合う者とさせていただきたいと願います。人間の語る言葉の空しさと、しかし、真実の言葉を分かち合っていく者とされるには何が大切なことなのか？と考えさせられます。

分かち合おう

- SNS 上で、私たちはたくさんの言葉を目にします。様々な意見が溢（あふ）れかえり、時に社会を変革するうねりとなることもあれば、匿名（とくめい）で人を中傷したり、悪意に満ちたコメントや論破することを目的としたようなもの等たくさんあります。情報を正しく活用する力を私たち自身が身につけなくてはいけなくなってきています。今は、自分の知りたい情報のみを手に入れることが容易となっており、社会の分断は広がっています。そのような中で、自分たちが信じたい言葉ではなく、真実の言葉を求め続けていくことが大切なのかもしれません。

- 今日で敗戦から 76 年を数えます。むなしい幻を見て突き進んだ過去の反省として、目を向けたいことだけを覚えることのないようにしたいものです。自分たちが受けた「被害の歴史」にばかり目を向けがちですが、自分たちが行ってきた「加害の歴史」にも目をそらさずにいたいものです。

幼小科

もはやむなしい幻を見ることもなく

聖書 エゼキエル書13章8〜16節（参照13:1〜7、17〜23）

暗唱聖句 そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。
エゼキエル 13：9

20課 8月15日

聖書から…

イスラエルの人々がバビロンに連れて来られてから長い年月が経ちました。でも未だに解放される気配はありません。エゼキエルを通して語られる神さまの言葉に疑いを感じる人たちも現われてきました。その人たちはとうとう神さまが語ってもおられない作り話を「主はこう言われる！」と語り始めました。そして、この偽預言者たちの言葉に騙されて信じる人々も増えてきたのです。苦しみの中では嘘でも良いから自分にとって都合の良い話を信じたくなる事もあるでしょう。でも偽りの言葉の中には本当の平和は訪れません。神さまが与える約束の中に歩む時に、本当の平和が訪れるのです。

活動①

「私は言います」

イスラエルの人々は神さまの厳しい言葉よりも、偽預言者が語る嘘の言葉に聞き従ってしまっていましたね。「私は言います ゲーム」をしましょう。

①宣言する人が「私は言います」と言った後の指示にだけ従います。「私は言います」が付いていない指示には従わないように気を付けましょう

②最初の宣言者はリーダーから始めましょう。たとえば「私は言います。両手を上げてください。私は言います。右手を下ろしてください。私は言います。左足を上げてください。右手も上げましょう」。

※「私は言います」が付いていないので、ここで右手を上げた人は「アウト」です。

③「アウト」の人は座って次のゲームを待ちます。

④最後まで残った人や、残り数人になったらジャンケンで次の宣言者を決めます。

＊キツイ体勢の指示を織り交ぜるのも楽しいかもしれません。リーダーは事前に何パターンかの指示を考えておきましょう。

活動②　ワークシート

「ホントに進めるの？ すごろくゲーム」

●準備●ワークシート下部の「コマ」を人数分、サイコロ１〜２個

①スタートマスにコマを置き、順番を決めます。

②まず１回目（1個目）のサイコロを振ります。この時点ではまだコマを進めません。

③続いて２回目（2個目）のサイコロを振ります。出目が「1」と「5」の場合、「ゴール」方向ではなく「ざんねん」方向に②の出目分だけ進みます。同じく「2」「3」「4」「6」の場合は「ゴール」方向にコマを進めます。

④「ざんねん」に着いてしまった人はゲームオーバーです。

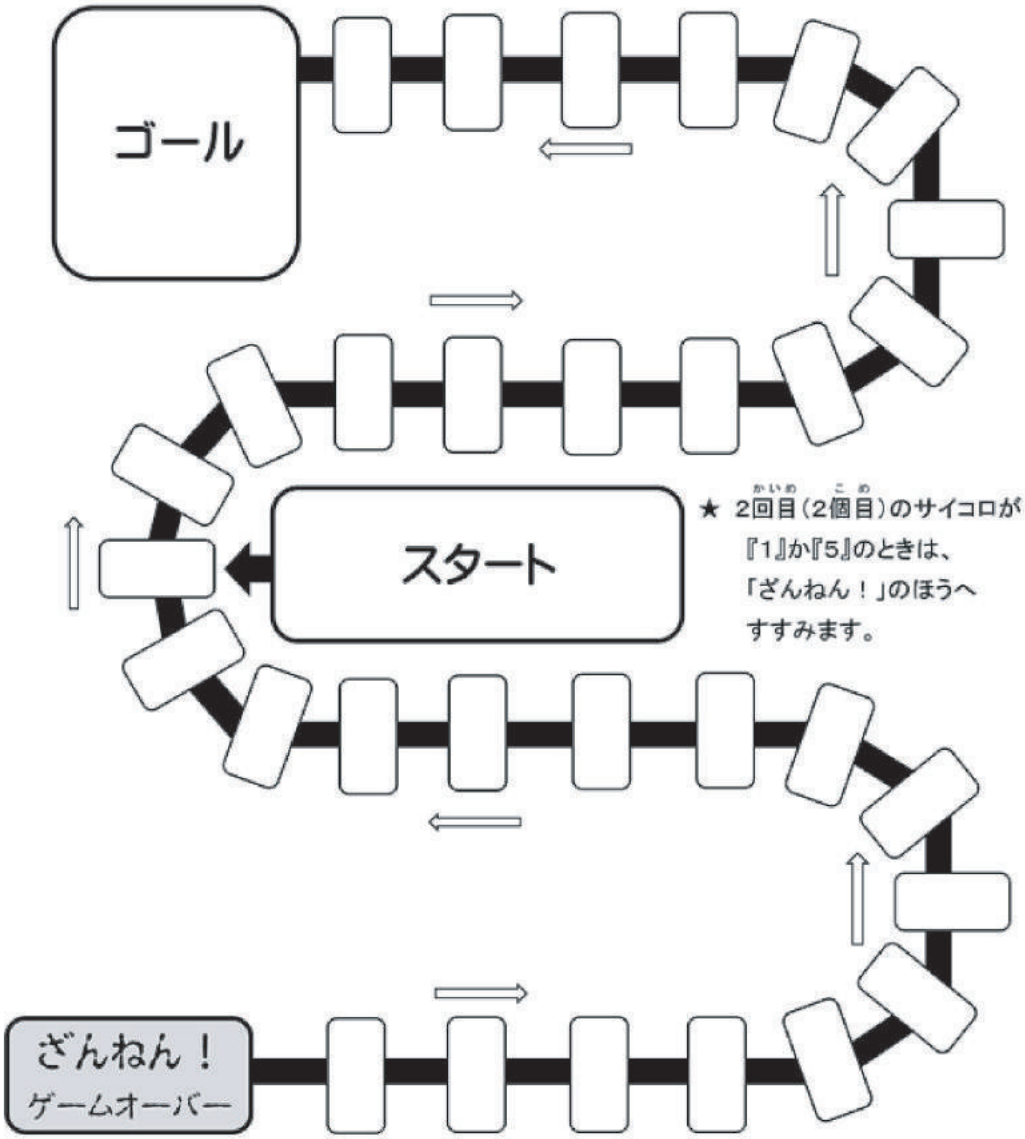
⑤「ゴール」到着はピッタリの出目でなくても良しとします。

・２回目の出目「1」と「5」を偽りの預言者に見立てたすごろくです。

＊サイコロの出目通りに進めるかどうかは分からない「すごろく」です。

ワークシート

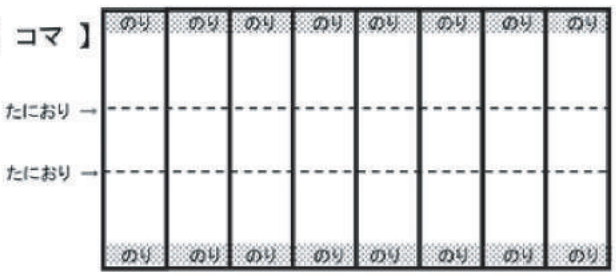
ホントに進めるの？ すごろくゲーム



≪ コマのつくり方 ≫

- コマパーツを太線に沿って切り分けます。
- たにおり部分に折り目をつけます。
- 「のり」部分をはり合わせます。
- 目印に絵や名前などを書き完成。

【 コマ 】



聖書の学び

主に立ち帰って、生きよ

聖書　エゼキエル書18章21〜32節

暗唱聖句　悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。
エゼキエル 18：30

21課

8月22日

一人ひとりを問われる主

「先祖が酸いぶどうを食べれば子孫の歯が浮く」（18：2）。イスラエルの古いことわざです。弱小民族イスラエルにとって共同体の形成は民族存続のための必須条件であり、その構成員として認められることは個人の生存の保証でもあったと思われます。それゆえ彼らは連帯責任をとても重んじました。このことわざは、権利も義務も責任も共同体全体で、世代を超えて負い合っていくことで結束が強固になる、という良い意味で使われていました。しかし主はこのことわざを口にするイスラエルの人々を強く非難されます。主はエゼキエルの口を通してこう語られるのです。人は自分の罪に対してだけ責任がある。親が子の罪の責任を負う必要もなければ、子が親の責任を負う必要もない。親が子の罪のために死ぬこともなければ、子が親の罪のために死ぬこともないのだと。主はここで「個人」の責任や罪を問うておられるのです。21 節以降ではさらにそのことが具体的に述べられていきます。まず悪人と正しい人についての対比がなされます。悪人に対しては、「犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる」（18：21）。正しい人に対しては、「正しさから離れて不正を行い、悪人がするようなすべての忌まわしい事を行うなら」「彼の背信の行為と犯した過ちのゆえに彼は死ぬ」（18：24）。さらに悪人が過ちから離れるなら「行ったすべての背きは思い起こされることなく」（18：22）、正しい人の背信と過ちゆえに「正義は思い起こされること」（18：24）がない、と。すなわち主は一人ひとりに目を向け、しかも「今この時」の有り方を問われる方なのです。

しかし主はここで、罪から離れて生きるか、正しさから離れて死ぬか、あなたたちはどちらを選ぶのか、と問うておられるのではありません。「わたしは悪人の死を喜ぶだろうか」「彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか」（18：23）。主のみ心はすべてのイスラエルが主の道に立ち帰って生きることなのです。

立ち帰って、生きよ

「それなのにお前たちは、『主の道は正しくない』と言う」（8：25、29）。都の荒廃の有様を激しく嘆（なげ）きつつも、しかしイスラエルの人々は自分たち自身の行いを顧（かえり）みることはしようとはしませんでした。18 章 2 節に「お前たちがイスラエルの地で」とあるので、このように言っていたのはエルサレムに残された住民たちであったと考えられます。エルサレムは永遠に不滅という先祖伝来の神殿神話が肌身に浸み込んでいる人々にとって、この現実を受け入れるのは確かにたやすいことではなかったと思います。ましてやそこに自分たちの罪があるなどとは考えてもみなかったでしょう。古いことわざを持ち出して罪を先祖に負わせ、自分たちをまるでその被害者のように言い募る人々はついに、主に責任があるかのように言い始めたのです。主はそんなイスラエルに激しい憤（いきどお）りを発し「その道に従

って裁く」と言われます。同時に、「イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか」（18：29）。滅ぼし尽くすとは言われないのです。「悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ」（18：30）。口語訳聖書には「あなたがたは翻（ひるがえ）って生きよ」とあります。生の基盤の変換、180度の転換を、主は求めておられるのです。「どうしてお前たちは死んでよいだろうか」（18：31）。ここでの「死」という言葉は肉体の死を意味しているのではありません。創造主なる神はイスラエルばかりか、今を生きる私たちに向かって、すべての人に向かって、「翻って生きよ」と言われるのです。私たちが霊肉ともに新しく生き直すことを熱望してくださるのです。

準備のための聖書日課			
16日	㊊	エレミヤ31:27～34	人の悪を赦される神
17日	㊋	哀歌5:6～22	主よ、わたしたちは立ち帰ります
18日	㊌	申命記30:1～14	主のもとに立ち帰れ
19日	㊍	イザヤ55:6～7	主を尋ね求めよ
20日	㊎	エゼキエル18:1～9	すべての命は主のもの
21日	㊏	エゼキエル18:10～20	正しい人は必ず生きる

成人科

● イスラエルは共同体を形成することで民族を維持してきました。共同体が個人に優先していましたが、エゼキエル書では神さまは、個人が共同体に優先すると言われます。個人の責任を問い個人の「今」を評価しようとされるのです。長きに亘って共同体に馴染みその恩恵に与ってきた人々は、エルサレム陥落、バビロン捕囚という民族の危機的状況の中で個人の罪を問われて戸惑いました。共同体の長所や利点はたくさんあったでしょう。しかしそれが短所や欠点にもなることを、イスラエルは試練を通して学ばなければなりませんでした。彼の時代の共同体と個人、私たちの教会と個人について思いを巡らせてみましょう。

● 自覚的、主体的信仰を持つ信徒が神さまによって呼び集められ、組み合わされて一つのキリストの体を建て上げているのが教会です。分けてもバプテスト教会は個人や個々の教会の在り方を尊重しつつ、その上で教会として一致し、皆で協力、共働していこうとします。そこに生じる緊張感や矛盾を豊かさとして受け入れ、調和の取れた共同体を目指すのです。あなたの思いや希望が教会の目指すところと食い違ったことがありますか。その時どうしましたか。

主に立ち帰って、生きよ

聖書 エゼキエル書18章21〜32節

暗唱聖句 悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。
エゼキエル 18：30

困ったことが起きた時、その原因を作ったのは私だろうかと思うより、誰のせいだと他人のことを思い浮かべる方が多くありませんか。バビロンによってエルサレムの町が破壊され、神殿が汚(けが)され、王や政治家、多くの住民が敵の国へと連れ去られた時、人々は一体どうしてこんなことになったのかと思いを巡らせました。人々の中には、「先祖が酸いぶどうを食べれば子孫の歯が浮く」という昔のことわざを持ち出して、先祖が重ねて来たたくさんの罪に対する罰を子孫である自分たちが今受けているのだ、と考えた人たちがいました。人々にとっては、神の都であるエルサレムや神の民である自分たちに、こんな災難が起こることなどあってはならないことだったのです。関係ないのに自分たちに罰をくだされる神さまのほうが正しくないと、なんと人々は怒りを神さまに向けたのでした。

神さまは、このような考えに対してエゼキエルを通して人々に語られます。罰というものは、罪を犯したその人が自分の罪に対して受けるものだ。誰も他人の犯した罪に対する罰を受けることなどない。都が滅び捕囚が起こったことを先祖のせいにして、神であるわたしが間違っているという、そんなあなたたちに本当に罪はないだろうか、と。罪を犯さない人など一人もいません。でもイスラエルの人々は罪に気づかないふりをしたり、先祖に罪をなすりつけようとしたりしていたのです。この時代、神さまに背(そむ)き、罪を犯したことへの罰は、死でした。神さまは、悔い改めるどころか神さまに不平を言う人々に対して怒り、厳しい言葉で彼らを裁いて死へと追いやられたのでしょうか。

いいえ。神さまはそんなイスラエルに対して「わたしはあなたたちの死を喜ばない。悔い改めて生き直しなさい」と言われたのです。「今までのあなたの罪を忘れよう。今行(おこな)っている正しいことを見つめよう。わたしは誰もが罪を悔い改めて正しい道へと立ち帰り、生きていくことを喜ぶ」と言ってくださったのです。すべての人が悔い改めて救われ、生きることを望まれる神さまが今、私たちにも目を注いでいてくださいます。私たちも、罪を犯さないで生きることはできません。良いことを行なう力が出ないことも、正しいことを言う勇気が湧いて来ない時もあります。でも神さまは、私たちのそんな弱さや悲しさでなく、もう一度神さまを見上げて次こそはと、思い直すその気持ちを待っていてくださいます。

主に立ち帰って、生きよ

聖書 エゼキエル書18章21～32節

暗唱聖句 悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。
エゼキエル 18：30

聖書から…

偶像礼拝を行い、不正を行っていた彼らの罪をエゼキエルは糾弾（きゅうだん）します。しかし、彼らは「自分が悪いのではなく、親や先祖が悪いのだ」と考えているようです。責任をなすりつける彼らに対して、神さまは、親や先祖の罪ではなく、一人ひとり、個人の責任なのだと言われます。親の責任を子が負うこともなく、個々人がその正義や悪事において責任を負うのです。これは、当時としては画期的な言葉でした。一人ひとりの悔い改めがいかに大切であるか、新たな気づきを与えてくれます。

そして、一番大切なのは、昔は悪人だったとしても、生き方を改めて、暴力に頼らず、不正を行わないような生き方をする人を、神さまは喜ばれるというのです。神さまは「だれの死も喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と、生きるほうへと招いてくださっています。「悔い改め」が条件や資格ではなく、神さまに取り換えの効かない「わたし」として自分が覚えられ、愛され、大切にされていることを覚えるとき、人は「悔い改め方（方向転換）」へと導かれるのではないでしょうか。

教会は悔い改める人々の集まりです。一人ひとりの悔い改めが大切です。「一人の悔い改める人」が集まって、共同体が形作られていくのです。

分かち合おう

- 私が中高生だった頃は、学校で「連帯責任」という言葉があって、グループの失敗はそのグループみんなで責任を負わされました。そうなると、とにかく他の人の迷惑にならないようにばかり意識が集中していたように思います。過ぎてみれば、「一体何を学んだのだろう？ 人に迷惑をかけない精神？」と思ってしまいます。
神さまは、かけがえのない一人ひとりとして、「わたし」という存在を覚えていてくださっています。取り替えの効かない・唯一無二の存在として、「わたし」と「神さま」という関係の中で生き方を問われるのはとても新鮮な気がしました。

- ここでは人それぞれの生き方が問われているので、あたかも個人さえよければそれでよしと完結してしまっている印象をもたれるかもしれません。けれども、「個人」の悔い改めの先には、悔い改める「個人」による「共同体」があります。もしかしたら、共同体の中で自分を見失う時があるかもしれません。その時には「個人」と神さまの関係に戻り、そして再び「共同体」へと押し出されていく。そんな行きつ戻りつの連続が大切なのかもしれません。

幼小科

主に立ち帰って、生きよ

聖書　エゼキエル書18章21〜32節

暗唱聖句　悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。
エゼキエル 18：30

21課

8月22日

聖書から…

イスラエルが滅びるのは時間の問題となっていました。民の中には、そうなってしまった原因探しを始める人々も現れました。そして「自分たちでは無く先祖が悪い！」とか「そもそも助けてくれない神さまが悪い！」と言いだす人たちも現れたのです。その時、神さまはエゼキエルを通して語られました。「親の罪を子が負う事は無い。皆、それぞれ自分の罪によって裁かれるのだ」と。原因は他の誰でも無く「あなた自身の罪」である、と語られる神さまの思いは「だから裁かれても仕方が無い」というのではありません。「だからあなた自身がその罪を悔い改めて立ち帰りなさい」という罪の示し、命の道への招きの言葉が語られたのです。

活動①

「お絵描き伝言ゲーム」

●準備●お題の絵（三角形など簡単な図形から有名なキャラクターなど難易度別に数種類）、白紙を人数×ゲーム回数分、鉛筆、消しゴム

①「お題」を置くテーブルから全員離れて順番を決めます。

②「お題」の難易度に合わせて描き写す制限時間を決めます。

③最初の人は「お題」を見て描き写します。制限時間になったら、リーダーは「お題」を回収し「描き写した絵」を見本に残します。

④次の人は、前の人が描き写した絵を見本に描き写します。

⑤最後の人は自分が描き写した絵を見て、元々の「お題」が何であったのかを言い当てます。外れたら前の人が「自分が描き写した絵」をリーダーからもらい、元々のお題を言い当てます。

※前の人の絵を描き写すだけではなく「お題の絵」は何だったのかを考えながら描いていくという「責任」を全員が持つゲームです。

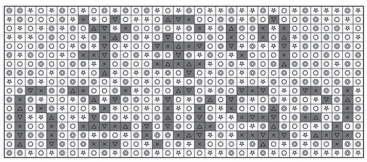
活動②　ワークシート

「神さまの願い」

バビロンに連れて行かれたイスラエルの人々の中には、国が滅び、自分たちが苦しい思いをしている「原因探し・犯人探し」が広がっていました。でも神さまの願いは、人々が「誰が原因か？ 何が原因か？」という罪のなすり合いをすることや、言い訳をすることではありませんでしたね。神さまの願いは何でしょうか？

ワークシートの表内「×」「△」「▽」を塗りつぶし、浮かんだ文字を吹き出しに書き込みましょう！

21 課ワークシートの答え



神さまの願い

罪の中で苦しむ人々に、神さまは何を願っているでしょうか？
表の「×」「▽」「△」マスを塗りつぶして、
神さまが願っている招きの言葉を浮かび上がらせてみましょう。

◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	☆	◎	○	◎	○	☆	○	☆	◎
◎	▷	◁	×	◁	▷	×	◎	○	◎	○	☆	○	☆	☆	◎	◎
☆	○	◎	○	☆	○	◎	◁	◎	◎	○	◎	○	☆	○	○	☆
○	○	◎	○	☆	×	☆	×	☆	○	◎	○	◎	○	☆	○	○
☆	◁	×	×	▷	◎	○	◎	○	☆	○	○	○	◎	◎	○	☆
◎	◎	○	◎	○	☆	○	◎	○	◎	○	☆	○	○	☆	◎	◎
○	○	◎	○	☆	○	☆	▷	◎	○	◎	○	☆	○	◎	☆	○
☆	◎	◎	×	☆	○	◎	×	◎	☆	◎	×	◎	☆	○	×	☆
○	×	☆	▷	◁	☆	▷	○	◎	○	☆	×	☆	◎	▷	☆	○
◎	×	◎	◁	◎	×	☆	○	○	▷	×	◁	◁	×	◁	○	◎
☆	◁	○	×	◎	☆	◁	◎	☆	☆	○	◎	○	▷	☆	◁	☆
◎	○	☆	▷	☆	○	◎	×	◎	○	◎	○	☆	○	×	○	◎
○	○	◎	○	◎	○	◎	☆	○	☆	○	◎	○	◎	○	☆	○
◎	☆	×	◁	○	☆	○	◎	☆	◎	○	☆	○	☆	○	☆	◎
☆	×	◎	○	◎	○	☆	○	○	☆	×	◎	◁	○	◎	○	☆
○	○	◎	◁	▷	×	◁	○	◎	◎	▷	○	×	◁	○	▷	○
☆	◎	×	◎	○	☆	○	▷	☆	○	×	◁	▷	○	☆	◁	☆
○	☆	▷	○	◎	○	☆	◁	○	◁	▷	◎	×	○	◎	×	◎
○	×	◁	▷	◁	×	◎	○	◎	○	×	☆	◁	○	×	○	○
☆	○	☆	×	◎	○	▷	☆	○	☆	☆	◎	○	◎	☆	○	☆
☆	○	◎	○	☆	☆	○	◎	○	◎	○	○	◎	○	◎	◎	☆
◎	○	☆	○	☆	×	◎	○	◎	○	◎	☆	◁	×	▷	◎	◎
○	☆	×	×	○	×	○	◎	◁	☆	☆	☆	×	☆	○	◎	☆
☆	◎	×	☆	◁	○	☆	×	○	◎	◎	◎	○	◎	○	◎	◎
◎	▷	◁	◎	×	◎	○	◁	☆	○	○	○	☆	×	×	○	◎
☆	○	×	▷	◁	▷	◎	○	◎	○	◎	○	☆	○	☆	◁	☆
○	☆	◁	◎	○	◎	☆	☆	○	◎	▷	×	◁	▷	×	○	○
☆	◎	◎	○	◎	☆	◎	○	◎	○	◎	○	☆	☆	○	○	☆
◎	☆	☆	○	×	◎	○	◁	◎	○	◎	○	◎	◎	○	◎	◎
☆	◎	▷	☆	▷	○	☆	×	◎	○	◎	○	◎	○	◎	◎	☆
☆	○	×	◎	○	☆	◁	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	☆	☆
☆	×	◁	×	◎	○	◎	○	◎	○	☆	○	◎	○	◎	○	☆
◎	◎	×	○	×	×	▷	×	◎	○	◎	○	◎	○	☆	☆	◎
○	○	◎	○	◎	○	◎	☆	○	☆	○	◎	○	◎	○	☆	○
☆	◁	○	×	◎	☆	◁	◎	☆	☆	○	◎	◎	○	◁	☆	☆
◎	×	◎	◁	◎	×	☆	○	○	▷	×	◁	◁	×	◁	○	◎
○	×	☆	▷	◁	☆	▷	○	◎	○	☆	×	☆	◎	▷	☆	○
☆	◎	◎	×	☆	○	◎	×	◎	☆	◎	×	◎	☆	○	×	☆
○	○	◎	○	☆	○	◎	○	◎	○	◎	○	☆	○	◎	○	○
◎	○	☆	▷	☆	○	◎	×	◎	○	◎	○	☆	○	×	○	◎
☆	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	☆	○	◎	○	◎	○	☆	○
◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	☆	◎	○	◎	○	☆	○	☆	◎

聖書の学び

立ち帰れ、立ち帰れ

聖書 **エゼキエル書33章10〜20節**

暗唱聖句 **わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。エゼキエル 33：11**

22課

8月29日

わたしが罪人なのだ

エゼキエルが霊によってエルサレムへと持ち運ばれ、神殿の堕落の有り様を見た日からおよそ6年が経っていました。「エルサレムから逃れた者がわたしのもとに来て言った。『都は陥落した』と」（33：21）。この33章から、エゼキエルは一転、イスラエルの人々に復興と希望のメッセージを語り始めます。「我々の背きと過ちは我々の上にあり、我々はやせ衰える。どうして生きることができようか」（33：10）。民族の危機的状況の下、苦痛と恥辱に悩みつつも決して自分たちの罪を認めようとはしなかった人々が、「我々の」背きと過ちが大きすぎて自分たちには耐え得ない、と言っているのです。捕囚の民もエルサレム残留の民も共にあらゆる意味で限界に近づきつつあった、エゼキエルから聞かされ続けてきた主の裁きの預言が彼らの中で力を発揮し始めた、都陥落の情報が彼らの最後の心の支えを粉みじんに砕いた…。誘因は何であれ人々は、民族の反逆の歴史のただ中に自分の姿を見出してしまったのでした。私が罪人なのだ。その気づきは捕囚の苦しみよりもつらく痛いものであったかも知れません。けれども転換とは、その苦しみの極みで自分に絶望し、自分を手放した時に始まる希望への動きなのだと思います。人々の頑なな心がほどけ始めます。

聞く人々の心によって

11節の「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ」という言葉は18章31節と全く同じです。また12〜20節には、18章21〜32節で語られたと同じ意味の言葉がいくつも見られます。言葉もそれを聞く人も同じ、でも聞く人の心が変化していると、メッセージが全く違って響いてくることは信仰者が度々経験するところです。18章の主の言葉はその時の人々にはどこか他人事のように聞こえていたでしょう。「悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる。死ぬことはない」（18：21）。自分が悪人の立場に立って聞くのでなければ、この主の憐みの破格の大きさに気づくことはありません。「正しい人でも、その正しさから離れて不正を行い、悪人がするようなすべての忌まわしい事を行うなら、彼は生きることができようか」（18：24）。自分は正しいとの自己認識を持つ限り、この言葉も自分とは無関係なのです。そして人々はおそらくこの時本気で主に対して怒りを含みつつ「主の道は正しくない」と言い放ったのでしょう。

わたしにとって、命の言葉

今、イスラエルは、自分こそが罪人であり、そのことが共同体に悲劇と試練をもたらしたのだと、18章とは反対の告白をしています。その心に、エゼキエルを通して語られた主の言葉はどう響いたでしょうか。何を思ったでしょうか。「悪人に向かって、わたしが、『お

前は必ず死ぬ』と言ったとしても、もし彼がその過ちから立ち帰って正義と恵みの業を行うなら」、「彼は必ず生きる。死ぬことはない」、「犯したすべての過ちは思い起こされず、正義と恵みの業を行った者は必ず生きる」（33：14～16）。かつて自分とは無関係の言葉として耳を通り抜けていった言葉、それが今は、自分を生かす命の言葉となって全身全霊に沁み通っていく。喜びとともに強い慙愧（ざんき）の念をも禁じえなかったのでは、と想像します。主は、人の思いを遥かに超えて憐みと慈しみに満ちた方。「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から」（33：11）。取るに足りない罪人の私。その命を掌（たなごころ）に救い上げては心から「どうしてお前は死んでよいだろうか」（33：11）と私が生きることを願ってくださる、主はそのような方なのです。

準備のための聖書日課			
23日	月	エゼキエル16:1～8	生きよ、生きよ
24日	火	哀歌3:22～33	尽きることのない主の憐れみ
25日	水	イザヤ53:1～5	わたしたちの背きのために
26日	木	エゼキエル24:15～27	声をあげずに悲しめ
27日	金	エゼキエル33:1～9	イスラエルの見張りとして
28日	土	エゼキエル33:21～22	エルサレムの陥落

成人科

● 神さまは同じ意味の言葉を一貫してイスラエルの人々に向かって語り続けて来られました。ある時点で彼らは罪に気づき悔い改めへと向きを変えたのです。敗北の現実を認め打ちのめされた時、霊の耳が開かれたのでした。頑なに預言者の言葉を拒否する心と悔い改めて砕かれた心とでは、一字一句同じ言葉を聞いても、心が揺さぶられる強さ、痛さが違うのでしょう。聖書の言葉は生きています。聞き馴染んできた聖書の言葉が、ある時全く違って聞こえたという経験はありますか。

● 自分の罪に気づいたイスラエルの人々は、罪意識のゆえに「生きていられない程だ」と告白しています。悔い改めは強い痛みを伴い、傷を残します。かつて、神の子を十字架につけたのはこの私との罪認識に導かれた時、慚愧の念に打ちひしがれました。罪はイエスさまが赦してくださいましたが、痛みの記憶は残っています。それは宝のようで、たびたび高ぶる私をイエスさまの十字架へと引き戻してくれます。信仰は喜びや感動よりも蹉跌（さてつ）の痛みの記憶によって深まるように思います。忘れ去りたい記憶、しかしそれが信仰の糧や宝になっている証しを分かち合ってください。

みんなで聴く聖書のおはなし

立ち帰れ、立ち帰れ

聖書 エゼキエル書33章10〜20節

暗唱聖句 わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。エゼキエル 33：11

22課

8月29日

自分が罪人であると感じることはつらいことであり、それを口にすることは勇気の要ることです。今まで神の民であることに誇りを持ってきた人々は、エルサレムの町が破壊されたことや、多くの人々が捕囚となって連れ去られたことと自分たちとは関係ないと信じ、そう言い張ってきました。でも状況は変わらないどころかますます悪くなるばかり。人々の心も体も信仰も、疲れ果て弱り果てていくばかりでした。そして、エルサレムの都が滅んだというニュースを聞いた時、もしかしたら自分たちにも罪があるのではないか、そのためにみんながこんな苦難に遭(あ)っているのではないか、と思うようになっていったのです。少しずつ自分のあやまちを認め始め、罪を悔い改めて神さまにまっすぐに目を上げ始めた人々に、エゼキエルは神さまからの言葉を語ります。それは、「わたしは悪人が立ち帰って生きることを喜ぶ。今までに罪を犯してきたとしても、悔い改めて正しい行いとよい業を行なうのなら、今までの罪を問題にしない」という、憐(あわれ)みと慈しみに満ちた言葉でした。今まで、エゼキエルは厳しい裁きの言葉ばかり語っている、あるいは自分とは関係のないことを語っている、と苦々(にがにが)しく思っていた人々はとても驚いたでしょう。

しかし実は神さまはずっと以前から同じことを、エゼキエルを通して語り続けておられたのです。神さまは昔も今も、そしてこれからも、誰もが悔い改めて悪から離れることを強く願われる方なのです。「立ち帰れ、立ち帰れ。悔い改めて生きよ」と呼びかけ、「人々よ、どうしてあなたたちは死んでよいだろうか。死んではいけない」と、熱心に人々を悔い改めへと導かれる方なのです。でもイスラエルの人々はあまりに頑固(がんこ)で、すなおにその言葉を受け入れる気持ちになれなかったのです。

今まで自分たちを支えて来たのが、「都は決して滅びない」という誤った考えと頑固さであったことに、イスラエルの人々は気づき始めました。そしてその罪を告白し始めたのです。今まで他の誰かに語られていると、聞き流してきた神さまの言葉の一つひとつが心にぐんぐんと入ってくるようになりました。何度も聞いていた言葉が、まったく新しいメッセージとなって胸に響き始めたのです。そしてエゼキエルの言葉がすべて真実であったことも分かったのでした。イスラエルはいよいよ向きを変えて、神さまに向かって歩き始めます。

立ち帰れ、立ち帰れ

聖書 エゼキエル書33章10〜20節

暗唱聖句 わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。エゼキエル 33：11

聖書から…

はっきりと自分が間違っていることに気づいても、その間違いを素直に認めて謝ることが難しいと思ったり、できなかったりしたことはありませんか？ 神さまの言葉は先週読んだところと同じで、変わっていません。「立ち帰って、生きよ」。18 章と 33 章で決定的に変わったのは、神さまの言葉ではなく、人々の側の姿勢です。最後の希望であった都が、エゼキエルの預言通りに陥落しました。もうすべては終わってしまったのだと、頼るものなく失意のどん底の中で聞こえてきたのは、「わたしは生きている」との主の言葉でした。この時になって初めて、自分たちの罪の自覚が芽生えたのです。

また、18 章との違いとしては、主はエゼキエルに、この人々を「あなたの同胞」と言います。彼らが同じ共同体の仲間であることが強調されています。すべてを失って、初めて主の言葉が人々の心に届き始めました。

そんな彼らに向かって、「犯したすべての過ちは思い起こされず、正義と恵みの業を行った者は必ず生きる」、と。悪事から立ち帰ることを見てくださるのだと神さまは言われます。人は誰しも変わっていけるのです。神さまは過去の悪事ではなく、今の悔い改めを見ていてくださっているのです。

分かち合おう

- 何度も聞いた神さまの言葉でも、聞く側の姿勢によって全く違って響いてくることがあります。特に、口酸っぱく言われれば言われるほど、どんなに素晴らしい言葉でも色あせてしまうということがあるように思います。
  イスラエルの人々にとって都陥落（みやこかんらく）という出来事が決定的に人の姿勢を変えたように、神の言葉は変わりませんが、私たち自身はいつでも変わることがあるのです。そのような経験があったら分かち合ってみましょう。

- 自分に非があることを認めて、悔い改めていくことは実際にはとても難しいことであると思います。それはとても勇気の要ることです（みんなで聴く聖書のおはなし参照）。自分の非は一人ではなかなか気づけませんし、気づけたとしても認めて悔い改めるのは、本当に難しいことです。非を認めたくない自分を肯定してくれる言葉があったら、なびいてしまいたくなる誘惑があります。そのような中で、主の言葉をしっかりと受け留め、罪を告白し、悔い改めていくには、どんなことが必要でしょうか？

幼小科

立ち帰れ、立ち帰れ

聖書 エゼキエル書33章10〜20節

暗唱聖句 わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。エゼキエル 33：11

22課 8月29日

聖書から…

神さまはエゼキエルを通し「立ち帰れ。悔い改めよ」と繰り返し語りかけます。人々は初め、自分たちの苦しみの原因を「他の誰かの罪のせい」だと考えました。「自分は悪くない！」と思っている間は「ごめんなさい」という気持ちは生まれて来ませんよね？ だから神さまは繰り返し「立ち帰れ。悔い改めよ」と語られたのです。ところが人々は「他の人ではなく自分の罪が原因だった」と気付かされたのに「ああ！もうダメだ。こんな罪深い私は滅びるしかない」と、今度は嘆くばかり。神さまが願われているのは人が嘆き苦しむことでも滅びる事でもありません。罪を悔い改め、神さまに立ち帰って「生きる者」となることなのです。

活動①

「2 択クイズ」

●準備●回答棒㋐、㋑の２本１組を人数分・２択問題を数問（リーダーの趣味や嗜好を答えとする問題と「最後の問題」）・２択問題の答え（1 枚には㋐の答え・もう 1 枚には㋑の答えを書いておく）

①「リーダーの答えは㋐と㋑のどっちでしょうか？」と言ってメンバーに回答棒を 1 組ずつ渡します。

②リーダーは問題を述べ、㋐㋑の答えそれぞれを両手に持ちます。

③「せーの…」でメンバーは回答棒を、リーダーは正解の答えを上に上げます。

④「最後の問題」で聖書のお話を振り返りましょう。

●最後の問題●

今日のお話で、自分たちの罪に気づいた民に神さまは何を願っていたでしょうか？

㋐「もうダメだ…」と嘆き悲しむこと

㋑「ゴメンなさい！」と悔い改めること

活動②　ワークシート

「死からいのちへ」

●準備●取扱い注意 - ハサミ、カッター、爪楊枝、両面テープ（のり）、テープ

①すべてのパーツを切り取ります。

②パーツ 1 の「きりとり線」2 本に切り込みを入れます。

③パーツ 2 に折り目をつけ、うらのり①②部分の裏に両面テープを貼り、パーツ 1 の網掛け部①②に合わせて貼ります。

④「スライドパーツ」の端に爪楊枝を置き、それを軸に巻きスライド棒を作ります。最後はセロテープで巻きを固定します。

⑤パーツ 3 に折り目をつけ、スライドパーツ先端に両面テープで固定します。

⑥スライド棒をパーツ 1 の「↓」印に従い、上部切り込み部から差し通していきます。

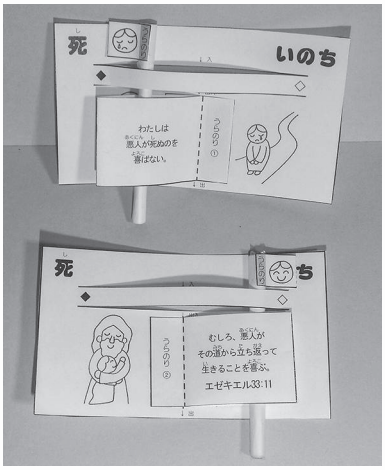
⑦スライド棒を左「◆」まで移動させて完成です。イラストは悲しみ顔に。
暗唱聖句を読みながら棒を右側にスライド。途中でイラストを喜び顔にして「◇」へ。

死からいのちへ

きりとり ———— やまおり - - - - - - - - - たにおり — — — — — —

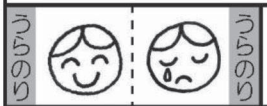
【スライドパーツ】

※このパーツは「つまようじ」を軸に細く丸めて、かたい棒状にします。



できあがり写真をかくにんしたら、軸に丸めこみましょう。

パーツ3



パーツ2

うらのり ②

むしろ、悪人が
その道から立ち返って
生きることを喜ぶ。
エゼキエル33:11

わたしは
悪人が死ぬのを
喜ばない。

うらのり ①

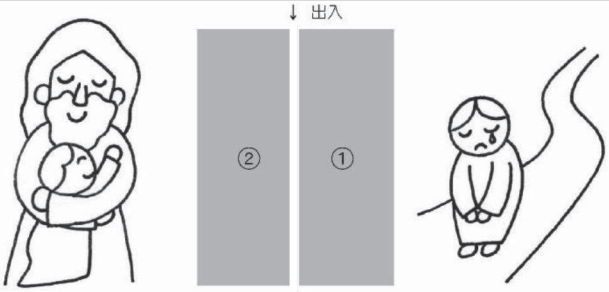
パーツ1

死 いのち

↓ 入

◆ ◇

↓ 出入



↓ 出

聖書の学び

主こそ真の牧者

聖書 エゼキエル書34章1〜16節

暗唱聖句 わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。
エゼキエル 34：15

23課 9月5日

イスラエルの牧者たち

イスラエルでは、王と国民との関係がしばしば「牧者と羊の群れ」に喩えられました。無法な者と悪しき者とを滅ぼし、弱い者の権利が強い者に奪われないようにするために任命された者。これが、よい牧者である王のイメージであるべき、とされていたようです。ここで主から、「イスラエルの牧者たち」と呼ばれているイスラエルの王たちも、本来はこのようにあるべきでした。弱い人々をあらゆる悪と災いから守るその使命のために主から力を授けられた者としての自覚を持つべきでした。しかし彼らは義務を怠ったばかりか、疲弊した人々からなお搾取して自分自身を養う、といった悪を行っていたのです。導きと保護なしには尽き果てるしかない命に対して無関心で無責任だったのです。そんな「イスラエルの牧者たち」を主は厳しく叱責されます。「牧者は群れを養うべきではないか」(34：2)。「しかし、お前たちは力づくで過酷に群れを支配した」(34：4)。それゆえにイスラエルの人々は散らされて行き、丘や山の上でさまよい、野の獣の餌食となり、誰からも顧みられなくなったのだと、主は「イスラエルの牧者たち」を非難されるのです。

わたしは「イスラエルの牧者」に立ち向かう

このような悪しき「イスラエルの牧者たち」に向けられていた主のまなざしが今度は、飼う者のいない迷える羊たち、戦争の日々と過酷な支配によって弱り果てたイスラエルの人々へと向けられます。「わたしは自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」(34：11)。そのために、主はふたつのことを行うと言われます。ひとつは、悪しき牧者たちに群れを飼うことをやめさせる、ということ。もうひとつは、主が自ら牧者となって人々の世話し、イスラエルに連れ帰る、ということでした。「雲と密雲」は、主の臨在を表します。主は、イスラエルにこの苦難をもたらした悪しき王たちを裁くその「雲と密雲の日」に、彼らによって苦しめられ散らされた人々をわたしが救い出す、と言われます。真の牧者となって、イスラエルの山々や居住地で、「わたしがわたしの群れを養い、憩わせる」(34：15)と、イスラエルの回復と捕囚地からの帰還を約束されるのです。

主の公平

「わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。しかし、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは公平をもって彼らを養う」(34：16)。この世において価値があるとされる肥えたもの、強いもの。しかし不当な搾取や貪りによって豊かになったもの(34：3)、暴力や権力によって人々を不当に支配しおごり高ぶるもの(34：4)、そのような富者、強者を主は滅ぼすと宣言されます。そしてイスラエルの、失われ、傷つき、弱った人々を尋ね求めては見いだし、腕に包み込んで癒やし、力を与えて強くする、と言

われるのです。主の公平は常にこの世の価値観の対角にあります。慈しみに満ちた主のまなざしはいつも、この世の価値観とは逆の、低く小さな者に、不当に低くされた者に向けられています。主はご自身の義をもってすべての人を公平に裁かれる方なのです。「主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます」（ルカ 1：51 ～ 53）。これは「マリアの賛歌」の一部分です。主の公平が鮮やかに謳い上げられています。彼の時代、女性は人の数にも入れられない弱く小さくされた存在でした。神のみ子がそのような「主のはしため」（ルカ 1：27）であるその身に宿られたことを知ったマリアは、低き所から天に向かって高らかに主へのほめ歌を歌ったのでした。

準備のための聖書日課			
30日	㊊	詩編23:1～6	主はわたしの羊飼い
31日	㊋	マタイ9:35～38	飼い主のいない羊のように
1日	㊌	ヨハネ10:11～16	良い羊飼いに導かれて
2日	㊍	コリントニ12:1～10	自分の弱さを誇る
3日	㊎	ルカ1:46～55	主の公平さを見よ
4日	㊏	詩編98:4～9	公平に裁かれる主

成人科

●一握りの為政者、権力者、指導者が不正によって一層豊かに栄える一方、弱さをかかえた者たち、小さくされた者たちが強者の餌食にされ、剥ぎ取られ、切り捨てられ命を落としていく。この理不尽な不公平は、いつの世にもあったし、今も形を変えながら依然としてあり続けます。しかし神さまは必ず、全き真実のゆえに不正を裁き、痛み苦しむ者に応分の報いと希望を与えてくださいます。現代のエゼキエルである私たちはそう確信するがゆえに「よい羊飼いの物語」を大胆に語り続けるのです。

●「よい羊飼い」という言葉から詩編 23 編を思い起こします。一国の王ダビデが自らを弱く臆病な羊に喩えてよい羊飼いに牧される身の幸いを高らかに詠っています。心も体も魂も豊かに養われていて心には一点の曇りも憂いも恐れもない。恵みと慈しみがわたしを追いかけてくる、と。ここではダビデは徹底して受け身です。主に依り頼むとは、これ程までの手放しの依拠をいうのでしょう。自分を捨てることは肉の心と体を持つ私たちにとって容易ではありません。パウロの言葉を味わってみましょう（コリントニ 12：9 ～ 10）。

みんなで聴く聖書のおはなし

主こそ真の牧者

聖書 エゼキエル書34章1〜16節

暗唱聖句 わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。
エゼキエル 34：15

23課

9月5日

牧者とは羊を飼う人、羊飼いのことです。羊は弱くて一匹では生きていくことができない動物です。だから群れをなし、ひとりの牧者に世話をされ、大切に守られて育ちます。羊飼いは、羊の群れをよい牧草地へ連れ出して柔らかい草をたくさん食べさせたり、野獣が襲ってくることのない安全な場所で休ませたりします。群れの一匹一匹の様子をいつも心にかけながら世話をするのです。

昔イスラエルでは、よい王とは羊を守るよい牧者のようであるべきだ、王は弱い人々を悪者のたくらみや危険から守るために、神さまから任命される者だ、と言われていました。ところが、神さまから「イスラエルの牧者」たちと呼ばれていた王たちは、神さまから託された勤めを怠り、返って弱い人々から食料や衣類やさまざまな物を奪い取って自分自身を豊かにすることに夢中になっていました。人々は、牧者のいない羊のようになって山や谷をさまよい、ちりぢりになってしまいました。そんな王たちのために国の力は弱くなり、バビロンに攻め込まれ、やがてエルサレムが破壊されて、多くの人々がバビロンへと連れて行かれてしまったのでした。

神さまはそんな「イスラエルの牧者たち」に怒りを発し、その手から人々を取り返す、わたしが自分で自分の群れを探し出し、世話をする、と言われました。イスラエルの人々の真の牧者はわたしだと、宣言なさったのでした。それだけでなく神さまは、イスラエルの悪しき牧者を裁く「雲と密雲の日」に、あちこちに散らされて、誰からも探されず尋ね求められることもなく、弱り切った人々をご自分のもとに集める、と言われます。

神さまは、イスラエルの国がついに滅びようとする最も辛く悲しい時代に生きた人々を、多くの苦しみと痛みを受けた人々を、ひとりぼっちで泣いていた小さな子の涙を、見ておられました。まわりの人々にからかわれながらも、神さまを信じることを止めなかった人々を忘れてはおられませんでした。羊飼いがちりぢりになった羊の一匹一匹を見つけ出しては安全でよい牧草の茂る土地に集めるように、神さまは人々をなつかしいイスラエルの地に帰らせ、そこで何の心配もなく平和に暮らせるようにする、と約束してくださるのです。神さまはすべての人の一人ひとりに100％の愛を注いでいっしょに歩いてくださる方です。人を偏り見ることがなく、すべての人に対して公平な神さまが、今日も共にいてくださいます。

主こそ真の牧者

聖書 エゼキエル書34章1〜16節

暗唱聖句 わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。
エゼキエル 34：15

聖書から…

羊は弱くて一匹では生きていくことができない動物です（「**みんなで聴く聖書のおはなし**」より）。羊飼いとは、迷った時に行くべきところへ連れて行ってくれる存在です。みなさんにもそのような存在はいますか？ 当時のイスラエルにおいては、「王」こそが人々を導いて行く責任が与えられていました。王が牧者としての責任を怠るなら、イスラエルの民はたちまち命の危機に晒されてしまします。イスラエルのリーダーとは、人々のいのちと暮らしを守るためにこそ存在しているはずでした。それなのに、人々に過酷な状況を強いて搾取し、命を軽んじ、見捨てている現実がありました。人々には過酷な環境を与えながら、リーダーたちは自分だけ美味しいものを食べたり、衣服をつくったりします。傷ついていても、見て見ぬ振りをして、癒すこともしません。道に迷っても、「自己責任」だとばかりに探しに行くこともしません。あたかも人々を自分に利益をもたらしてくれる道具のように、無駄ならば切り捨てるような扱いをしていました。そのようなリーダーが支配する荒んだ社会に、「わたしがわたしの群れを養い、憩わせる」との主の言葉が響いてきます。

主なる神さまご自身が探し出し、世話をして導き、養い、憩わせ、傷ついたものを包み、弱っているときには強くしてくださると言われます。さらに牧者に立ち向かうとまで言われます。「そっちじゃないよ」と、羊たちを連れ出して、この真の牧者の元で、道具のようにされていた人々は癒され、再び生き生きとさせられていくのです。

分かち合おう

- お金に物を言わせて悪知恵を働かす「社会のリーダーたち」のニュースが聴こえてきます。今日の聖書の箇所を読んでみて、主なる神さまが私たちの社会に望んでおられるリーダーとはどのようなものと感じましたか？
社会のリーダーとして立てられる人たちに大切な資質とは何でしょうか？

- 聖書の学びのページには、「主の公平」という言葉が出てきます。「公平」と似たような言葉で「平等」がありますが、これらはどう違うのでしょうか？ みなさんで考えてみましょう。
例えば、ある人はこんな風に言いました。「平等とは、一人ひとりに同じ分量が与えられるイメージ。公平とはいっぱい持っている人には少なく、持っていない人には多く与えられるイメージ」。「不公平だ」と嘆くこともありますが、弱い者をこそ力づけてくださる主の公平がなりますよう祈るものでありたいと思います。

幼小科

主こそ真（まこと）の牧者

聖書　エゼキエル書34章1〜16節

暗唱聖句　わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。
エゼキエル 34：15

聖書から…

神さまはイスラエルの王さまや祭司らに「人々を正しく導く牧者（羊飼い）」としての仕事を与えられていました。しかし王さまや祭司たちは人々を正しく導くどころか、むしろ人々を苦しめ、人々から奪い、神さまの約束の道へと導かずに悪の道へと導いてしまっていました。神さまに背いて歩む罪のためにイスラエルは滅んでしまいます。その時、神さまはエゼキエルに言われます。「もう悪い牧者たちに人々を導く仕事はさせない。悪い牧者たちを滅ぼす。わたし（神さま）が正しい牧者としてイスラエルの民を導き、公平をもって養い導く」と。

23課

9月5日

活動①

「上手に導いて」

●準備●鈴（代用品でも可）、目隠し布、座布団やスリッパ

①２人１組になり「牧者（先導）」と「羊」を決めます。

②スタートとゴールを決め、コース上に座布団やスリッパなどの障害物を適当に散りばめます。

③牧者は鈴を鳴らしながら羊の前を進みます。羊が足元の障害物を踏んだり触れたりしたら失敗です。羊が安心してついて行けるように、牧者は良く注意を払いながら導きましょう。

※「失敗は３回まで」「失敗したらスタートからやり直し」など、自由にルールを決めてください。

活動②　ワークシート

「悪い牧者のゆがんだ杖」

●準備●カッターとマット、はさみ

①ワーク下部から「悪い牧者のゆがんだ杖」と「羊」を切り取ります。

②「羊」をやまおりで立つようにします。

③「悪い牧者のゆがんだ杖」は①でやまおりにした後、指示線に従い折り目をつけ、「もち手」と先端をつまみ伸ばします。

④マップに、線に従い切り込みを入れ、折り目をつけます。

●遊び方●

①スタート位置に「羊」を置きます。

②「悪い牧者のゆがんだ杖」を使い「羊」を「みどりのまきば（ゴール）」まで導きます。尚、杖の「もち手」部分以外は触ってはいけません。

③「羊」が倒れたり、マップ外に出たり、「悲しみの泉」「獣のむれ」ゾーンに入ったらゲームオーバーです。

※基本的に「うまく導けない」構造となっていますが、まれに成功します。

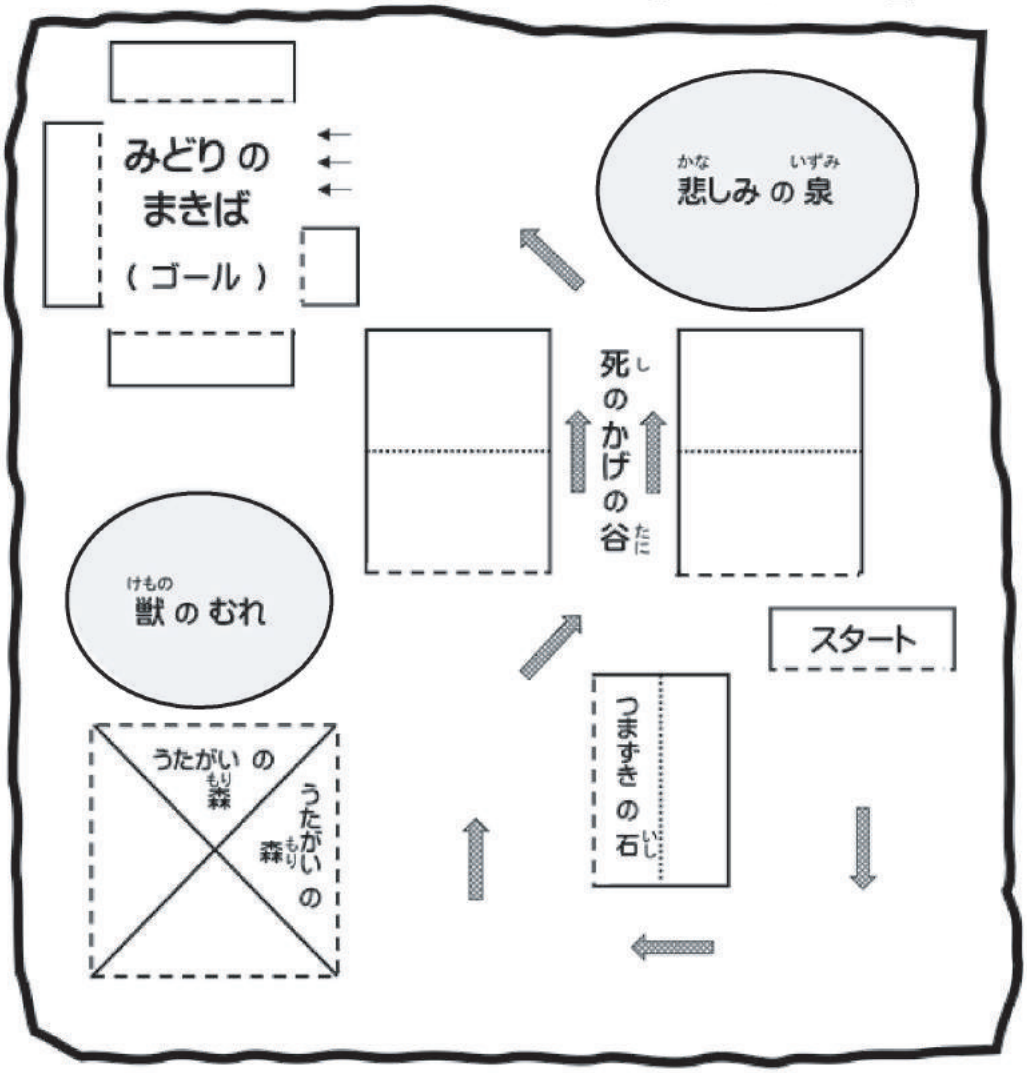
①**失敗時：**ゆがんだ心の牧者の杖で導くことはできません。羊を指でつかんでゴールまで連れて行ってあげましょう。

②**成功時：**慎重に気を付けて上手に導けましたね。神さまは民の指導者にも同じように『民を大切に思う気持ち』で導くようにと教えていました。でも、その教えを守らずに、民を滅びへと導いてしまったのですね。

ワークシート

悪い牧者のゆがんだ杖

【 マップ 】



きりとり …

やまおり …

たにおり …

悪い牧者の ゆがんだ杖

羊

聖書の学び

主が建て直す日

聖書　エゼキエル書36章25〜38節

暗唱聖句　主であるわたしが、これを語り、これを行う。
エゼキエル 36：36

24課　9月12日

内側と外側の回復

「彼らが戻って来るのは間近である。わたしはお前たちのために、お前たちのもとへと向かう。お前たちは耕され、種を蒔かれる」(36：8〜9)。イスラエルの回復を主自らが行われることが告げられます。主の激しい怒りと裁きの声を聞き続けてきた読者はここに至って「やっと！」と、肩の力を抜くのです。しかし果たしてイスラエルには、このような回復に大手を振ってあずかる資格があるのでしょうか。「聖なるわが名を汚した」との言葉が度々出てきます。主が嫌悪されることを行うことは、聖なるお名前を汚すことに他なりません。彼らは父祖の代からそのようなことを犯し続けて来たのでした。回復のためにはイスラエルはまず内側が清められ、造り変えられなければならないのです。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」(36：26)。主の、イスラエルの再創造の宣言です。石の心は、頑固な自己執着と主への反抗心の表れでしょう。主は、彼らの中からこれを取り除き、替わりに従順で人間らしい温かな心を置くと言われるのです。彼らは生まれ変わって主の霊を宿す人となるのです。この内側の回復ののちに、主は外側の回復の約束を与えられます。「わたしは穀物に呼びかけ、それを増やし、お前たちに飢えを送ることはしない。わたしが木の実と畑の作物を豊かにするので、二度と飢饉のために、国々の間で恥をこうむることはない」(36：29、30)。内的、霊的に清められ新しくされたイスラエルは次に、いのちを保ち育てる作物など、物質も十分に備えられるとの約束を与えられます。ただし、と主は言われるのです。「わたしがこれを行うのは、お前たちのためではないことを知れ。イスラエルの家よ、恥じるがよい。自分の歩みを恥ずかしく思え」(36：32)と。来し方を振り返るなら、自己嫌悪に陥らざるを得ないような歩みを、イスラエルは連綿と続けてきたのでした。そのような背信の輩を、主はただただ先祖との契約の遂行のために、叱責し、懲らしめ、み許に立ち帰らせ、清め、そして回復のためにすべてを整えられるのです。その主の真実に直面してやっと、彼らは自らの不義、不真実に気づき、恥を知り、罪に泣き、そして心からの悔い改めと主への謙遜へと導かれていくのでしょう。主の慈しみと恵みへの応答が、「打ち砕かれた霊、打ち砕かれ悔いる心」(詩 51：19)であることを教えられます。

主が建て直す

「わたしがお前たちをすべての罪から清める日」(36：33)。それは主の約束がことごとく実現する日のことです。イスラエルの回復と繁栄が鮮やかに描かれていきます。荒れ地がエデンの園のようになる、廃墟が人々の住む町々になる、荒れ地が緑濃き森に変る。主が修復し、主が建て、主が植えられるのです。これらはすべて主のみ業。エデンの園を創造された主が、壊滅した都をそのみ手で再創造なさるのです。そしてその恵みは周辺諸国に

まで及ぶと言われます。回復されたエルサレムの様子がクローズアップされています。町はまるで祭りの時のように、大勢の人々とささげ物の羊の群れとでごった返しています。追いやられ、殺害され、連れ去られ、人気がなくなってしまった都。主はそこに以前にも増して人々を満ちあふれさせてくださるのです。悩み、疲れ、弱り果てていた人々が、主の手によって生気にあふれいのち輝く人々へと変えられて、笑いさざめきながら行き交う様子は、「新しい天と新しい地」（黙示録21：1）の予表でしょうか。人の心の破れもイスラエル一国の滅亡も、主はその聖なるみ名のゆえに建て直す、と言われます。その時イスラエルは、そして私たちも、主なる神を知るのです。

準備のための聖書日課			
6日	㊊	エゼキエル 34:23～31	共におられる 主なる神
7日	㊋	エレミヤ24:1～7	主を知る心を 与えられて
8日	㊌	詩編51:15～19	打ち砕かれた霊と心
9日	㊍	ヨハネ黙示録 21:1～4	新しい天と地の顕現
10日	㊎	コヘレト3:10～11	永遠を思う心を 与えられて
11日	㊏	エゼキエル 36:1～12	主なる神の言葉を 聞け

成人科

●人の中の「石の心」とは、また神さまが与えてくださる「肉の心」とは、何を指しているのでしょうか。コヘレトの言葉に「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」という一節があります。神さまは人に、永遠なる方を追い求める「肉の心」を与えられた、とコヘレトは言うのではないでしょうか。しかし自由意志をも与えられた人は、心を石のように頑なにし、創造の秩序に反して自己中心的に生きるものとなっていったと思われます。

●すべての被造物の良き管理者であるべき人が、ほしいままにあらゆるものを貪った結果大自然の破壊や地球温暖化が進み、そればかりかストレスフルで生き辛い社会の中で人自身が崩壊し始めています。行く手には滅びしかないのでしょうか。彼の日、聖なるみ名のためにイスラエルを再創造し、破壊された都を建て直し緑豊かな大地を再現しようとされた神さまは今日なお、そのみ業を進めておられる。暗闇の世に生きながらも私たちキリスト者にはこの確かな希望が与えられています。そんな私たちにできることは何か、具体的に話し合ってみてください。

みんなで聴く聖書のおはなし

主が建て直す日

聖書 エゼキエル書36章25〜38節

暗唱聖句 主であるわたしが、これを語り、これを行う。
エゼキエル 36：36

24課

9月12日

神さまは、イスラエルの復興と人々の回復を「わたしが」行うと宣言されます。神さまはまずイスラエルの人々の内側、人々の心を新しくすると言われます。

それまでイスラエルの人々は神さまの言葉を聞かず、反抗ばかりしてきました。そんな石のように固く頑固（がんこ）な人々の心を、み言葉に聞き従う温かくてやさしい心に置き換えると、神さまは言われます。神さまの霊が一人ひとりの中に入ることで、石の心が肉の心になるのです。イスラエルの復興は何よりまず、人々が神さまに逆らうことを止め、従う人になるところから始まっていきます。人が新しく造り変えられて柔らかな心でいろいろな人やさまざまなことを受け入れるようになることで、神さまのみわざが進んでいくのです。

新しい霊と新しい心をいただいた人々は、今まで自分たちが、また先祖の人々が行ってきた神さまに反抗する思いや悪い行いについて、悔い改めなければなりません。罪を告白する痛みを経験することによって、神さまをますます深く知るようになるためです。

新しくされた人々のために、神さまはさまざまな祝福を用意してくださいます。「わたしは破壊された町、誰も住むことができなくなった家々を建て直す」と言われます。「わたしは荒れ果ててもう何も生えてこないだろうと思われる土地を、やがて人々が耕して作物が収穫できるようにする」と言われます。それを見た人が、「まるでエデンの園のようだと驚くほどに」と。昔、人のためにエデンの園を造られた神さまが、弱り果てたイスラエルの人々のために荒れ果てた土地も町も、わたしが建て直すと約束してくださるのです。

エゼキエルが生きた時代、神さまの最大の祝福は人口が増えることだと考えられていました。けれども長引く戦争と捕囚のために、イスラエルの人口はとても減ってしまっていたのです。神さまは人々に、イスラエルの祭りの情景を思い起こさせます。昔祭りの日には人々はささげものの羊をたくさん連れて、遠い国からもエルサレムに帰ってきました。町が人々と羊の群れであふれかえり、身動きもできなくなるほどになったのでした。神さまは、あの祭りの日のようにわたしはこのエルサレムを人々で満たす、祝福と喜びに溢（あふ）れさせると約束してくださるのです。復興した町で人々はきっと神さまを見上げ、心からの礼拝をささげるようになるでしょう。

主が建て直す日

聖書 エゼキエル書36章25〜38節

暗唱聖句 主であるわたしが、これを語り、これを行う。
エゼキエル 36：36

聖書から…

人々の目の前には廃墟となった町が広がっています。さてどのように復興しようかというとき、神さまが最初に取りかかったのは、人々の心を柔らかくすることでした。私たちは、つい、目の前の建物の復興に気持ちが急いてしまいますが、建物は一番ではありませんでした。神さまは、人の目に見えない部分を大切にしてくださるのです。

確かに目の前には、廃墟となった町々が広がり、足元には荒れた地に石ころが転がっていたかもしれません。しかし、人々の心は、もはや石ころではありません。柔らかな肉の心が、じんわりと広がっていました。いつの間にか神さまが、柔らかくてあたたかい肉の心を、時間をかけて取り戻してくださったのです。エゼキエル書を振り返ってみると、主なる神さまに背を向け、偶像礼拝に走り、石のような頑なな心を持つイスラエルの民に、忍耐強く寄り添ってくださる神さまの姿をみることができます。イスラエルの民を愛し続ける神さまは、諦めることなく関係を保ち、声をかけ続けてくださいました。柔らかな心になったときに初めて、自分たちの罪をしっかりと恥じることができました。

主なる神さまはそのように肉の心を取り戻した人々の神となられ、豊かな作物を実らせ、廃墟を人の住む町として再び建て直す希望を語ってくださいました。神さまの再建計画は、柔らかな心で互いを大切にして生きるような町でした。人々は荒れた地を前に、「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く」（36：26）との主の言葉を、希望として聞いたことでしょう。

分かち合おう

- 誰しも「石のような心」の時もあれば、「柔らかい心」の時もあると思います。どのように、「石のような心」が「柔らかい心」にされていくことができるのでしょうか？ 私は、石のような心の時には、誰もそんな自分を愛してはくれないと拗ねていました。そのような私をも愛してくださる方がおられると知った時、時間と共に自然とほぐれていったように思います。

- 主が立て直される町は「エデンの園のよう」（36：35）だとあります。神さまに創造された人が、まことに人として生きることができる世界が「エデンの園」にイメージされています。
ではエデンの園とはどのような世界なのでしょうか？ アダムとエバがエデンの園を追われたのは、なぜなのでしょうか？「エデンの園」に生きることがどうして幸せになることなのでしょうか？ クラスで分かち合ってみましょう。

幼小科

主が建て直す日

聖書 エゼキエル書36章25〜38節

暗唱聖句 主であるわたしが、これを語り、これを行う。
エゼキエル 36：36

聖書から…

肉を醤油やタレに漬けておくと、数十分から数時間で中心まで味が染み込みます。一方、石は何十年間も水の中に沈めていたとしても、中心まで水が浸み込むことはありません。イスラエルの人々はそんな「石のような心」だと神さまは言いました。神さまの約束も、祝福も、愛も染み込まない硬い石のような心…。神さまは、まず初めに人々の心を造り変えると約束されました。新しい心と霊を受けた人々に、今度は荒れ地と廃墟（はいきょ）を建て直すと神さまは宣言されました。どんなに大きな祝福を与えられていても、石のような心ではその祝福を喜べないからです。神さまが建て直された世界を心から喜ぶためには、先ず、新しい「肉のような心」に建て直されることが大切なのです。

24課

9月12日

活動①

「準備を整えて」

18課と同じ「玉入れレクレーション」ですが、導入と展開を少し変えます。

●準備●フタのできる籠や箱などの入れ物、お手玉やピンポン玉、カラーボールなど約20個

①「18課でもやった玉入れをやります」と紹介し、入れ物にフタをしたままで準備を進めます。

②「さあ！始めましょう！」と進めると「無理ー！」の反応が出ます（出なければリーダーから話を振ってください）。

③「なぜ無理か？ フタをしてると中に玉が入らない」などやり取りをします。

④今日のお話を再確認し、神さまの祝福を喜んで受け入れるための「肉のような心の備え」について考えましょう。その後、「では受け入れ準備ができました」とフタを外して玉入れを開始します。玉入れの方法は、18課活動ページを参照してください。

活動②　ワークシート

「石の心と肉の心」

●準備●はさみ、カッター（取扱い注意）、マット、両面テープ（のり）

①ワークシートからパーツ1とパーツ2を切り取ります。

②パーツ2に折り目をつけ、うらのり③の面を裏で貼り合わせます。

③パーツ1の切り抜き部分を切り抜き、すべての折り目をつけます。

④うらのり②の面を裏で貼り合わせます。

⑤パーツ1の切り抜き穴からパーツ2を☆印に合わせて差し通します。

⑥パーツ1の「のり①」部分を「うらのり①」部分に貼り合わせます。

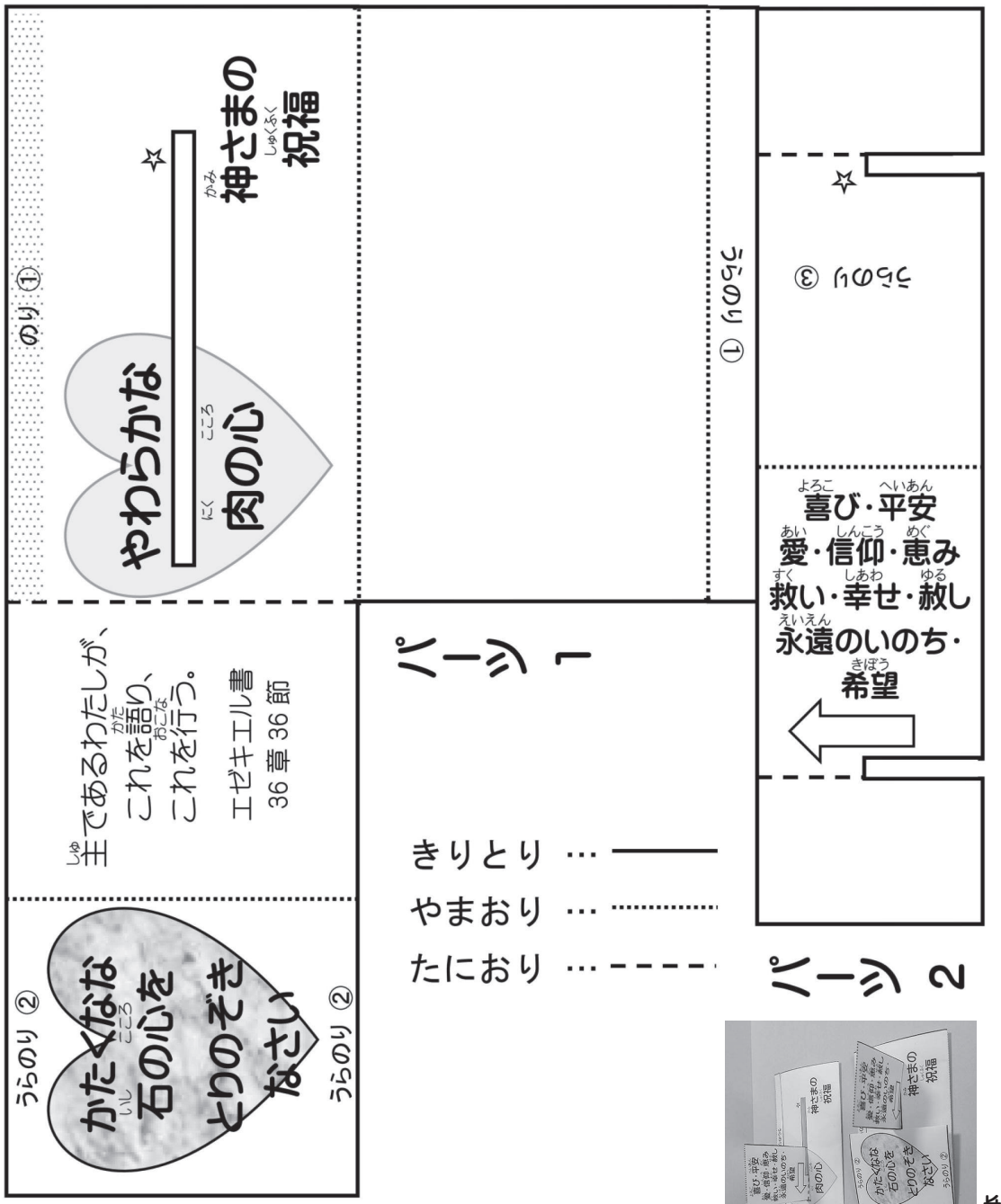
●動作●

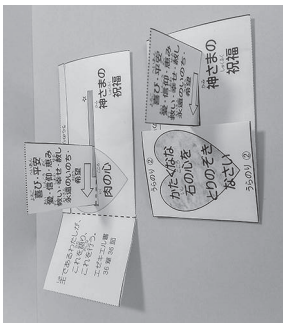
・「石の心」を閉じたままでパーツ2のスライドを☆印に合わせます。この状態で「神さまの祝福」をスライドさせようとしても「心」に届きません。

・「石の心」を取り除き（開き）「やわらかな肉の心」にします。これで「神さまの祝福」が心に届くようになりました。

ワークシート

石の心と肉の心





仕上がり見本

24課

9月12日

聖書の学び

枯れた骨よ、主の言葉を聞け

聖書 **エゼキエル書37章1〜14節**

暗唱聖句 **見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。エゼキエル 37：5**

骨に向かって預言せよ

エゼキエルは、幻の中で霊に導かれて谷に満ちるおびただしい骨を目撃します。「それらは甚だしく枯れていた」（37：2）。枯れた骨とはどんな状態の骨を言うのでしょうか。エゼキエルは、捨てられ放置された骨の多さと同時に、それらがひどく枯れていることに驚いています。これらが生きて動いていたとは想像すらできないほどに、骨はひからびて（岩波訳）いたのでした。その時彼は主の声を聞きます。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」（37：3）。エゼキエルは答えます。「主なる神よ、あなたのみがご存じです」（37：3）。彼にも人としての願いや常識的な思いはあったでしょう。けれども主のご計画だけが成っていくとの確信を持っていたエゼキエルは、「あなたのみ心が、最善が、これらの骨の上に成っていくことを私は信じています」と答えたのでした。そこで主は彼に、これらの骨に向かって預言せよと命じられます。「見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る」（37：5）と。無数の枯れた骨は、精根尽き果てて、絶望の底にうずくまる捕囚民たちの姿でした。彼らは生きることを諦（あきら）めてしまっていたのでした。枯れていた、ひからびていた、としか言い様がないほどに生気（せいき）に欠けていたのです。6節から8節には、エゼキエルの預言の言葉によって物と化していた骨と骨とが近づき、骨格が形作られ、その上に筋と肉が生じて皮膚で覆（おお）われてやがてひとりの人の形になるまでの様子が、CG画像を見るかのように描かれています。

霊に向かって預言せよ

人の形はでき上がっても、「しかし、その中に霊はなかった」（37：8）とエゼキエルは言います。人が何によって生きるのかが示唆（しさ）されています。主はエゼキエルに、「霊に預言せよ」（38：9）と言われました。彼が命じられた通りに預言すると、主の霊が四方から吹いて来て人の形の中に入り、生きた人になって自分の足で立ったのでした。土の塵で作ったものに主なる神が命の息を吹き入れられると「生きる者となった」（創世記2:7）とある通りに、枯れた骨が再創造されて生きる人となったのです。また4節ではエゼキエルは、「枯れた骨よ、主の言葉を聞け」（37:4）と預言しました。天地創造に際し、神が最初に発せられた言葉は、「光あれ」（創世記1：3）でした。またヨハネ福音書にも、「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」（ヨハネ1：3）とあります。主の霊と言葉によって、枯れていた骨は血肉と心を持つ生きた人として次々と生き返ったのでした。「彼らは非常に大きな集団となった」（37：10）。こうして一人ひとりが立ち上がり、彼らが寄り集まってイスラエルの全家へ、信仰共同体へと回復していくのです。

わたしが墓から引き上げる

捕囚地に連行された人々もエルサレムに残された人々も共に、「我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる」（37：11）と、嘆(なげ)きの言葉を口にしていたと思われます。陥落したエルサレムもバビロンの捕囚地も、イスラエルの人々にとっては死が支配する場所、すなわち墓だったのです。彼らは死に呑み込まれようとしていたのでした。そんな人々にエゼキエルを通して主は宣言されるのです。「わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く」（37:12）。主は、霊と言葉とをもってイスラエルの共同体を再創造し、そして故郷の地で住まわせることを約束されるのです。すべては、主こそがイスラエルの神であることを人々が知るためでした。さらに、彼らがみ前に謙(へりくだ)り主の民としてみ心に従いつつ歩むことで全世界が主を知るようになるためだったのです。

準備のための聖書日課			
13日	㊊	創世記2:4後半〜9	命の息を吹き入れられて
14日	㊋	詩編104:24〜35	神の息吹による創造
15日	㊌	イザヤ26:16〜19	死者が命を得る
16日	㊍	イザヤ45:11〜13	造り主なる神を賛美せよ
17日	㊎	ヨハネ1:1〜5	万物は言によって成った
18日	㊏	創世記1:1〜5	光あれ

成人科

● エゼキエルの預言の言葉は独特です。絶望のゆえに生きる気力をすっかり無くしてしまった人々を彼は「枯れた骨」に喩(たと)えました。「枯れた」という言葉が完全な死、絶望感を強調します。肉体は生きていても魂が死んでしまったのではもはや人ではない。ゾッとするほどのむなしさです。このむなしさの正体が何なのか、考えてみましょう。信仰をジグソーパズルの１片に喩えた例話があります。小さな１片でも無ければ絵にはなりません。信仰という１片が私の人生にはめ込まれることでむなしさは消え、生きている私になるのです。

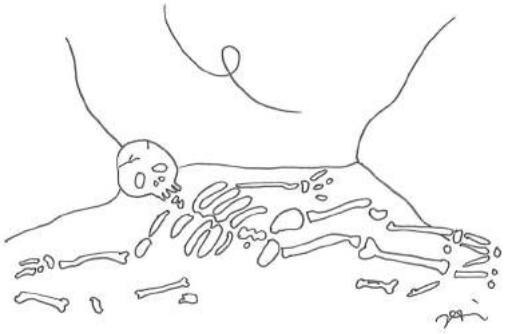
● 10 節は、霊によるイスラエルの再創造の場面です。人はその形に命の息、すなわち神さまの霊を吹き込まれて生きるものとなり、主体的な信仰を持つ者として自立し成長していきます。そのような信仰者たちが神さまを礼拝するために集められ教会を形成していきます。しかし昨年４月以降、多くの教会が会堂での礼拝や集会を休止せざるを得ない状況に陥(おちい)りました。迫害や戦争のためではなく感染症拡大防止のためにです。この機に「集まって礼拝すること」の意義を確認してみましょう。

みんなで聴く聖書のおはなし

枯れた骨よ、主の言葉を聞け

聖書 エゼキエル書37章1～14節

暗唱聖句 見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。
エゼキエル 37：5



25課

9月19日

エゼキエルは幻を見ました。神さまの霊に導かれてある谷の真ん中に降ろされる幻です。そこには何と、骨が積み重なるほどたくさんありました。エゼキエルはあたりを巡り歩き、そのたくさんの骨がひどくひからびて枯れていることに気づきます。その時、神さまの声がしました。「あなたは、これらのたくさんの骨が生き返ると思うか」。死んで朽ち果てて骨になってしまった人々が再び生き返るはずはない、と誰もが思うのではないでしょうか。でもエゼキエルは、「いいえ」とは答えませんでした。彼は、「神さまにはきっとお考えがあるはず。私は人だからそれが何なのかは想像もできないけれど…」そう思いました。それで「その答えは神さまだけが知っておられます」と答えたのでした。

すると神さまはエゼキエルに言われました。「この骨たちに言いなさい。私の言葉を聞きなさい、と。私が霊を吹き込むとあなたたちは生き返る、と」。エゼキエルがその通りに預言すると何と、骨が動き出して組み合わさり、それを筋と筋肉が覆(おお)って皮膚がかぶさり、人の形になったではありませんか。でもそれは人形のようで、生きてはいませんでした。神さまはさらにエゼキエルに言われました。「今度は霊に向かって、『この人の形の中に入ってこれらを生きた人にせよ』と命じなさい」と。そのように預言すると四方から神さまの霊がやって来て人の形の中に入り、預言の通りに骨は人になったのです。谷の中や周辺にあったたくさんの骨はすべて、生き返って自分の足で立ったのでした。

その頃イスラエルは、捕囚地に住む人々も町に住む人々も、エルサレムの都が滅亡したことを知ってすっかり力を落としてしまっていました。希望をなくし生きる気力を失って、命の抜け去った枯れた骨のような有様でした。神さまはそんな人々に、命の息である霊と、すべてのものを創られた神の言葉を与えて、新しいイスラエルの群れにしようと考えておられたのです。神さまはエゼキエルに、そんな人々に希望のメッセージを語りなさい、と言われます。「我々の望みは失せ、我々は滅びる」と絶望の言葉を口にする人々に、神さまがあなた方を生き返らせてくださる、住んでいた場所に再び住まわせてくださると語りなさい、と言われます。神さまの霊と言葉は、人々をゆっくりとしかし確かに、回復させてくださいます。イスラエルの人々は生き返り、神さまに従う人に、新しい神の民の群れになっていくのです。

枯れた骨よ、主の言葉を聞け

青少年科

聖書 **エゼキエル書37章1〜14節**

暗唱聖句 **見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。**
エゼキエル 37：5

聖書から…

長い捕囚生活で、人々の望みも消え失せてしまいました。自分らしく、生き生きと生きることは夢のまた夢、制限ばかりの日々。仲間もたくさん死んでしまいました。そんな経験を積み重ねていたので、夢や希望など抱けるはずもありません。

枯れた骨…それは実際に、殺された仲間の姿であったでしょうし、自分自身のことでもあったでしょう。生きてはいても、カラッカラに干上がっている。生きているのに死んでいるよう。自分をすっかり亡くして、亡霊のごとく生きている。いつ終わるとも分からない、そのような日々でした。生きるのが嫌になる、生きる希望が持てない、生きる元気が出ない、生きる意味がわからない等、きっと誰しもがそのような思いを抱いた経験があるのではないでしょうか。

「見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る」（37：5）。主の言葉を聞いたときに、なぜかわからないけれども、枯れた骨であった者が生き返りました。主の言葉は、生命力に満ち溢れていて、枯れた骨すら、元気よく、生きた人間へと生き返っていきました。主の言葉には、絶望から希望へと、180 度変わるような希望の力が満ち溢れているのです。

分かち合おう

- なかなか思い通りにはいかない毎日や希望がなくなる経験を重ねていくと、どんどん無気力になり、あたかも自分自身が枯れた骨のように思えるようになります。「生きる意味や目的が分からない」と思うこともあるかもしれません。けれども、人間の力によるものではなく、主の言葉によって奮い立たせられる経験もあるのではないでしょうか。主の言葉によって生きる力を与えられた経験がある、そういう証しのある方が身近におられるかもしれません。「主の霊が吹き込まれる」とは、どのようなことだと想像しますか？ 今日の聖書は私たちに何を語りかけているでしょうか？

- 「枯れた骨」に、虚しさや儚（はかな）さ、うらさみしさを思います。つい目を背けたくなりますが、エゼキエルは、枯れた骨の幻を見ながら、神さまと対話をしました。生きることに希望を失いそうになる私たちの前には、枯れた骨に息を吹き込み続ける神さまがおられます。今も、絶望の中で主の言葉を必要としている人がたくさんいます。絶望の中で希望をみることの困難を覚えつつも、置かれたところで、神さまと対話する者でありたいと願います。

幼小科

枯れた骨よ、主の言葉を聞け

聖書 **エゼキエル書37章1〜14節**

暗唱聖句 **見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。エゼキエル 37：5**

聖書から…

神さまはエゼキエルに枯れた骨々を見せ「この骨が生き返るか?」と尋ねました。エゼキエルは「神さまだけがご存じです」と答えます。すると神さまは、この枯れた骨々を生き返らせると言われたのです。エゼキエルは神さまの言葉に従い、枯れた骨々に向かい「主の言葉を聞け」と宣言しました。すると骨々は集まり、筋や肉や皮膚が生じ人の姿になりました。そこに神さまの霊が吹き込まれると、ついに枯れた骨々は生き返ったのです。この出来事を通し、滅んだように見えるイスラエルも再び生き返るのだと教えられたのです。

25課

9月19日

活動①

「カラカラ谷の招き指」

●準備●ハサミ、セロテープ、真っ直ぐ部分が 15cm 以上のストロー２本

①参考図１を参考に 12㎝のストロー６カ所に切込みを入れます。

②参考図２を参考に 15㎝のストローを縦に３分割します。

③参考図３を参考に２のストロー板を１の上部から差し通します。

④参考図３を参考に、ストロー板の末端 1㎝くらいを１ストロー上部に折り返しセロテープで固定します。

⑤切り込みが入っている方向にストローを何度か曲げて「クセ」をつけます。

＊リーダーが事前に切り込みを入れておいてもいいでしょう。

●遊び方●

ストロー下部を持ちストロー板を引くと「骨の指まねき」に見えます。

活動②　　ワークシート

「死からいのちへ」

●準備●ワークのコピー、ハサミ、カッター（取扱い注意）、マット、両面テープ（のり）、セロテープ

①「イラスト」とパーツ１を切り取り①線でやまおり。裏面を貼り合わせた後、もう一カ所の折り線を山折りにします。

②パーツ２と３を切り取り、パーツ３を山折りにし裏面を貼り合わせます。

③パーツ２のきりぬき部を切り抜き、それぞれ折り目を付けます。

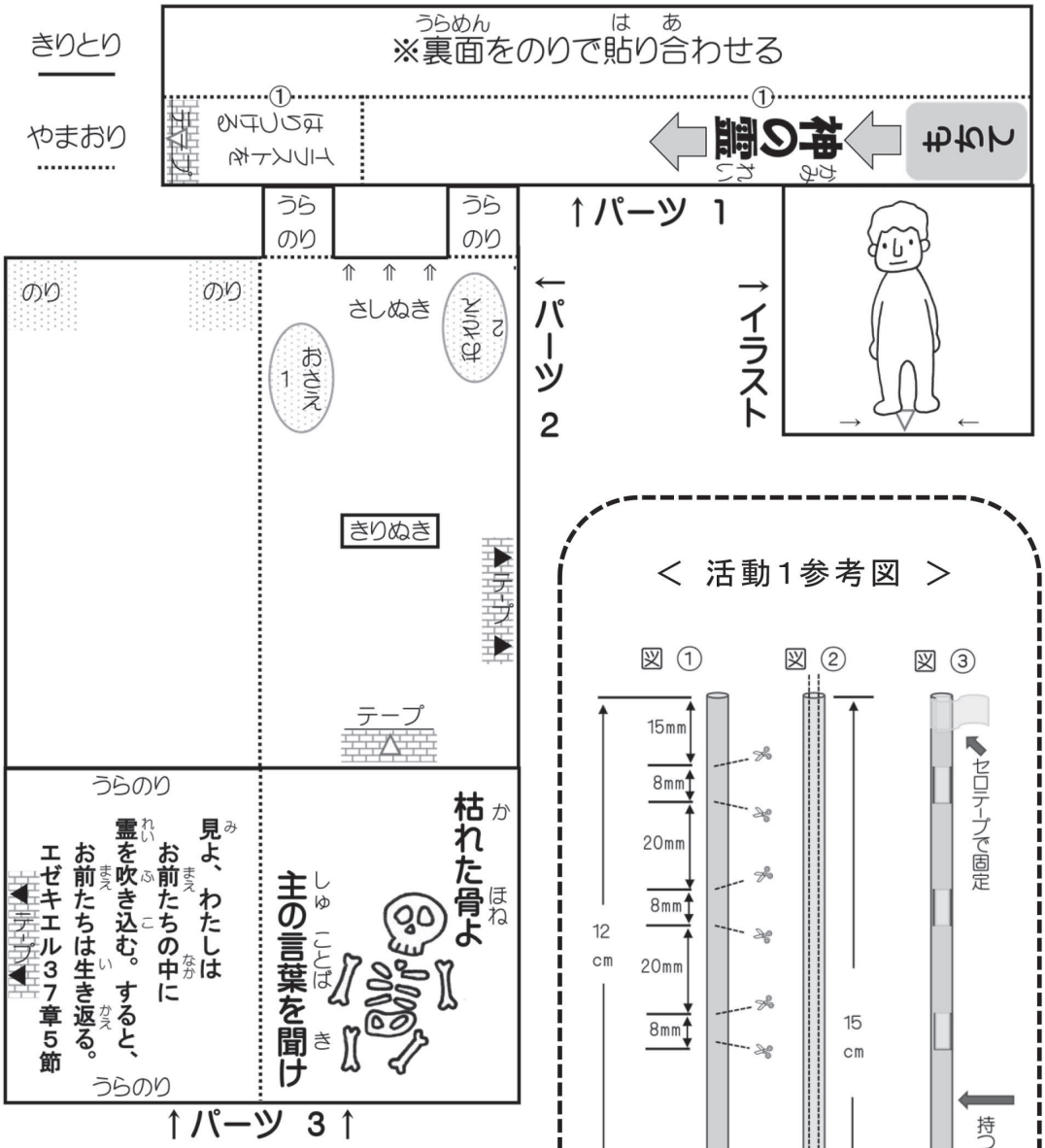
④パーツ２とパーツ３のテープ位置を▲で合わせ、網掛け部分にセロテープを貼ります。

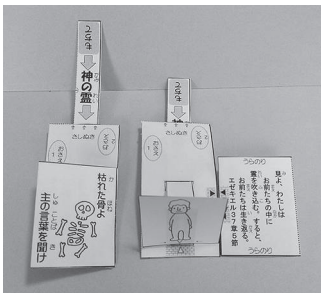
⑤パーツ１のもちて側からパーツ２のきりぬき部分を通しテープ位置を△で合わせ、網掛け部分にセロテープを貼ります。

⑥パーツ１のイラストをはりつける部分に「イラスト」をのり付けします。

⑦パーツ１をさしぬき部ではさむように、パーツ２のうらのり部二カ所とのり部二カ所をそれぞれ貼り合わて完成。

死からいのちへ





仕上がり見本

聖書の学び

真（まこと）の神殿の幻

聖書　エゼキエル書ル43章1〜12節

暗唱聖句　わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。
エゼキエル 43：7

26課　9月26日

再びの主の栄光

エゼキエル書 40 章から 48 章には、イスラエルに告げられた救いの約束の完成した姿としての新しい神殿の幻が描かれています。「我々が捕囚になってから 25 年、都が破壊されてから 14 年目」（40：1）、エゼキエルは幻によってイスラエルの地に伴われ、高い山の上に下ろされ、そこから新しい神殿を見つめています。そして麻縄と計り竿を持った人から、「自分が見聞きし、また私が示すことを心に留めるように、それらをイスラエルの家に告げるように」と命じられるのです。その人は、新しい神殿の細部に至るまで一つひとつを見せては寸法を計測しながら行き巡りました。それからその人はエゼキエルを東に向いている門へと導きました。「見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から到来しつつあった」（43：2）。彼はそこで圧倒的な主の栄光の顕現（けんげん）に見（まみ）えたのです。それは大水のとどろきのような音を伴って大地を輝かせた、とあります。かつてエゼキエルはその幻をケバル川の河畔で見ていました。エゼキエルは今、あの主の栄光が再び東から到来し、東の門から神殿の中に入るのをその目で見ているのです。どんなにか感動したことでしょう、彼は思わずひれ伏してしまいます。そんなエゼキエルを霊が引き上げ中庭へと導きます。「主の栄光が神殿を満たしていた」（43：5）。ついに、主がエルサレムに、神殿に、お帰りになったのです。

聖なる神殿

「わたしは神殿の中から語りかける声を聞いた」（43：6）。その時そばには彼を連れ回って案内役をした人が立っていましたが、その声はこの人のものではありませんでした。主ご自身が、神殿に満ちる栄光の中からエゼキエルに語りかけられたのです。主は、新しい神殿は自らの王座のあるべき場所、足の裏を置くべき場所だと言われます。それは「わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む」（43：7）という約束でもありました。37 章 26、27 節の回復の預言がいよいよ成就するのです。「二度とイスラエルの家は、民も王たちも、淫行によって、あるいは王たちが死ぬとき、その死体によって、わが聖なる名を汚すことはない」（43：7）。イスラエルは、今後決して主を怒らせたり悲しませたりしない、二度と主に背いてそのみ名を汚すことをしない。人々は繰り返しこのことを心に刻み込まなければなりません。人の心は弱く、しばしば迷い、揺れ動くからです。主ご自身がこれを語られるところに、イスラエルへの期待が感じられます。

イスラエルの家がなすべきこと

主はエゼキエルに、彼が幻の中で見てきた神殿のことをイスラエルの人々に示し、それによって人々が自分たちの今までの生き方が神の前に恥ずべきもの、裁かれるべきものであったことを悟らせなさい、と命じられます。

そして彼らが自分たちの恥を覚えたなら、神殿の計画と共に掟と律法を知らせ、彼らにそのことの一切を守り行うようにさせなさい、と言われます。イスラエルは捕囚民、残留民の区別なく、ひとつの新しい神の民となる。その中にこそ主が共に住まわれる。この幻を、清められ新しくされたイスラエルは全家で共有する必要がありました。神殿の詳細な計画が示されることは、自分を測るための規範が与えられることでした。正しい物差しで自らを測ってこそ、正しく矯(た)められてふさわしい形へと整えられていきます。また人々は神殿の計測値を知るほどに、主の神殿への思い入れに触れたことでしょう。それは自分たちへの主の思い入れ、イスラエルへの主の愛を感じることでもあったと思われます。愛されてイスラエルは、人は、変っていくのです。「神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり」（黙示録 21：3）。ヨハネもエゼキエルの見た幻と同じ幻を経験しています。私たちもまた同じ幻を共有する者なのです。

準備のための聖書日課			
20日	月	エゼキエル 37:15〜28	永遠の契約を結ぶ
21日	火	エゼキエル 39:22〜29	主なる神を知るために
22日	水	エゼキエル40:1〜5	新しい神殿の幻
23日	木	エゼキエル 44:23〜27	汚れたものと清いものの区別
24日	金	コリントニ2:14〜17	神に献げられた良い香りとして
25日	土	ヨハネ黙示録 21:22〜22:5	神の栄光のなかで

成人科

● エゼキエルはしばしば「汚(けが)れ」という言葉を用いました。これは宗教的汚れ、神さまの完璧な聖性の対角にある罪の汚れを意味するものであり、公衆衛生上の不潔や病理学的な汚染を指すものではありません（レビ記 13 章参照）。「汚れ」という言葉は時に人の命をも奪い兼ねません。言葉に対する正しい知識を持つと共に、人を傷つけるような言葉の用い方に対しては撤回(てっかい)を求める勇気を持ちたいと思います。

● 神さまはエゼキエルに神殿の幻を示されました。彼はその細部までを測定する人に伴われて神殿をくまなく巡りました。神さまの手による神殿を知るほどに、エゼキエルは被造物に対する神さまの愛を感じ愛に触れていったことでしょう。「人は触れるものに似る」と言われます。キリスト者はみ言葉に触れる者。み言葉に触れることでイエスさまの愛を知り愛に触れ、愛を証しする者となるのです。キリストの愛と香りを放つ器としてこの世に置かれていることの感謝を分かち合ってみましょう。

真の神殿の幻

聖書 エゼキエ書ル43章1〜12節

暗唱聖句 わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。
エゼキエル 43：7

エルサレムの都が滅び、神殿が崩壊してから長い年月が経っていました。ある日エゼキエルは、夢うつつの中で新しい神殿の幻を見ます。神さまがエゼキエルにその幻を与えて、彼がイスラエルの人々にそのすべてを語り伝えるようにされたのです。

エゼキエルは最初に、新しい神殿と聖域の全体を見渡すことのできる高い山の上に連れて行かれました。そこには麻縄と計り竿をもった人が立っていました。そしてエゼキエルを伴って神殿の隅々に至るまで寸法を測ろうとしていました。計測をしながらその人は、エゼキエルを東に向いている門に導きました。エゼキエルはそこで神さまの栄光を見ることになるのです。彼は今までに２度、それを見たことがありました。その栄光がエルサレム神殿の東の門から去って行ってしまうのも見ていました。それから時が過ぎ、今あの時の栄光が同じあの東の門から入って来ようとしているのです。エゼキエルは感動のあまり、その場にひれ伏してしまいます。

彼は霊に運ばれて、神殿の内庭へとやってきました。神殿が栄光で充ち満ちているのを見ていると、その中から声がしました。神さまご自身が、エゼキエルに向かって直接語られたのです。「わたしはここで、イスラエルの人たちの中で、いつまでも住む」。神さまが傍に居てくださることをいつも感じることができるなんて！ 何という喜び、感動でしょうか。

そうであるならば、イスラエルの人々はますます清められなければなりません。もう二度と偶像に惹かれてそれを礼拝したり、神殿を汚すような行為をしてはならないのです。神殿の崩壊、都の陥落、捕囚…。辛く苦しい経験を通して、イスラエルの人々は神さまと共に住むにふさわしく整えられてきました。それでもまだ清められ、正されなければならないのです。神さまは、人々にそのことを気づかせ、悔い改めて神さまに立ち帰るようにと、神殿の隅々まで計測をさせられるのです。人々は聖なる神殿を丁寧に測ることで自分を計り、罪を恥じる者へと変えられていくことでしょう。神さまはエゼキエルに、イスラエルのその歩みに応じて教え、示し、守らせる事柄を語られます。神さまはイスラエルを愛されます。イスラエルを愛されると言うことはすべての人を愛される、ということです。私たちはこんなにも神さまに愛されているのです。

真（まこと）の神殿の幻

青少年科

聖書 エゼキエ書ル43章1〜12節

暗唱聖句 わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。
エゼキエル 43：7

聖書から…

捕囚になってから 25 年、神殿を失ってから 14 年経ったある日のことです。そんなにも長い年月を過ごしていたならば、神殿での礼拝がどのようなものだったのか記憶も薄れてしまいそうです。世代も交代する頃です。「神殿での礼拝？ 上の世代から思い出話を聞いてはいたけど、どうやって建てるんだ？ いまいちイメージがつかめないな」。そんなつぶやきが聞こえてきそうです。主なる神さまは、エゼキエルに幻を見せます。エゼキエルが見たのは、東から主の栄光が到来し、神殿を満たしている幻でした。現実には神殿はありません。けれども具体的に、どこに王座があるのか、どこが出入り口なのか、よく見て計測して人々に示しなさい、と神さまは言われます。そして何よりもエゼキエルが感動したのは、建物自体ではなく、そこに主の栄光が満たされていたこと、つまりそこに〝主がおられること〟でした（「**聖書の学び**」より）。

もはや神殿を復元できる人はいなかったでしょう。漠然（ばくぜん）とした神殿の思い出があっても、どう組み立てて、神さまの神殿を人間が再建することができるのか、どうしたら神さまが喜ばれる礼拝を捧げることができるのか、イメージすることもできなくなっていたと思います。けれども、幻で示された神殿の設計図を見たら、神さまが臨在され、自分たちが礼拝する姿を、ありありと想像することができます。神さまは真の神殿の幻を通して、行き詰まっている彼らの背中を力強く押しておられます。

分かち合おう

- エゼキエルは幻の神殿を測って書き記しました。神殿とは私たちには馴染みが薄いですが、神さまが臨在されて、人々が礼拝する場所で、教会の会堂のようなイメージです。皆さんが集っている教会の会堂は、誰と共に礼拝を捧げるために、どのような願いを込められて具体的に今の会堂となっているのでしょうか？

- 今日の聖書から「礼拝」とは何か？ ということを考えさせられます。
エゼキエル書の学びを振り返ってみて、何を神さまが怒られたのか？ どういうことが罪なのか？ 悔い改めるとは何か？ 神さまは私たちに何を求め、何を喜んでくださるのか？
これらを振り返ってみるときに、礼拝にとって大切なものが見えてくるような気がします。礼拝が「形だけ」にならずに、心からの私たちの礼拝であるといいですね。

幼小科

真（まこと）の神殿の幻

聖書 エゼキエ書ル43章1〜12節

暗唱聖句 わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。
エゼキエル 43：7

26課 9月26日

聖書から…

エルサレムの町も神殿も完全に壊されました。もうイスラエルは滅亡した…絶望的な中で神さまはエゼキエルに「神殿を建て直す」という将来を約束されます。幻の中でエゼキエルは新しい神殿の隅々までを測る人について行きました。神殿の寸法を丁寧（ていねい）に隅々まで測るその行為を通して、神さまの完全なる義・間違いの無い計画・変わることの無い愛が示され、同時に「完全で永遠なる神さま」に対してイスラエルの人々が、いかに罪深く歩んで来たのかが知らされます。完全な神さまを知る時、人々は自らの罪に気づかされ、悔い改めへと歩み出すのです。悔い改めにより真に清められたその神殿に、神さまは「とこしえに住む」と約束されるのです。

活動①

「測ってみよう！」

●準備●メジャー、紙、鉛筆、「測るもの」の指定メモ

①２〜３人１組のグループに分かれます。それぞれのグループに準備した道具を渡します。

②事前にリーダーが選んだ教会内の「測るもの」の指定メモを各グループに渡します。

③それぞれで測り、寸法を紙に書き込みます。

＊注意：鋼板メジャーは指を切ったりする場合もあります。悪ふざけをしないように注意を促しましょう。または裁縫用のビニールメジャー等を使用してください。グループには目盛りを読めるメンバーかリーダーが必ず付いてください。

＊測るもの例：玄関の扉、講壇の大きさ、分級室の広さ、廊下の長さなど。

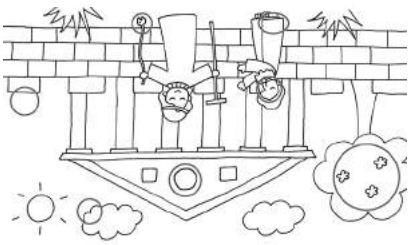
＊「測るもの」の指定メモに、イラストや写真なども掲載し、どの部分を測れば良いかまでを記しておくと、具体的な幅・高さ・奥行を測りやすくなります。丁寧に測ることで、どんなことが分かってきたでしょうか？

活動②　ワークシート

「間違いさがし」

エゼキエルは新しい神殿の幻を、神さまから見せていただきました。神殿のあるべき姿を測るための麻縄と測り竿をもった人が、神殿の隅々までを案内してくれました。おや？ 上の絵と下の絵で、少し違う部分がありますね。全部で７カ所の間違いを探してみましょう！上下の絵を見比べて、上の絵と違う下の絵の部分に「〇印」をつけましょう。

ワークシートの解答



ワークシート
間違いさがし

幼小科ワークシート

上下の絵には違う部分が７ヶ所あります。
よく見比べて、下の絵の違っている部分を〇印で囲みましょう！

＜正しい絵＞

＜まちがい＞

暗唱聖句手話

今号の聖句 エゼキエル書 37 章 5 節

見よ、

「確かに」（まことに）
指先上向の掌の
人差指側を顎に当てる

わたしは

「わたし」
人差指で自分の胸をさす

「神」
右上に指文字「か」
中指腹に親指を当てた3指

お前たちの

「あなた」
人差指でさす

「みんな」
掌を下に向けて水平に回す

中に

「中」
指先を斜め前に向けた
手の内側を人差指でさす

霊を

「命」
右手こぶしを左胸に当てる

「息」
人差指・中指の2指を

鼻の穴に向け近づける

手話訳 塩山幸子（茂原バプテスト教会員・手話通訳士）

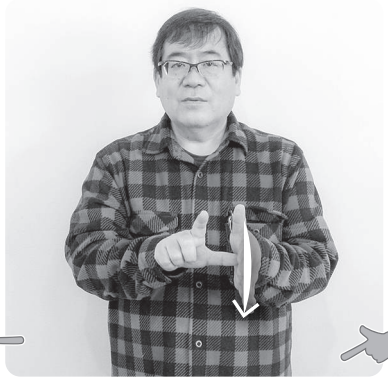
見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。	9月19日　25課暗唱聖句

吹き込む。

「吹き込む」
握った手を口元から

前に出しながら指を開く

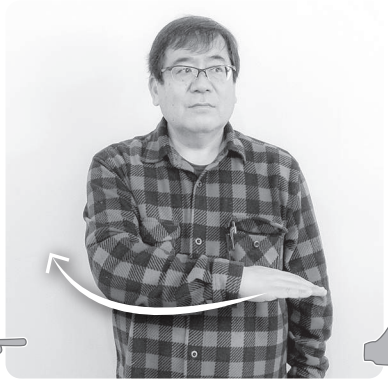
すると、



「時」
左手の平に右親指をあて

お前たちは

前に伸ばした
人差指を下におろす

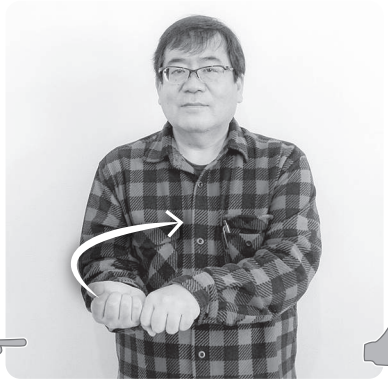


「あなたたち」

生き返る。

「生きる」
両手拳を握り軽く肘を張り

左右に広げる



「回復」
両拳を重ねて寝かせ

起こす

手話表現　小舘和彦（茂原バプテスト教会員・ろう者）

暗唱聖句カード 新共同訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

14課　7月4日

この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。御言葉を行う人になりなさい。

ヤコブ 1：21 ～ 22

15課　7月11日

憐みは裁きに打ち勝つのです。

ヤコブ 2：13

16課　7月18日

上から出た知恵は… 憐みと良い実に満ちています。

ヤコブ 3：17

17課　7月25日

農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。

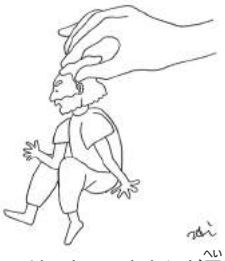
ヤコブ 5：7

18課　8月1日

彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。

エゼキエル 2：7

19課　8月8日



そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。

エゼキエル 8：4

20課　8月15日

そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。　**エゼキエル 13：9**

21課　8月22日

悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。

エゼキエル 18：30

22課　8月29日

わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。

エゼキエル 33：11

23課　9月5日

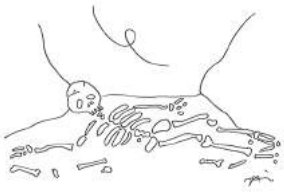
わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。　**エゼキエル 34：15**

24課　9月12日

主であるわたしが、これを語り、これを行う。

エゼキエル 36：36

25課　9月19日



見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。

エゼキエル 37：5

26課　9月26日

わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。

エゼキエル 43：7

暗唱聖句カード口語訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- http://www.bapren.com/

14課　7月4日

御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。そして、御言を行う人になりなさい。

ヤコブ 1：21 ～ 22

15課　7月11日

あわれみは、さばきにうち勝つ。

ヤコブ 2：13

16課　7月18日

上からの知恵は…あわれみと良い実とに満ち　**ヤコブ 3：17**

17課　7月25日

農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。

ヤコブ 5：7

18課　8月1日

彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼らに語らなければならない。

エゼキエル 2：7

19課　8月8日

そこに、わたしがかの平野で見た幻のようなイスラエルの神の栄光があらわれた。

エゼキエル 8：4

20課　8月15日

そしてあなたがたはわたしが主なる神であることを知るようになる。　**エゼキエル 13：9**

21課　8月22日

悔い改めて、あなたがたのすべてのとがを離れよ。

エゼキエル 18：30

22課　8月29日

わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。

エゼキエル 33：11

23課　9月5日

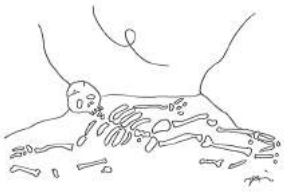
わたしはみずからわが羊を飼い、これを伏させると主なる神は言われる。　**エゼキエル 34：15**

24課　9月12日

主なるわたしがこれを言い、これをなすのである。

エゼキエル 36：36

25課　9月19日



見よ、わたしはあなたたちのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。　**エゼキエル 37：5**

26課　9月26日

これは…わたしが永久にイスラエルの人々の中に住む所である。　**エゼキエル 43：7**

次号

聖書教育

特　集

クリスマスメッセージ
渡辺牧人

キリスト教教育週間
NCC 教育部

連　載

世界バプテスト祈祷週間によせて
吉髙 路

ともに分かち、ともに生きる
萩原永子

ご意見、ご感想をお待ちしております。
FAX●048-883-1092　Eメール●seishokyouiku@bapren.jp（編集担当）

聖書教育

● 2021 年 5 月 20 日発行・発売　●定価 1,200 円（税込）

発行人　中田 義直
発　行　日本バプテスト連盟
〒 336-0017　埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4
TEL : 048-883-1091　FAX : 048-883-1092
日本バプテスト連盟 HP　https://www.bapren.jp/
聖書教育 HP　https://www.bapren.com/
ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp
郵便振替口座 00150-9-192579

印刷　ニューライフミニストリーズ（新生宣教団）

●内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。
●ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。
●聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。
©2021 日本バプテスト連盟
●乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

●表紙　三浦あや
●みんなで聴く聖書のおはなしカット　香月 藍
●レイアウト　JC ユニット
●幼小科ワークシート　吉﨑 愛

表紙「ささやかな聖所～つながり合う礼拝へ～」